

戦争の結果

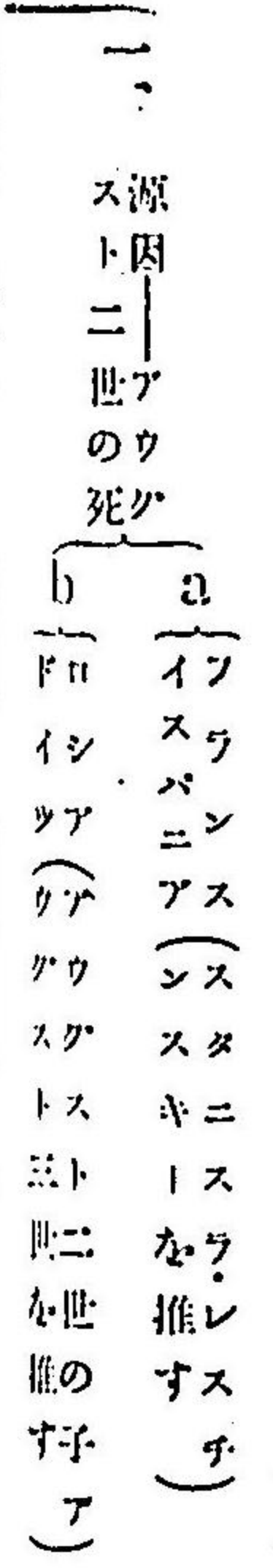
(二) ロシアはフィンランドをスウェーデンに還附し、且つ二百萬ターレル(約四百萬圓)を辯償すること。戦争の結果、かくてロシアは北方に海を占め、版圖を擴め、國勢頓に富強となりて威を東ヨーロッパに耀かし、之に反してスウェーデンは國土縮少し、勢威また振はず、プロシア漸く興隆し、ポーランド全く衰頹に向へり。

ペテロ大帝の死

ペテロ大帝後のロシア ペテロ大帝英邁の資を以てロシアを興隆し、威名を列強に轟かし、一七二五年五十三歳を以て死し、皇后カタリナ其後を嗣ぐ、尋て死し、嫡孫ペテロ二世立ちしが、在位三年にして夭し、子なく、大帝の姪アンナ位を嗣げり。

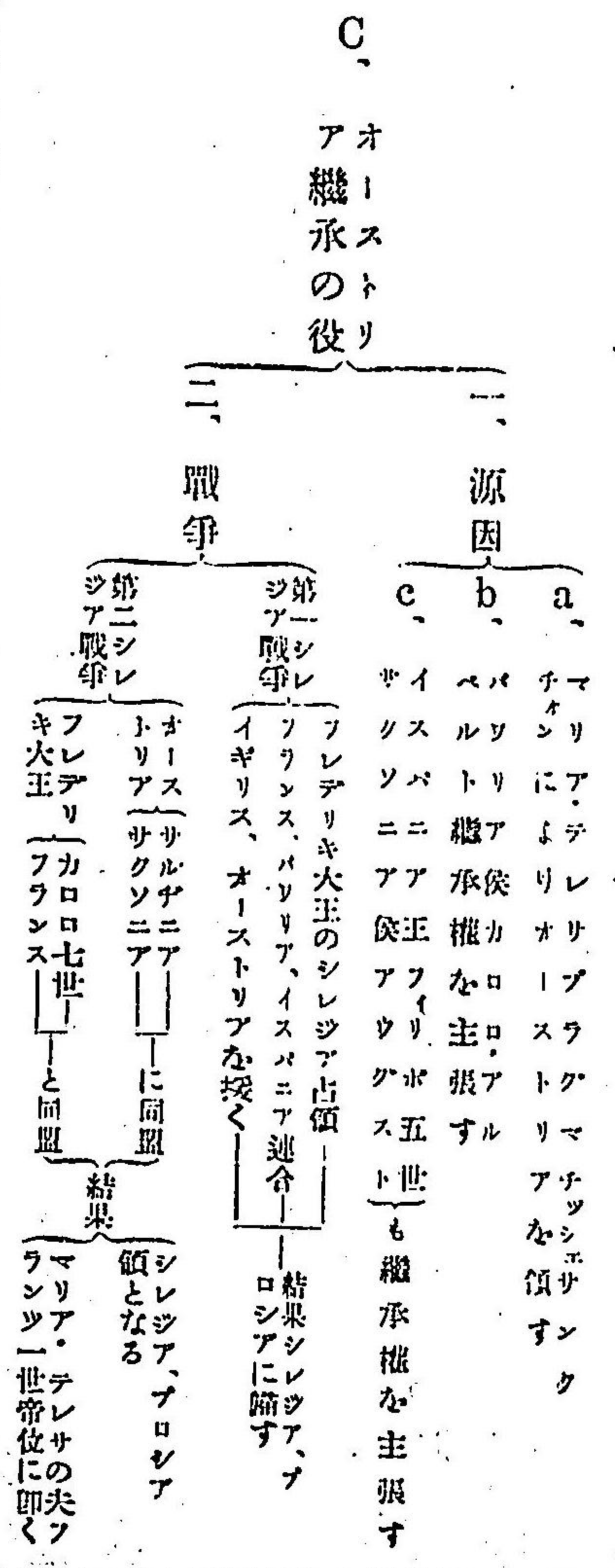
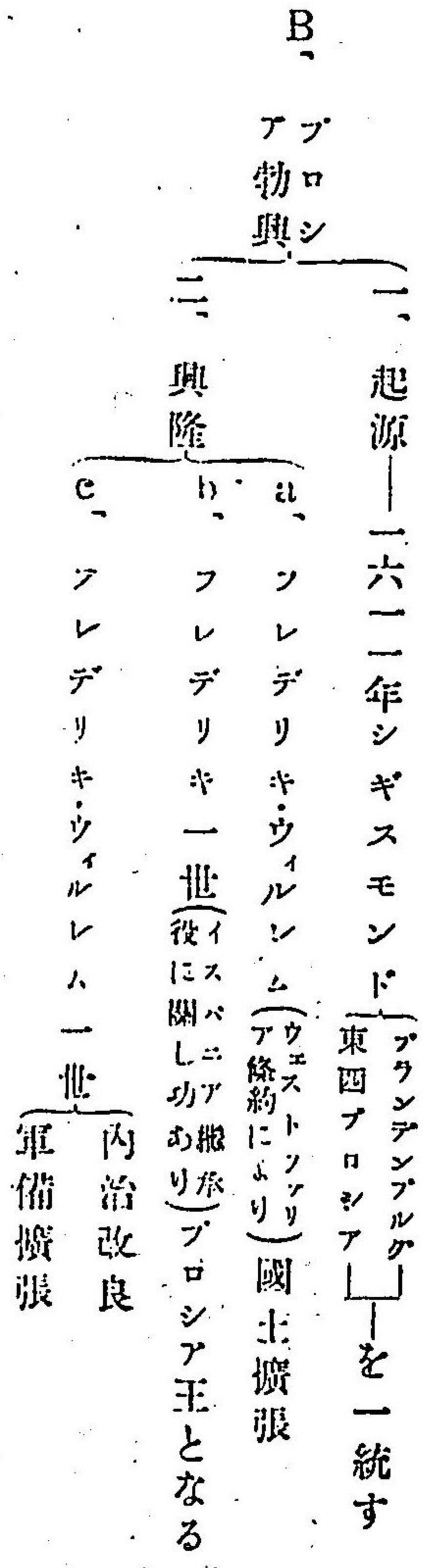
第四十七章 ポーランド、プロシア、オース

トリア継承の役 七年戦役



A、ポーランド継承の役

- 一、戦争—フランス軍勝利
- 二、結果—ウイーン條約



一、原因
a、プロシアの隆昌
b、マリア・テレサの恢復

D、七年戦役 (第三シレジア戦役)
二、戦争
フレデリキ大王 初め連勝
後連敗 次で復活
オーストリア疲弊

三、結果 Ⅱ フベルツスブルグ條約
a、プロシアの領確定
b、マリア・テレサの子

ポーランド継承の役 一七三三年ポーランド王アウグスト二世死す

継承の争起る
るや、王位継承の問題盛に起り、葛藤結て解けず、其候補選定運動は遂に二派に分れたり。(一) ロシア女帝アンナはドイツ帝カロー六世と共に先王アウグスト二世の子アウグスト三世を推し、(二) フランス王ルイス十五世はイスパニアと連合して、さきにスウェーデン王カロー十二世に擁立せられたるスタニスラ・レスチンスキを選ばんとし、ポーランドの貴族も双方に分れて之に加盟し、終に延きてヨーロッパの大戦争となれり。●戦争
ロシアは兵をポーランドに送り、サクソニアの兵と共にスタニスラをダ

結果
ウィーン條約

ンチヒに圍む、フランス乃ちイスパニアと合して之に抗し、鋒をイタリアに向け、スタニスラの敗れしをも顧みず、速りにミラノ、ナポリ、シチリアを占領し、エウゼニオ將軍の軍を連破してオーストリアの勢を殺ぐ。●結果
是に於てドイツ帝大に恐れ、一七三五年ウィーンに假條約を結び、一七三八年之を確定して、平和の局を結ぶに至れり。其條項は、(一) スタニスラ・レスチンスキは王位相續の權を棄て、其賠償としてロレーン侯となり、(二) ロレーン侯フランツ・ステファン (Franz Stephen) はトスカナを得、(三) オーストリアはナポリ、シチリア、ニルバ (Elba) をイスパニアに譲り、賠償としてバルマ、ピアチェンツァ (Piacenza) を取り、(四) フランスはブラグマ、チッセ、サンク・ジャン (Pragmatische Sanktion) の擔保の任に當れり。

プロシアの勃興

プロシアとはブランデンブルグ侯國とプロシア公國との合併したる名稱なり、プロシアはもとチUTTON 騎士の領地なりしが、一四六六年其西半はポーランドに屬し、東半はドイツの附庸となる、一五二五年に至りブランデンブルグの公子アルベルト、東部プロシアを得て之を領し、後一六一一年に至りてアルベルトの義子なるブランデンブ

源プロシアの起

プロシア王国の基礎成る
フレデリキ
ウイレルム

フレデリキ一世

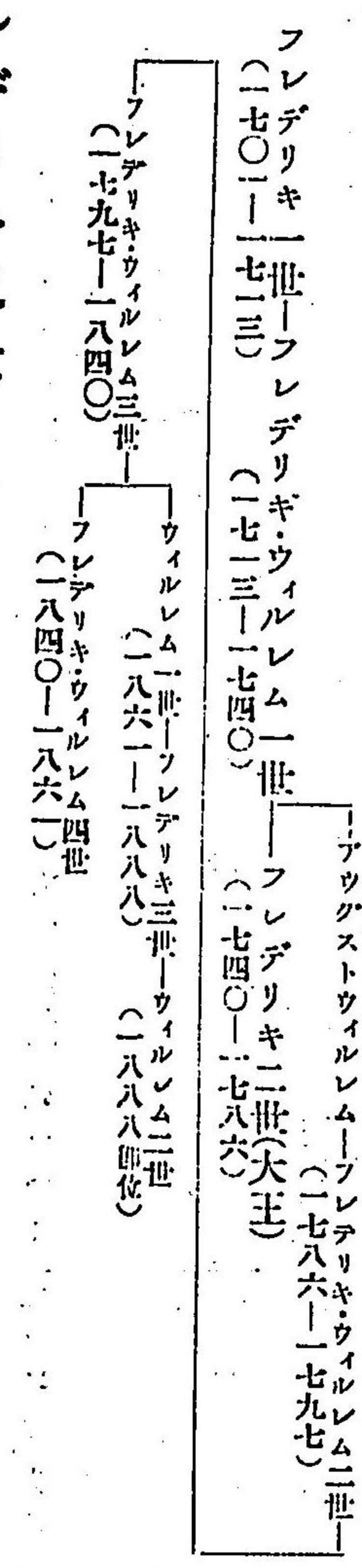
ルグ侯シギスモンドは東西プロシアを一統し、ブランデンブルクと合併して始めてプロシア王国の基礎を建てたり。●國勢興隆 一六四〇年シギスモンドの子フレデリキ・ウイレルム (Frederick William) 選帝侯の位に登るや、内政の整頓に力を盡し、軍備を整へ、ウエストファリアの條約によりて領土を擴張し、スウェーデン王カロロ十世を助けてポーランドを伐ち、プロシアの獨立を確定せり。一六八八年其子フレデリキ三世位を繼ぎ、イスバニア王位繼承の役にドイツ帝レオポルド一世を助け、其功を以て一七〇一年プロシア王となり。●フレデリキ一世 と稱す、是に於てブランデンブルグ選帝侯國は一躍してプロシア王國となれり。フレデリキ一世はホーエンツォルン (Hohenzollern) 家の始祖にして、都をケーニヒスベルグ (Königsberg) よりベルリン (Berlin) に遷し、大に文學、技藝を奨励せり。一七一三年フレデリキ一世死し、子●フレデリキ・ウイレルム一世位を繼ぐ、性剛強、勤儉尙武を勵み、文學、美術を喜ばず、身體の長大にして力強きものを招集して財を吝まらず、遂に二千四百人を得て●ポツダム (Potsdam) 巨兵 と稱する一聯隊を組織し、其他大に軍備を擴張し、勇猛なる

フレデリキ
ウイレルム一世の治蹟

フレデリキ二世

フレデリキ二世に就て
知る所
二、東京
三、六、高
商三六
せ(三六)同
三七)

アンハルト・デッサウ (Anhalt Dessau) 伯レオポルドを都督となせり。王また勤儉忠實の能吏を任用し、普通教育を勵行し、農工商業を振起したれば、國富み兵強く、四隣の憚る所とりぬ。●ホーエンツォルン家系



フレデリキ二世 一七四〇年フレデリキ・ウイレルム一世死し、子フレデリキ二世位を繼ぐ、王幼にしてフランス婦人の教育を受く、故を以て常にフランスの文化を慕ひ、隨てまた深く音樂を好む。父王初めイギリス王ジョージ二世の女を以て王に配せんとす、王之を嫌ひ拒絶して父王の怒に觸れ、逃亡して跡を晦まさんとして捕へられ、軍法會議の結果獄に墜がれ、將に死刑に處せられんとし、父王の怒解くるに至て漸く赦されぬ。尋てブラウンシュヴァイヒ (Braunschweig) の公主を娶り、プロシア國の軍事に參與



フレデリキ大王



ントンジョウ

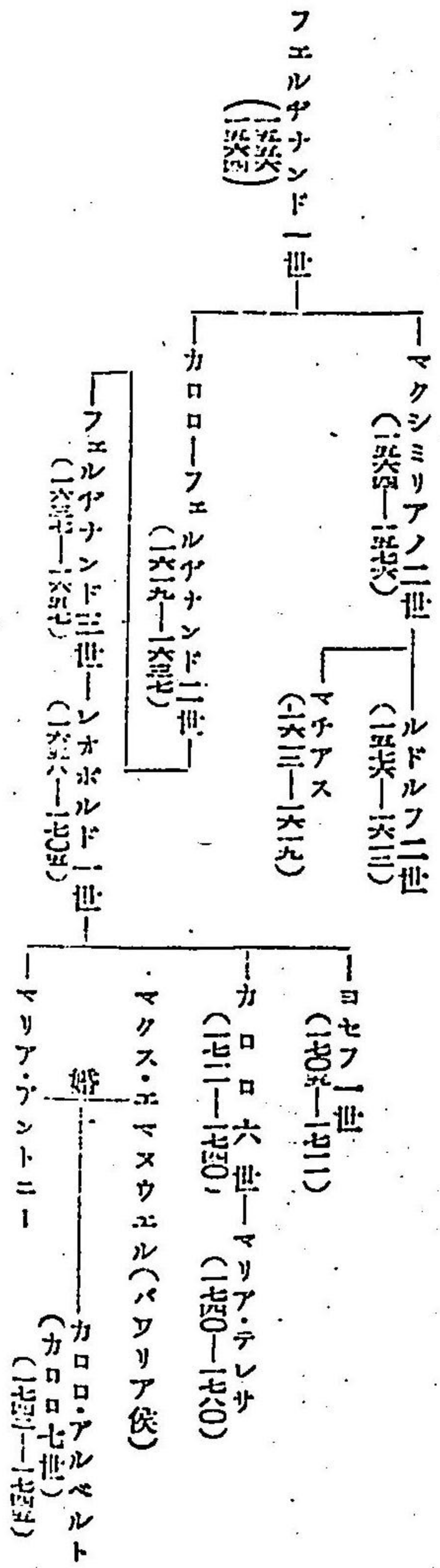


世二ナリタカ

し、またボルテール (Voltaire) 等のフランス文豪に交り、大に其見識を高め、後ポランダ継承戦役に出陣して勇名を轟かせり。位に登る時年二十八、父祖が經營せる國庫充實の後を受け、兵馬また精練なりしかば、是によりて稀世の偉功を奏するに至れり。

オーストリア継承の役 ●源因 ドイツ帝カロー六世男子なきを以

て、一七一三年プラグマチックシエクシオンといふ家憲を發して、オーストリア全領を其女マリア・テレサ (Maria Theresa) に譲らんことを布告す。一七四〇年カロー死し、マリア・テレサよりて位に即き、ボヘミア、ホンガリア、
●ドイツのハプスブルグ家系



プラグマチック
シエクシオン
ト

カロー七世

プロシヤのシ
レジア領有
和議

オーストリア
の強盛

カロー七世と稱せり。是に於てマリア・テレサはホンガリアに奔り國民を奮起せしめて、マジール人の二軍を編制し、且つイギリス王ジョージ二世及オランダの援を乞ひ、勢を合せてフランス及パワリアの軍を撃ち拂ひ、遂にイギリスの勸告を容れて一七四二年 **●ブレズラウ(Breslau)の和議** を結び、プロシヤと和せり。其條項は (一)オーストリアはシレジアの大部をプロシヤに割譲すること、(二)プロシヤはオーストリアに抗せざることに等なり。 **●オーストリアの強盛** 是よりオーストリアの勢頗る強盛となり、ポヘミア、バツリアに進撃して同盟軍を驅逐し、イギリス、ハッノーフェル、ヘッセン等の連合軍と共にフランス軍をデッチンゲン(Dettingen)に破り、カロー七世をフランクフルトに走らせたなり。

第二シレジア戦役

オーストリアの勢盛なるに及て、サルデニア、サクソニアの二國またマリア・テレサに加盟したれば、フレデリキ二世はシレジアの占領危からんことを恐れ、カロー七世及フランスと同盟して、オーストリアに敵してポヘミアに侵入し、ブラーグを略す。一七四五年カロー七世死し、子マキシミリアノ・ヨーゼフ(Maximilian Joseph)はオーストリアと

フイッーゼン
條約

フランツ一世

ドレスデン條
約

アーヘンの和
議

●フイッーゼン(Füssen)條約 を結び、(一)マキシミリアノはオーストリア繼承の要求を棄て、(二)マキシミリアノはマリア・テレサの夫フランツステファノを帝位に即かしむるに盡力すべきことを約し、尋でフランツ推されてドイツ帝となり、**●フランツ一世** と稱す。此歲オーストリア、プロシヤまた **●ドレスデン條約** を締結し、(一)マリア・テレサはフレデリキのシレジアを領することを承認し、(二)フレデリキはフランツ一世の帝位に登ることを承認し、(三)サクソニアはプロシヤに償金一百万タール(約二百万圓)を仕拂ふべきに決せり。

イギリス、フランス兩軍の交戦

シレジア戦役の局を結びしと雖も、イギリス軍は尙ほオランダに駐在して、フランスと相争ひしが、イギリスはジェームス二世の孫カロー・エドワードの亂起りし故を以て兵を本國に召還するや、フランスはネーデルランドを討ち、イスバニアまたイタリアを討ち、戦争なほ止まざりしが、一七四八年 **●アーヘンの和議** 成り、(一)オーストリアはイタリアのバルマ、ピアチエンツァ(Piacenza)、グアスタリア(Guastalla)等をイスバニアの太子ドン・フィリ

プロシアの富強

七年戦役の源因

マリア・テレサの計略

オーストリアの準備

ボ (Don Philip) に割與し、(二) オーストリアはプロシアのシレジアを領有することを確認し、(三) オーストリアはブラグマチッシュェサンクチオンを維持し、シレジアを徐くの外其侵略せられし領地を恢復し、(四) ハンノーフェル家はドイツ並にイギリスなる王位繼承権を得べきこととなれり。

七年戦役(第三シレジア戦役)

◎源因 アーヘン條約後フレデリ

キ大王は鋭意治を圖り、財政を整理し、軍備を擴張し、商工業を奨励せしかば、人口頓に増加し、國運駸々として進歩せり。マリア・テレサはもとより尋常の婦人にあらざれば、シレジア恢復の希望を起し、プロシア強盛の因る所を究め、之に倣て行政を刷新し、農商業を振起し、兵制を改革し、専ら國力の増進を圖り、遂に兩國の衝突を來せり。◎マリア・テレサの計略 一七五五年イギリス、フランスは植民地の衝突より終に戦端を開き、イギリスはプロシアと氣脈を通ずるに至りしかば、マリア・テレサは機を見てオーストリアの宰相カウニツ (Kaunitz) 侯をして、フランス王ルイス十五世の嬖人ボンパジュール (Bonaparte) 侯爵夫人に説かしめ、フランスの同盟を得、更にロシア女帝エリザベタ、サクソニア選帝侯兼ポーランド王アウグスト

フレデリキ大王の武略

フレデリキ大王の連勝

フレデリキ大王の窮迫の敗績と其

三世及オランダ、スウェーデンをも加盟せしめ、以てプロシア分割の約を結べり。◎フレデリキ大王の武略 フレデリキはオーストリアの態度を看て機先を制し、一七五六年不意に兵をサクソニアに進めて之を占領し、オーストリアの開戦を布告するに及て遂に戦争を見るに至れり。時にプロシアを援けたるものはイギリスの外ヘッセン、ブラウンシュヴァイグ、ゴータ (Gotha) 等のみなりしかば、フレデリキは殆どヨーロッパ列強を敵とするに至れり、されどフレデーキも屈せず、一七五七年ポヘミアに亂入してプラীগを略し、一旦コリン (Kolin) に敗戦したるが、尋てフランス及聯邦の大軍をロスバハ (Rossbach) に破り、更にオーストリア兵をロイテン (Leuthen) に粉碎し、一七五八年ロシアの兵をツォルンドルフ (Zorndorf) に殲滅し、爲めにヨーロッパをして震動せしめ、プロシア兵を用して世界第一の強兵と稱せしむるに至る。然るにフレデリキは孤獨を以て列國に對抗せしかば、數次の激戦に兵員漸く減じ、一七五九年クネルスドルフ (Kunersdorf) の役に敗績し、翌年首府ベルリンは一時ロシアの爲めに占領せられたり。◎フレデリキ大王の窮迫 加ふるに大王を援助したるイギリス

フレデリキ大王の決死及復活

七年戦役の結果

オーストリアの疲弊

フベルツスブルクの條約

フベルツスブルク(陸士三九)

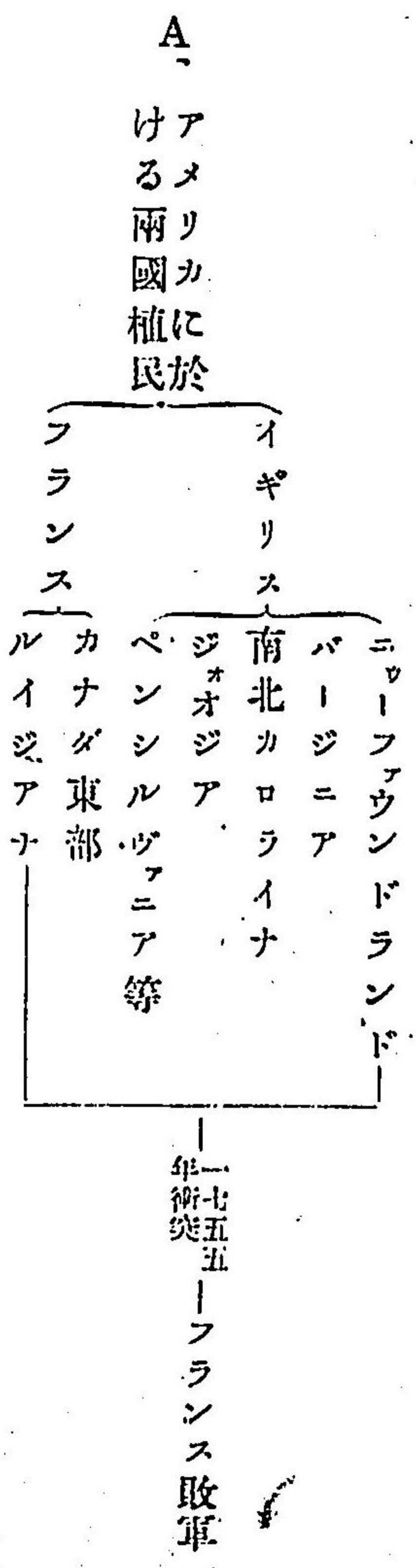
にては一七六一年宰相ピット (William Pitt) 退き、イギリスの廷議俄に變じて、またプロシアに軍資を給せざることに決せしかば、フレデリキの窮迫言語に絶しぬ。されど大王は銳意子弟臣下を戒め、決してシレジアを割かざるを盟はしめ、生きて耻辱を見るよりは死するに如かざる態度を示し、常に毒藥を懷中に匿して決死を示せり。⑤フレデリキ大王の復活。然るに一七六二年ロシア女帝エリザベタ死し、其姪ペテロ三世位に即きて、遽にプロシアと和し、反て之に援兵を送り、スウェーデンもまた加盟を乞ふに至り、プロシアの勢また振ひ、オーストリア軍をブルケルスドルフ (Burkersdorf) に破るを得たり。⑥結果。幾許もなくペテロ三世暗殺に遇ひ、有名なるカザリナ二世 (Catharin II) 位を繼ぎ、プロシアに送る援軍を辭せしが、時にオーストリア大に疲弊して戦ふの意なく、加ふるに一七六三年イギリス、フランスの間にパリ條約成り、フランスはドイツより兵を撤せしかば、オーストリアもまた同年。⑦フベルツスブルク (Hubertsburg) の條約。を結び、プロシアは依然シレジアを領有し、マリアテレサの子ヨセフ (Joseph) をドイツ皇帝に選舉することを契約して、七年戦役の局を

フレデリキ晩年の治績

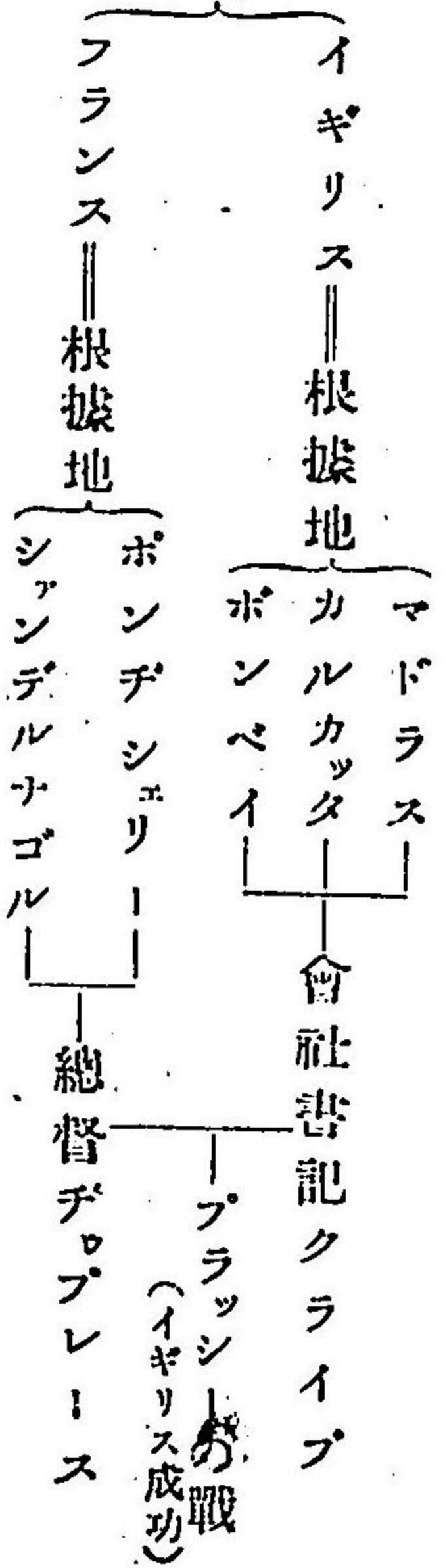
フレデリキ大王の晩年

フレデリキ大王は七年戦役によりて、シレジアの占領を確立し、爾來孜孜として國政改良に力を盡し、或は租税を輕減し、信教の自由を許し、司法制度を改め、農民を保護し、運河を開鑿し、商業を奨励し、また文藝を助長したれば、國力大に發展して、レッシング (Lessing) 以下多くの學者文士を輩出せり。大王後居をポツダム (Potsdam) の園林に定め、公餘の閑日月を此に送り、文學を以て晩年を樂む。一七八六年七十四歳を以て死し、其姪フレデリキ・ウイレム二世位を繼げり。

第四十八章 イギリス、フランスの植民策



B、インドに於ける兩國植民



イギリスの植民策

イギリスはアメリカに於ては、一五三六年始めてニューファウンドランドに植民し、後エリザベタ女王の時ローリーはバージニアに新植民地を開き、カロロ一世の時ピョーリタン派はマサチューセツツ(Massachusetts) 灣附近にニューイングランドを創め、其後南北カロライナ(Carolina) ショージア(Georgia) ペンシルヴァニア(Pennsylvania) 等の諸州また起り、尋てイスパニアよりジャマイカ(Jamaica) 島を取り、オランダよりニュージージー(New Jersey) デラウェア(Delaware) 等を取り、大西洋アレガニー(Alleghany) 山の間沿海一帯を拓殖して殖産漁業を起しぬ。インドに於ては十七世紀以來イギリス東インド會社の勢力漸く加はり、マドラス、カルカッタ、ボンベイを根拠とし、モンゴル(Mongol) 帝

アメリカに於けるフランスの植民

ヨーロッパ諸國中先づカナダの地に植民せしは何時に代はるか(東外三八)

北アメリカに於ける兩植民の衝突

北アメリカ植民地に於けるイギリス、フランスの交戦

フランスの植民策

フランスは十七世紀の初めカナダ(Canada) の東部に植民し、之をニューフランスと名づけ、ケベック(Quebec) モントリオール(Montreal) に城砦を築きしが、ルイス十四世の時に至り、一六七三年ミシシッピ(Mississippi) 河を發見し、其河口の兩岸にルイジアナ(Louisiana) を創め、また西インドのマルチニク(Martinique) 以下數島を購入せり。インドにては一六七四年ボンデシユリー(Pondicherry) を建て、根拠となし、次でシャンデルナゴル(Chandernagor) を創めたり。

兩植民地の衝突

④ 北アメリカに於ける衝突
 アーヘンの和約後イギリス、フランス兩國の委員相會して境界の協定ありしが、議齟齬し、一七五五年フランスの植民オハイオ(Ohio) 河邊に侵入して城砦を建つるや、イギリス植民乃ちウォシントン(Washington) を委員として之を詰責せしむ。是より兩植民互に相敵視せり。翌年ヨーロッパに七年戰役起り、兩國開戦するに至りしかば、兩植民遂に干戈に訴ふ、されどフランスは主もに兵力をヨーロッパに集注せしかば、イギリスの勢力優勝となり、一七五九年其將

インドに於ける
兩植民の衝突

ウォルフ (Wolfe) はフランスの堅城ケベックを陥れ、尋でモントリオールをも陥る。既にして一七六三年本國にて媾和成り、カナダ遂にイギリスの有となり。◎インドに於ける衝突 インドに於ては兩植民地近接せしかば、自ら其間に競争を生じ、第十八世紀の初めより愈々激甚を加へ、殊にオーストリア繼承の役起るに及て遂に兵端を開き、フランスのインド總督デュプレクス (Dupleix) は巧妙なる政策を以てイギリスよりマドラスを奪ひ、カルカッタを陥れぬ。後アーヘンの和議成るに及て之を還附したるが、デュプレクスは益々侵略の方針を進めしかば、イギリス東インド會社は書記クライブ (Clive) を起して之に當らしむ。クライブ機略あり、屢フランス軍を破る。一七五四年フランス政府遂にデュプレクスを召還して和を媾じ、既占の地を放棄せしが、既にして戦また開け、クライブは一七五七年フランス、ベンガル (Bengal) の同盟軍をブラッシー (Plassey) に撃破してカルカッタを恢復し、次でイギリス軍ボンヂシェリーを陥れ、是よりイギリスの勢力益々盛となり、他日遂にイギリス・インド (British India) 帝國を形成するに至れり。

パリイ條約 一七六三年パリイに於てイギリス、フランス、イスパニアの

チャップレイン
とクレイブ

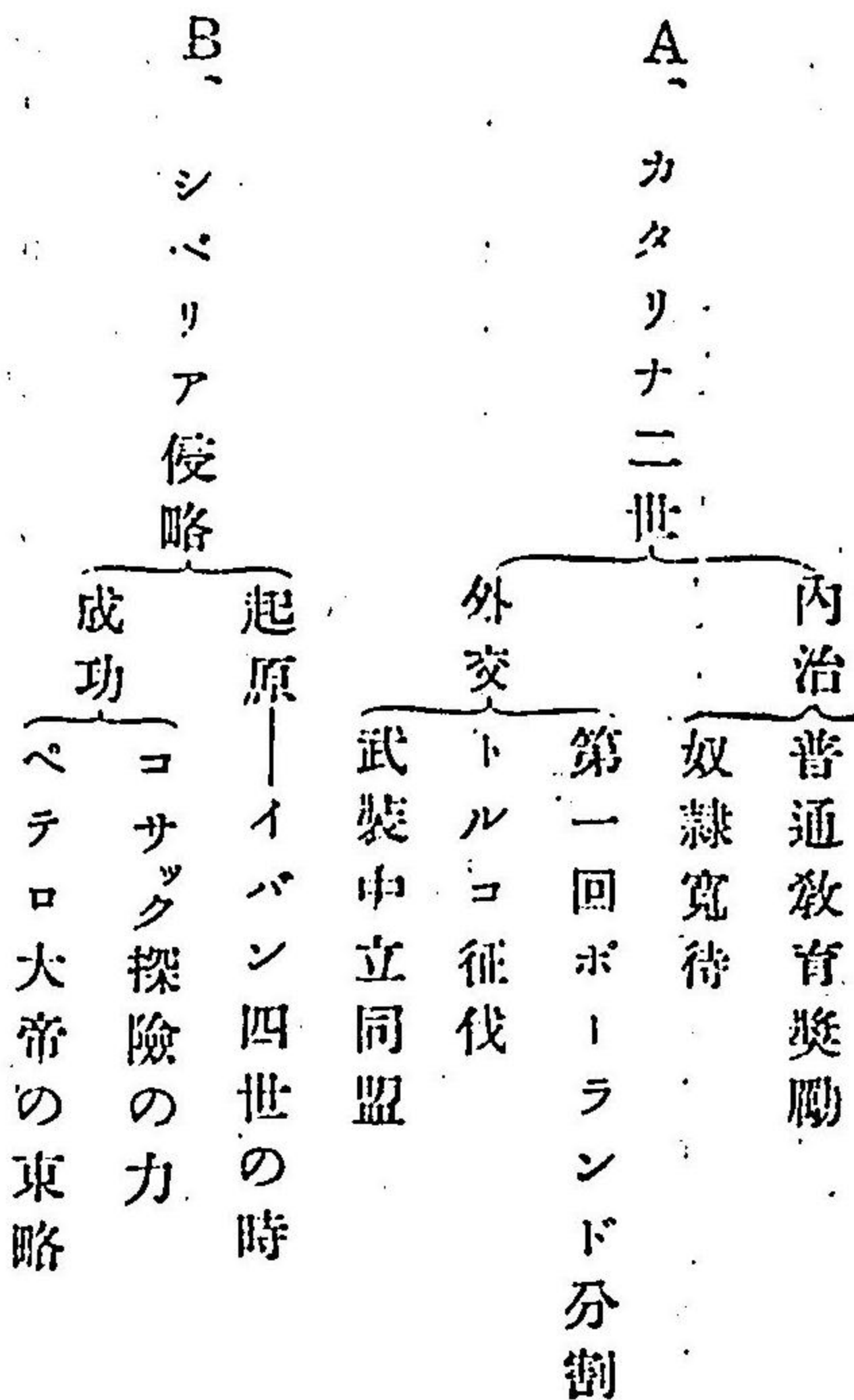
パリイ條約

三國間に條約締結せられ (一) フランスはイギリスに北アメリカのカナダとブレトン (Breton) 岬とを割きて、ミシシッピ河を以てルイジアナとイギリス領との境となし、西インドのグラナダ (Granada) 島、アフリカのセネガル (Senegal) 河畔の領土を讓り、(二) イギリスはアフリカなるゴレー (Goree) 及アジアなる東インドの侵地をフランスに返還し、(三) イスパニアはイギリスにフロリダ (Florida) を割き、フランスよりルイジアナを得、イギリスをしてキューバ島を返還せしめたり。◎和議の結果 イギリスは東インドと北アメリカとに於て非常なる大植民地を得て海上の權を收め、國力次第に發展してヨーロッパ列強の首位に登るの基を造り、フランスは遂にイギリスに拮抗すること能はざるに至れり。而して東インドに於けるイギリスの經營は着々として進捗し、アメリカ植民地は秩序備はりて漸次國家的基礎を形成するに至れり。

和議の結果

第四十九章 ロシアの外交及拓植

地方制度の改良



カタリナ二世の内外政策

カタリナ二世は女帝なれどもペテロ大帝に次げる英主にして、心を内治に用ゐ、地方制度を改良し、普通教育を奨励し、奴隸を寛待し、治蹟大に見るべきものありしが、また外交に力を盡して、大に侵略主義を採れり。◎第一回ポーランド分割 一七六三年ポーランド王アウグスト三世死し、國內紛擾す、カタリナ乃ちプロシア王フレデリキと謀り、兵力を以て其嬖人スタニスラス・ポニャトブスキ(Stanislas Poniatowski)を立て、ポーランド王となす。スタニスラス柔弱にして、

カタリナ二世の内治

第一回ポーランド分割

カタリナ二世の外交

スタニスラス・ポニャトブスキ

ポーランドの分割を記す(海兵三船五、東京商船三七)

三國の所得

ポーランドの分割を記す(海兵三船五、東京商船三七)

ポーランドの分割を記す(海兵三船五、東京商船三七)

トルコ征伐

政に任せず、ロシアの使臣ワルシャワ(Warsaw)に駐在して全権を握りしかば、ポーランドの貴族等大に激し、スタニスラスを廢せんと謀る、ロシア漸く之を鎮壓せしが、既にしてトルコの سلطان、ムスタファ(Mustafa)三世、ポーランド人を援けてロシアに抗す、カタリナ乃ちトルコを破りしが、プロシアはロシアの勢を得るを好まず、オーストリアと謀りて、ポーランド分割を主張す、ロシア之を諾し、三國同盟して、ポーランド兵を破り、一七七二年遂にポーランドを分割せり。(一)ロシアはゾーナ(Duna)、ドニエプル兩河間の地を得、(二)オーストリアは東ガリシア(Galicia)とロドミリア(Lodomiria)を得、(三)プロシアは先きにドイツがポーランドに割きし、ポーランド領プロシアを得たり。◎トルコ征伐 トルコの سلطان、ムスタファ三世、ポーランドを援けてロシアに抗するや、カタリナ二世は海陸兩路よりトルコを伐たしめ、クリム及黒海附近を占領せしが、會、ムスタファ死し、弟アブツル・ハメット(Abdul Hamet)嗣ぎてロシアと和し、クチャク・カイナルジエ(Kutichuck Kainardshe)條約を結び、ロシアに地を割き、トルコ領海の航權を與へたり。されどカタリナは飽くまでトルコを滅ぼして東ローマを

ヤツシ條約
武装中立

再興せんことを計り、ドイツ帝ヨセフ二世と同盟してトルコ分割を約し、トルコ国内のスラブ民族を煽動して、一七八七年再び戦を開き、カタリナの寵人ポテムキン (Potemkin) 及將軍スワロフ (Swaroff) はドイツ將ラウドン (Laudon) と共に頻りにトルコ軍を破る。既にしてドイツ帝ヨセフ二世死してレオホルド二世立ち、トルコと和し、ポテムキンまた陣中に死せしかば、カタリナ遂に目的を達する能はず、一七九二年。◎ヤツシ (Jassy) 條約と結び、ドニエストル (Dniestr) 河以東の地を得、因て黒海沿岸にオデッサ (Odessa) 港を開けり。◎武装中立 (Armed Neutrality) 同盟 一七八〇年カタリナ二世の主唱によりて成立せしものにして、(一) 中立國の船舶は、交戦國の海岸に於ても、航海の自由を得べきこと、(二) 中立國の船舶は禁制品の外各國の軍旗の下に敵國の貨物を搭載し得べきこと、(三) 充分の艦隊を以て封鎖せざる港灣は、封鎖港と見做すこと能はざるべきこと等を規定し、因てイギリスが海軍の強力を恃て他國の船舶に無體を加ふることを防遏し、北アメリカ合衆國の獨立を容易ならしめき。而して初めはたバデンマルク、スウエーデンの二國のみ加盟せしが、後に至てオランダ、プロシア、オーストリア、ポルトガル等もまた之に加入せり。

シベリア侵略

ロシアのシベリア侵略
シベリア人の略(東部三六)

ダ、プロシア、オーストリア、ポルトガル等もまた之に加入せり。

是より先きイバン四世の時、コサック部長イェルマク (Jermak) はウラルを越てオビ (Obi) 河邊を征し、シビル (Sibir) 全部を平定し、後六年トボルスク (Tobolsk) を建つ。是よりコサックのシベリア (Siberia) 侵略益其歩を進め、トムスク (Tomsk)、『イニセイスク (Yeniseisk)』、クラスノヤルメヌク (Krasnojarsk)、『ヤクーツク (Yakutsk)』等の諸塞相次て建設せられ、第十七世紀に至りては、其探險隊遙にオホーツク (Ochotsk) 海に達し、一六三二年にはカムチャツカ (Kamtschatka) に及びり。コサックの一隊はまたバイカル (Baikal) 湖畔に達し、イルクツク (Irkutsk)、『ネルチンスキ (Nertschinsk)』を創め、アムール (Amur) 河畔を探險して、一六五一年アルバシン (Albasin) 城を築きぬ。是に於て清國と境界劃定の必要起り、清の聖祖は大使として索額圖を遣し、ペテロ大帝は大使ゴロウイン (Golovin) を派し、一六八九年ネルチンスキに會して條約を結び、スタノボイ (Stanovoi) 嶺以南シルカ (Shilka) 河以東の地を清國の領分とし、キアムダ (Kiamta) に兩國の互市場を置き、ロシア公使の北京に駐在することを許せり、之をネルチンスキ條約といふ。其後

ネルチンスキ條約

清ロシアの衝突

シアは東方及中央アジア方面に遠征隊を送りて、益其版圖の擴張を計り、幾多の堡寨を設けて既占の地を統御せり。

第五十章 アメリカ合衆國の獨立

A、原因

- イギリスの暴政
- 日用品課税
- 印紙條例

ボストン事件

- イギリスの武力鎮壓
- フィラデルフィア大會

十三州獨立宣言

一、フランス等の來援

B、結果

二、列國の獨立承認

三、ベルサイユの和議—獨立確認

源因

イギリスの北アメリカ植民は、主もに本國政府に不平を抱き、信仰の自由を渴望するの徒なりしも、ホイグ黨内閣を組織せし時、多く植民地に

アメリカ合衆國の獨立の源因

イギリスの暴政

日用品課税

印紙條例

ボストン事件

イギリスの武力鎮壓

フィラデルフィア大會

十三州獨立宣言

フランス等の來援

列國の獨立承認

干渉せざりしかば本國に反抗することなかりしが、イギリス本國はオーストリア繼承戦役及七年戦役に關係して、政府の歳出入平衡を失し、巨額の負債を生じたれば、ジョージ三世立ちて、トリー内閣組織せらるゝに及び、財政の調節を計らんが爲め、植民地人民に課税することに決し、一七六五年十一月一日を以て、**印紙條例 (Stamp Act)** を發布し、植民地に於ける證書、新聞、雜誌等には必ずイギリス政府發行の印紙を貼用すべきを命ず。是に於て植民地九州の人民大に激昂し、マサチューセツツ (Massachusetts) 州之が首唱となり、一七六五年ニューヨーク (New York) に大會を開き、代議士を出さざる植民地に課税するの不法なるを論議し、書をイギリス政府に呈して、其法令を撤回せんことを請願す。イギリスにてもウィルヘルム・ピット (Edmund Burke) 等、また植民地人民の請願に賛したるを以て、此法令は遂に廢止に歸せり。されどイギリス政府は尙も課税を主張し、新法を發して茶、硝子、織物等の税を徵せんとし、收税局をボストン (Boston) に置くや、植民地人民は一致して、イギリス品を使用せざることに決しぬ。●**ボストン事件** 植民地人民の激昂甚しき時に當て、イギリス

ボストン港條
例

フィラデル
フィアの大會

ワシントン
元帥となる

バンカー・ヒ
ルの戦

獨立宣言

北アメリカ
合衆國が獨
立を宣言せ
るは西暦何
年なにか
(海機三六)

は一七七三年三艘の船に茶を満載してボストンに入港す、ボストンの壯丁乃ちインド人に扮してイギリス船に至り、忽ち茶を奪て悉く之を海中に投棄せり。イギリス政府之を聞て大に怒り、ボストン港條例を發布して、ボストン港を封鎖し、指令官ゲージ (Gage) をマサチューセッツ州に派遣してボストン府民鎮壓を企てしむ。●フィラデルフィア (Philadelphia) の大會是に於て植民地の人民意を決し、一七七四年諸州の代議士をフィラデルフィアに會し、本國と通商せざることを議決し、尋てレキシントン (Lexington) 及コンコード (Concord) に衝突を生ずるに及て、代議士はまた翌年フィラデルフィアに會し、公然イギリスと戦を開くことに決し、バージニアの人ジョージ・ワシントン (George Washington) を推して元帥となせり。

獨立軍の奮勵

●バンカー・ヒル (Bunker Hill) の戦 一七七六年六月バンカー・ヒル、イギリス軍に占領せらるゝや、ワシントン乃ち兵を發して之を恢復せんとして大に敗れ、イギリス軍もまた多數の死傷を出せり。●十三州の獨立宣言 是に於てマサチューセッツ州首唱となりて、フィラデルフィアに會議を開き、パトリック・ヘンリー (Patrick Henry) の勸諭により、ジョージア・アダム

諸外國人の來
援
フランクリン
に在り
フランクリン
に就て知
る所を記せ
七(東外三)

ヨーロッパ名
士のアメリカ
援助
戦況

アメリカ軍の
強盛
ヨークタウ
ンの戦

ス (Adams) トマス・ジェフerson (Thomas Jefferson) 起草委員となり、十三州獨立の宣言書を作り、全員の賛同を得て、同年七月四日之を公布せり。●フランス等の來援 獨立軍は更に學徳の聞高きベンジミン・フランクリン (Benjamin Franklin) をフランスに遣して援助を乞はしむ、ルイス十六世之を諾し、名士ラファエット (La Fayette) は率先してアメリカに赴て之を援け、レデリキ大王の將ストイベン (Steuoen) ドイツのカルン (Karl) 侯、ポーランド人コシューシコ (Kosciuszko) 等もまた兵を率ゐて赴き援け、一七七八年フランスは公然同盟を結び、次でイスパニアもまた之に加入せり。●戦況 獨立軍は萬事不整備なるを以て、初め屢敗を取りしが、ワシントン以下義烈の精神を鼓舞して奮勵し、トレントン (Trenton) サラトガ (Saratoga) 等にてイギリス軍を破り、フランス、イスパニアの同盟を得るに及て、其勢頓に長じ、是より兩軍の形勢全く一變するに至れり。●ヨークタウン (Yorktown) の戦 ワシントン乃ちフランスの援軍と連合して、海陸よりヨークタウンを圍み、一七八一年十月十九日之を陥れ、主將コーンウォリス (Cornwallis) 侯と全軍七千の兵士とを降せり、之を獨立戦争の終戦となす。

獨立承認

ベルサイユの和議

獨立の確定

是より先きフランス既に植民地の獨立を承認したるが、ヨ

ークタウンの戦後ロシア、デンマーク、スウェーデン、オランダ、イヌバニア等の諸國皆十三州の獨立を承認せり。イギリスもまた軍氣沮喪し、内閣員少ビート、フォックス(Charles James Fox)等列國の意を贊し、一七八三年パリに國際談判を開き、次て

- ベルサイユ(Versailles)の和議 によりて
- (一)北アメリカ十三州の獨立を承認し、ウエスタンナリトリリー(Western Territory)の地を之に與へ、
- (二)イギリス、アメリカ二國はミシシッピ河を自由に通航するを得、
- (三)イギリスはフランスに西インドのタバゴ(Tabago)島とアフリカのセネガル(Senegal)地方とを割き、
- (四)イヌバニアはミノルカ島とフロリダとを得ることに決し、平和の局を結べり、

新憲法の制定

當時尙ほ各州通有の法律なきを以て、一七八七年五月

各州の議員フィラデルフィアに會し、ハミルトン(Hamilton)及マディソン(Madison)等を委員に、ワシントンを委員長に推し、新憲法を制定せしめ、九月十七日に至て完成せり。◎新憲法 によれば、十三州は合衆國を組織して共和政治を行ひ、中央政府は大統領と國會とを以て成り、大統領は聯邦諸州の

新憲法成る

第一回國會開

ワシントン最初に大統領となる

人民より撰舉するものにて、任期を四年とし、行政の大權を掌り、陸海軍を統轄し、官吏を任免黜陟し、國會の議決に従て政を執り、更に副統領ありて大統領の支障ある時に代て政を攝す。國會は上下二院より成り、上院は各州より二名づゝ選出せる代議士を以て組織し、年限を六年となし、下院は各州の人口に應じて選出せる代議士を以て組織し、年限を一年とす、其掌る所は立法にして、宣戰、媾和、陸海軍條約、幣制度、量衡、租稅等を管せり。地方政治は各州自由の憲法を定め、政府及議會を設けたり。◎第一回の國會 一七八九年三月四日、ニューヨークに第一回の國會を開き、滿場一致を以てワシントンを大統領に任じ、ジョアン・アダムスを副統領に任じぬ、後一七九一年ワシントン府を經營して、合衆國の首府となせり。

第五十一章 十八世紀に於けるヨーロッパの

國情及其文物

A、國情 革新的思想の勃興 中央集權

革新文學
 B、文物
 學者—哲學、文學、史學、教育、經濟、理學者輩出
 應用—紡績機械、避雷針、蒸氣機械、電堆、種痘等

十八世紀に於けるヨーロッパの國情

國情 十八世紀は東ヨーロッパに於けるロシアの膨脹、インドに於けるイギリス領の擴張、アメリカ合衆國の獨立等政治上の大事件起り、ヨーロッパの局面を一變せしが、同時にヨーロッパ人思想上の變化を來し、宗教、政體、社會制度の攻擧及批評盛に行はれ、特に經驗派、感覺派、唯物派の哲學盛に行はれ、從て革新的思想勃興し、すべて舊思想舊制度を打破せんとするに至り、所謂革新文學の氣運を惹起せり。

革新文學の主義者

革新文學 其主とする所は、僧侶貴族及中古の遺物を掃蕩せんとするにありて、之を唱導せる率先者はフランスのボルテール (Voltaire) にして、自ら哲學者は王者の友と公言し、其著アンリアーデ (Henriade) によりて盛に其主義を鼓吹し、各國の英主の崇拜する所となれり。是に次いでモンテスキュー (Montesquieu)、ルソー (Rousseau) の二人出て、前者は萬法精理 (L'esprit de loi)

ルソーの著「論を述べて」(東京郵電三五)

アンシクロペヂスト派

列國中央集權の形勢

ローマ盛衰論を著して舊物の打破を唱へ、後者は民約論 (Contrat Social) を著し、舊社會の缺點の論じ、三家の名聲噴々として一世を煥動し、文學を解するものにして、其著を讀まざるものなきに至り、其説大に行はれたり。其他 ◎アンシクロペヂスト派 (Encyclopedists) の名士ダランベール (D'Alembert)、チドロワ (Diderot)、コンディヤック (Condillac) 等も之に鼓應して、感覺唯物二派の説を唱へたり。

列國の中央集權

當時ヨーロッパ列國には賢明の君主出て、國家の富強を計り、大に中央集權の實を擧げたり。プロシヤはフレデリキ二世ヨロツバに雄視し、オーストリア帝ヨセフ二世また諸般の革新を行ひ、ロシア女帝カタリナ二世も西ヨーロッパの文物を輸入し、學問美術を獎勵し、産業を振興し、舊制を改めて國力發展の法を講じ、フランスのルイス十五世は君權の強大を致し、イギリスのハンノリフェル朝は海軍を強大にし、商業を繁盛にして列國に頭角を露すに至れり。其他イスパニア王フィリポ五世はアルベロニ (Alberoni) を相として力を諸般の改革と國力養成とに盡さしめ、ポルトガル王ヨセフ一世はポムバル (Pombal) 侯を用ひて革新を

十八世紀に於けるヨーロッパ文學

十八世紀の哲學

理學

行はしめ、當時勢力を振ひたるエヌイタ團體を驅逐し、デンマルク王キリ
スチアン七世はストルエンゼー (Stuensee) を用ゐて國政を變理せしめ、
スウェーデンはグスタフ三世銳意改革に力を盡して頗る國力を恢復せり。
文學 フランスにては前記のホルテール、モンテスキュー、ルソーの三大家共
に散文に異彩を放ち、ドイツにてはレッシング、シルレル (Schiller)、ゲーテ (Goethe)
出て、批評に創作に其妙手を揮ひ、イギリスにてはアヂソン (Addison)、
スウ・ブト (Swift)、ポープ (Poep)、キールドスミス (Goldsmith)、キーン (John-
son) 等輩出して、文名を揚げ、三大史家と稱せられたるヒューム (Hume)、ロ
バートソン (Robertson)、ギボン (Gibbon) は各、其傑著を出せり。

科學 ◎哲學 はイギリス、フランス、ドイツの三國に於て大進歩をなし、イ
ギリスのヒュームは懷疑派の始祖と稱せられ、ドイツにはライプニッツ (Leibnitz)、
カント (Kant)、マッバノ (Wolff)、フヒテ (Fichte) 等出て、中にもカントは唯心論
を主張し、ライプニッツは博學アリストテレスに比すべしと稱せらる。其
他教育學にルソー、ペスタロヂ (Pestalozzi) あり、經濟學者にアダム・スミス
(Adam Smith) あり。◎理學 にはイギリスのニュートン (Newton) 數學に

科學の應用

ジェームズ・フット (名古原高工三九)

長じて引力の法則を發見し、イタリアのボルタ (Volta)、アメリカのフラン
クリンは電氣上の發明をなし、フランスのボンファン (Buffon) は動物學に、ラ
ヴォアジエ (Lavoisier) は化學に、キュビエー (Cuvier) は解剖に、ラプラス (Laplace) は數
學に、イギリスのハリー (Halley) は星學に獨創の見を發せり、而してスウェー
デンのリンネ (Linnaeus) は植物の分類を試み、イギリスのボイル (Boyle) は
排氣鐘を完成し、ジェンナー (Jenner) は種痘の法を發明したるは、科學上の偉
事といふべし。

科學の應用

純正理學の進歩に伴ひ、科學の應用大に起り、イギリスのハ
ーグリーブス (Hargreaves)、クロムトン (Crompton) は各、紡績機を發明し、ア
ークライト (Arkwright) は紡車を發明して綿糸業に大進歩を與へ、スコット
ランドのジェームズ・ワット (James Watt) は蒸氣機關を完成し、フランクリンは
避雷針を發明し、ボルタは電堆を作りて、大に文明の進歩を助けたり。

第五十二章 人名地名及解説

ツウイングダリ スウイスの人一四八四年生る、初めベルン及ウィーンの大學に

學び、後バーゼルにて神學を研究して牧師となる。ルーテルの改革を唱ふるや、更に舊教と隔離せる新教を唱へ、ルーテル派と相敵視し、主もにスウイスに布教せしが、ウリ、シ、ツ、ウ、ン、テ、ル、ツ、ル、デ、ン、ツ、ー、グ、ル、ツ、ェ、ル、ン、等五州の同盟權を握りて專横なるを慨し、他諸州の新教を奉ずるものと共に之を攻め、一五三一年遂に戰死す。

カルビン

フランスの人、一五〇九年生る。パリ大學にてラテン語を學び、オルレアンにて法律を研究し、後神學に心を委ね、一五三二年パリに於て宗教改革を唱へ、フランシス一世の王妹マルガレタの知遇を受けしが、尋でバリーを逐はれてバーゼルに赴き、一五三五年其著クリステアネ・レリギオニス・イン・スチ・チ・オ (Christianae Religionis Institutio) を公にし、後ジュネーブに赴き一五六四年死す。其說ルーテルと殆ど同じけれども、只儀式祭祀を廢し、聖餐は唯精神上に感受すべしと云ふを異なりとす。

プエルナンド・コルテズ

イスパニアの人、一四八五年生る。一五〇四年サン・ドミンゴ (San Domingo) に航し、尋でキューバ島に至り、知事ラスケスに用ゐられ、一五一八年メキシコ征伐の隊長に擧げられ、四百のイスパニア兵、

コルテズに就き知れる所を記せ七(東外三)

十三の銃、三十二の弩、十六の騎者、十四の砲、二百のインド兵を授けらる。されど命令の下に進退するを好まず、直にユカタン (Yucatan) に上陸し、タブー (Tabago) にて激戰したるが、やがてメキシコ王モンテズマより使者來り物品を贈り好意を示すや、其船を燒失して決死を示し、トラスカラ (Tlascalala) 族と同盟し、苦戰の後一五二一年遂に國都を陥れ、國王を殺し、擧げられて新イスパニアの知事となる。一五三五年カリフォルニアを發見し、一五四七年イスパニアに死す。

フランシスコ・ピザロ

イスパニアの人、一四七一年頃生る。嘗てパルボアに從てパナマ地峽を截て太平洋を發見し、一五三二年ペルーを征して其王アタフアルパ (Atahualpa) を擒にし、巨額の償金を取り、後之を殺す。一五三五年リマ (Lima) 市を建て、一五三八年同僚アルマグロ (Almagro) を殺し、獨り權を握る。一五四一年殺さる。

アルバ公

イスパニアの將なり、一五〇八年生る。一五六七年フィリピン二世の命を受けて、兵二萬を將ゐ、ネーデルランドに至り、峻政を施し、貴族を捕へ、新教を嚴罰し、オランイエ侯ウィルヘルムを擧退し、不法の苛税を課し、人民

ピザロの世に在りし年及び其の重なる事蹟を記せ七(東外三)

を苦しむ既にして新教徒の勢盛になりしかば、自ら任を解きてイスパニアに還り、一五八二年死す。

レケセンス イスパニアの將、一五二二年生る、一五七三年アルバ公に代てネーデルランドの知事となる、一五七四年オランジェ侯ウィルレムの兵とライデンに戦て敗る、尋て南部諸州の舊教徒を率ゐて、新教徒を壓したるが、一五七六年暗殺せらる。

トマス・ウルジ イギリスの人、一四七一年生る、父は屠者なりしが、ウルジ一性鋭敏にして學を好む、初めヘンリ七世に登用せられて大臣兼顧問官となり、ヘンリ八世の時益擢用せられヨークの大僧正となり、尋て大宰相に進み、また法王の信任を受けて政教を兼攝すること二十年、頗る驕奢を極む。ヘンリ皇后の侍女アンナ・ボレインに懸想して皇后を廢せんとするや、ウルジを以て媒介の任に當らしむ、ウルジ一事の成らざるを思ひ、在昔數年遂に王の怒に觸れ、官職を奪はれ財産を沒收せらる、一五三〇年憂憤病をなして死す。

トマス・克蘭マー イギリスの人、一四八九年に生る、ヘンリ八世の時

カンタベリーの大僧正となる、ヘンリの皇后を離縁してアンナ・ボレインを冊立するや之を賛し、法王の前に之を辯論せり。エドワード六世の時之を輔佐し、新教の所説に従て教義の疑を正し、議會の認可せるブック・オブ・コムモン・プレーヤーに據りて儀式典範を定め、アングリカン教會の基を立つ、一五五六年死す。

シチクスピア イギリスの人、一五六四年アボン(Avon)河畔のストラットフォード(Shatford)に生る、文藝の天才あり、一五八五年ロンドンに至り、劇場の木戸番となり、後俳優となり多くの妙作を出す、中に就て「ベニスの商人」(The Merchant of Venice)、「マクベス」(Macbeth)、「ハムレット」(Hamlet)、「シヤリアス・シーザー」(Julius Caesar)、「キング・リアー」(King Lear)等なり。一六一六年死す。

エドモンド・スペンサー エリザベス朝の詩人、一五五三年生る、多くの著作の中、フェアリー・クイーン (Fairy Queen) 尤も名あり、文辭富麗意匠に富み、毎句八行より成る、之をスペンサー句と稱す、一五九九年死す。

フランシス・ベーコン イギリス、ロンドンの人、一五六一年生る、ケンブリヂ大學の出身にして代議士となり、後檢事總長、内閣大臣、掌璽官、高等法

院長に累官せり、されど哲學者として其名高く、アリストテレスの演繹法に對して、歸納論理法を創む、其著「アドバンスマント・オブ・ラーニング」(Advancement of Learning) 及「ノーヴム・オルガヌム」(Novum Organum) 等世に名あり、一六二六年死す。

ベン・ジョンソン イギリスの名高き戯曲家なり、一五七三年生る、初め士官なりしが、後俳優となり、戯曲作者となり、文名天下に鳴る。

ウォルター・ローリー イギリスの人、一五五二年生る、初めオクスフォード大學に入り、後フランスに赴て新教徒を助け、またオルランドの反徒を征服す、一五八二年宮廷に入てエリザベス女王の寵を被ふる。尋て命を受けて北アメリカ探險に従事し、バージニアを創む、後女王の寵衰へ反逆の嫌疑を受けて一六一八年死刑に處せらる。ローリー文才あり、殊に史學に長じ、世界史を著す。

コペルニクス (Copernicus) ポーランド人、一四七三年生る、有名なる天文學者なり、天動説を排して地動説を唱へ、太陽の太陽系中の中心にして諸遊星の之を周りて運行することを證明せり、一五四三年死す。

ガリレオ (Galileo) イタリア、ピサの人、一五六四年生る、天文學者兼物理學者なり、始めて望遠鏡を造り、天王星の衛星、木星の輪帶、金星の月狀影射等を發見せり、一六四二年死す。

コリニ フランスの人、一五一七年生る、初めフランス一世、ヘンリ二世の外戰に於て勇名を擧ぐ、一五五七年提督となり、ユグノーの爲に力を盡し、イスパニア王フィリポ二世に敵す、第二ユグノー戰役の時戰功あり、セリニエール條約の後宰相に擧げられしが、太后カタリナの爲めに忌まれ、一五七二年センバルトロメ祭日の夜新教徒と共に虐殺せらる。

リシュリウ フランスの貴族にて一五八五年パリに生る、有名なる政治家なり、ルイス十三世の世擧げられて宰相となり、王權確立の爲めにユグノーの政權を奪はんとして戰を開き、其目的を達す、尋て諸侯伯の勢力を殺がんとして力を盡し、またハプスブルグ家の權威を挫き、フランスをしてヨーロッパの強國たらしめんとし、三十年戰役に干涉してスウェーデン王グスタフ・アドルフを助けたり。また文學を起し、フランス大學を創設す、一六四二年死す。

リシュリウの所記を三九

ワレンスタイン

ボヘミア人、一五八三年生る。三十年戦役の時、デンマルク王キリストチアン四世ドイツに侵入するや、チリーと共に之を破り、一六二九年和を講ぜしむ。尋で讒に遇て退けられしが、スウェーデン王グスタフ・アドルフ侵入するに及び、また擧げられて大功を立て其鋒を挫く。されど其志ドイツ統一にありしかば、爲めに讒を被ふり、一六三四年刺殺せらる。

チリー

ドイツの名將、一五五九年ベルギーのゼムブルー附近なるチリー城に生る。初め宗教を研究せしが、後軍人となり、三十年戦役の時ワレンスタインと共に、キリストチアン四世を破り、一六三〇年元帥となり、屢戦功を立つ。一六三二年グスタフ・アドルフとドナウ河畔に戦て傷き死す。年七十三。

グスタフ・アドルフ

スウェーデン王なり、一五九四年生れ、一六一一年位に即く、大に司法行政を改革し、教育の普及を圖り、通商航海を奨励し、軍備を擴張して、デンマルク、ロシア、ポーランド等の軍を破る。三十年戦役起るに及び、新教徒を助け、ハプスブルグ家を抑えんと欲し、兵を率ゐてドイツに侵入し、屢大捷を得たりしが、一六三二年リッセンの戦に陣歿せり。

マザレン

イタリアの人、一六〇二年生る。初め法王の爲めにフランスに

使し、リッソーの厚遇を受け、遂に留る。リッソーの死後代て宰相となり、其遺業を紹きてフランスの強盛を計り、三十年戦役の結果ウエストファリア條約を締結せしめ、またイスパニアと戦を交へ、ピレネー條約を結びて新領土を得たり。一六六一年死す。

ゴルベール

フランスの政治家、一六一九年生る。父は販布商なりしが、コルベール天性才略あり、マザレンに擢用せられ、遂にルイス十四世の財政官となり、財政を釐革し、冗官を汰し、租税を輕減し、工藝を奨励し、運河を鑿ち、盛に通商を振起し、東インドの植民事業を擴張し、大に偉績を擧げたり。一六八三年死す。

ル・ボア

フランス、パリーの人の人、一六四一年生る。ルイス十四世の朝陸軍大臣となる。敏才あり、フランスの兵制を一變して、當備軍を盛大にし、ルイスをして外戦に力を盡さしめたり。一六九一年死す。

リオ

フランスの政治家及外交家、一六一一年に生る。一六五五年ローマ駐在全權公使となる。ルイス十四世の朝一六六一年外務大臣となり、敏腕を揮へり。一六七一年死す。

チウランヌ フランスの兵家、一六一一年セガンに生る、一六三〇年始めて軍藉に入り、三十年戦役に功を立つ、ルイス十四世の時陣法戦術を創め、ネーデルランド戦争の時將となりて軍功を立つ、一六七五年戦死す。

ポーンバン(Vauban) フランスの元帥、一六三三年生る、ルイス十四世に仕ふ、築城守壘の術を發明し、三十三の設計、三百の修築、五十三の攻撃方略を作れり、一七〇七年死す。

コルネイユ フランス、ルアンの人、一六〇六年生る、著名なる文學者なり、ルイス十四世の朝盛に悲劇を創作し、一代の泰斗と仰がる、一六八四年死す。

モリエール
の事蹟(東
京高師、三
八)

モリエール フランス、パリーの人の、一六二二年生る、初め法律を學びしが、後詩人となり、喜劇作者として一世に鳴る、其風俗を摸し、人物を扮する千狀萬態實に稀世の珍たり。一六七三年死す。

ラシーヌ フランスの人、一六三九年生る、コルネイユにつげる悲劇詩人にて傑作頗る多し、一六九九年に死す。

ラフォンテーヌ(La Fontaine) フランスの人、一六二二年生る、文學の天才あり、寓言訓話を以て一生面を開き、イソップ物語的の作を出す。一六九

五年死す。

マールポロ公

姓名はジョアン・チャール、イギリスの政治家及將軍なり、

一六五〇年生る、ウイレルム三世及アンナ女王に仕へ、後ホイグの首領となる、イスパニア繼承戦役起るや、兵を率ゐて大陸に出陣し、ドイツ軍を援け、ラミリー、ウドナルド、マルブラケー等の諸處に大捷を奏したるが、一七一〇年ホイグ内閣倒れ、トリーリ内閣形成せらるゝに及て、免官せられ本國に還る、一七二二年死す。

エウジエニオ

サボヤ侯なり、一六六三年生る、ドイツ皇帝レオポルド一世の將となり、トルコと戦ひ、一六九七年ツェンタ(Nenta)の役に大捷を奏す、

イスパニア王位繼承の役起るや、また兵を率ゐてフランス軍と戦ひ、トリノ、ウドナルド、マルブラケー等に勝ち、勇名を揚ぐ、戦後ユトレヒト條約により、シチリア島を領地とし、後サルデニアと交換して其王となれり。一七三六年死す。

ハムデン

イギリスの政治家、一五九四年生る、一六二二年國會議員となり、名を揚ぐ、カロロ一世の國會を解散して暴令を布き、高等法院、星室廳を

再興して不正の課税不正の裁判をなすや、ハムデン大に之を攻撃し爲めに獄に下さる。長期議會の開くるや、また議員となり、極力カロロの政に抗す、一六四二年將に逮捕せられんとして遁れ、是より王黨と議院黨との衝突を來せり、一六四三年死す。

ピン イギリスの政治家、一五八四年生る、一六一五年國會議員となる、一六四二年カロロの兵を率ゐて寺院に至るや、ハムデンと逮捕せられんとして遁れ、翌年オールドナンスの副議長に選ばれしが一ヶ月にして死せり。

ミルトン シェクスピア以後イギリスに於ける大詩人なり、一六〇八年ロンドンに生る、ピリタム宗徒なりしが、幼時より詩に於て伎倆を顯はせり、されどまた政治に關係し、人民の自由を唱導し、クロムウルの秘書官となれり、スチャアルト王朝復興するに及て、官を退きまた仕へず、晩年盲目となり、失樂園(Paradise Lost)の大作を出す、一六七四年死す。

バンヤン イギリスの文學者、一六二八年エルストーに生る、始め冶工なりしか、後バプチスト説教師となり、宗教上の迫害を受けて禁錮せらるゝこと十二年、入獄中有名なるピルグリムス・プログレス(Pilgrims Progress)を著す、其他著作六種あり、一六八八年死す。

ドライデン イギリスの詩人、一六三一年生る、ピリタム宗徒なり、カロロ二世の朝戯曲及諷刺の詩を出して名を擧ぐ、晩年政治に關係せり、一七〇〇死す。

ロック イギリスの哲學者、一六三二年生る、初め醫學を修む、後哲學を研究して成功し、唯物主義及經驗派の鼻祖と稱せらる、一七〇四年死す。

チウプレース フランスの人、一六九七年生る、フランスのインド植民地なるボンチンリー知事となり、一七四一年全植民地の知事となり、巧妙なる外交手段を以てイギリス人を制し、フランスの勢力を扶殖す、一七五四年本國に召し還さる、一七六三年に死す。

ピット イギリスの政治家、一七〇八年生る、ロード、チャタム伯と稱す、ザ・ロベルト・ウオルポールと政治上の敵たり、一七五七年より一七六一年まで首相となり、フレデリキ大王を援けてシレジア戰役を起さしめ、フランスより海外植民地を收む。ボストン事件の起るや、極力イギリス政府の手段を論議し、アメリカ植民地の爲めに其自由を得しめんとして成らず、戦争起りてイ

ギリス軍不利なるに至り、アメリカ獨立の正常なるを論じ、遂にベルサイユの和議を結ばしむ。一七七八年死す、其子ピットに對して通常老ピットと稱す。

ピット

ロード・チャーム伯の第二子なり、一七五九年生る、少にして鋭氣あり、

一七八一年國會議員となり、一七八三年入て内閣總理大臣となる。ブラ

リス革命の起るや、ブルボン家の爲めに保護政策を施し、ナポレオン出づ

るに及て極力其政略に反對し、一七九八年アプキルの大捷あるや、オース

トリア、ロシア、ポルトガル、トルコ等と對フランス同盟を組織して、ナポレ

オンを壓す。一八〇一年アイルランド合併問題に關して職を辭す。既

にして再び總理となり、ロシア、スウェーデン、ナポリ等と對フランス同盟を

作り、益々ナポレオンに抗す、トラファルガル大捷の後益々外交手段を揮てナポ

レオンの政策を打破し、遂に其勢力を滅殺せり。一八〇六年死す。

ポンバル

ポルトガルの政治家、一六九九年生る、ロンドン、ウィーン等に大

使となり、ヨセフ一世の朝總理大臣となり、政治の大革新を行ひ、僧侶貴族

の勢力を殺ぎ、農商工業を勵まし、一七五九年エヌイタ團體を國外に驅逐

す、一七八二年死す。

ダランベル

フランスの科學者、一七一七年生る、數學研究に力を盡し、學

術以外青雲の志なく、孜孜として勉強せり、また百科全書編輯に力を用ゐ

たり、一七八三年死す。

チドロ

フランスの哲學者、一七一三年生る、革新的思想を鼓吹し、また

百科全書を編輯す、一七八四年死す。

コンチアック

フランスの哲學者、一七一五年生る、ダランベル、チドロ

等と感覺唯物二派の説を創む、一七八〇年死す。

ポテンキン

ロシアの人、一七三九年生る、容色美なるを以てカタリナ女

帝に寵せらる、トルコ戦争の起るや、將軍に任ぜられて功あり、一七九一年

死す。

ウォルフ

イギリスの軍人、一七二七年生る、一七四三年デッチングンの戰に

勇名を揚ぐ、一七四九年より五七年までスコットランド及イングランドの

守備隊に加はる、一七五八年ピットの信任を得、將軍アムハーストに屬し、ケ

ーンプレトンの遠征に出づ、後命を受けてアメリカに赴て、カナダを征じ、

フランスの堅城ケベックを陥れ傷きて死す、時に一七五九年なり。

ボルテール フランスの文學者、一六九四年生る、尤も戲謔滑稽に通ず、三回バスチール監獄に幽囚せられ、出て、イギリスに密遊す、またプロシアに赴きてフレデリキ大王の厚遇を受く、其著アンリヤド(Henriade)はフランスに於ける唯一の史詩と稱せられ、またルイス十四世の治世紀及カロロ十二世の傳を著す、其極力キリスト教に反抗したるは奇といふべし、一七七八年死す。

モンテスキュー フランスの學者、一六八九年ボルドーの近傍に生る、後ボルドーの府會議長となる、革新文學の鼓吹者にして、萬法精理、ローマ盛衰論等を著す、一七五五年死す。

ルソー フランスの思想家、一七一二年生る、父はジョネーブの時計師なり、宗教に關しては懷疑派に屬すれども、詩に至ては獨特の技倆あり、其著民約論は一般讀書界の珍となりしが、之が爲めにフランスを逐はれ、一七七八年ブルッセルに客死せり。

ポープ イギリスの詩人、一六八八年生る、父はロンドンの麻布商なり、十二歳の時既に詩名を揚ぐ、著作頗る多く、就中ホメロスのイリヤード、オデッ

ルソーの事
蹟を述べよ
（東京朝電
三五）

シッスを譯したるもの尤も名高し、一七四四年死す。

スウィフト イギリスの文學者、一六六七年生る、頗る政論に長じ、ガリバー巡遊物語(Gulliver's Travels)は名高き著述なり、また諷刺をよくし一世を嘲笑せり。一七四五年狂病にて死す。

アヂソン イギリスの散文家、一六七二年生る、ホイグ黨に入て名聲を揚げ、アンナ及ジョージ一世の時スベクターター(Spectator)誌上に政論を公にし、また戯曲及詩を作り、一世の泰斗と仰がる、一七一九年死す。

デフォー イギリスの文學者、一六六一年ロンドンに生る、初め政治學を研究し、ウィルム三世に仕へたりしが、晩年専ら文學に身を委ね、一七一九年ロビンソン・クルソー漂流記を著す、一七三一年死す。

ゴールドスミス アイルランドの人、一七二八年生る、少時白痴と稱せられしが、長じて文名を著はせり、其著頗る多けれども、ゼビーカー・オブ・ウェイクフィールド(The vicar of Wakefield)「デザード・ビル」(Deserted village)尤も名高し、一七七四年死す。

ギッボン イギリスの歴史家、一七三七年生る、歴史の著作多し、就中十二年

を費して大成したるローマ帝國衰亡論 (The decline and fall of The Roman Empire) 世に名あり、一七九四年死す。

レッシング ドイツの文學者、一七二九年生る、初めライプチヒに神學を研究せしが、性戲曲を好み、遂に作家となり、一七六六年ラオコーン (Laokoon) を、一七六七年戯曲論 (Dramaturgie) を著し、一七七九年ナタン傳 (Nathan der Weise) を公にす、蓋しドイツ文學の鼻祖たり、一七八一年死す。

ゲーテ ドイツの大詩人、一七四九年フランクフルトに生る、尤も批評と創作とを善くし、シェクスピアの蟲を摩すとの評あり、其作中ファウスト (Faust)、エグモント (Egmont)、トルクワト・タッシン (Torquato Tasso) 等の戯曲、ヘルマン・ウント・ドロテア (Herman und Dorothea) 等の叙事詩は千古の傑作と稱せらる、一八三二年死す。

シルレル ドイツの詩人兼史家、一七五九年ウルテンベルヒのマールバハに生る、初め法律醫學を學びしか、後文學に轉ず、一七八九年工科大学の史學教授となる、また美文に長じ、詩歌戯曲を作り、ゲーテと友情深かりき、其作中ドン・カロス (Don Carlos)、グロッケー (Glocke)、ワーレンスタイン等の

諸曲尤も名あり、一八〇五年死す。

ジオンソン サミュエル・ジオンソンはイギリスの文學者、一七〇九年リッチフィールドに生る、拮据なる文體を以て著はれ、ラセラス傳 (Rasselas)、ラムプラー (Rambler)、英語辭典等を著せり、一七八四年死す。

ヒューム イギリスの哲學者兼歴史家、一七一一年エデンバラに生る、其哲學は懷疑哲學にして、人生の無主義無目的なるを唱ふ、其イギリス史は世に名あり、一七七六年死す。

ロベルトソン スコットランドの歴史家、一七二一年生る、スコットランド史、カロロ五世史、アメリカ發見史等の著あり、一七九三年死す。

ライブニッツ ドイツの哲學者、一六四六年生る、博學にして、數學法律に精通し、法學博士の學位を得、ニュートンと共に微分學の基を建つ、著書頗る多し、一七一六年死す。

カント ドイツの大哲學家、一七二四年ケーニヒスベルヒに生る、一七四四年大學に入り、哲學、數學、物理を修め、一七七〇年大學教授となり、一七九七年迄其職にあり、其餘暇を以て盛に著作批評を公にす、其著中純理批判

(Kritik der reinen Vernunft) 及管理批判 (Kritik der Praktische Vernunft) 尤も名高し、一八〇四年死す。

ウルフ ドイツの哲學者、一六七九年ブレスラウに生る、ライプニッツの哲學を祖述して著書多し、フレデリキ大王に用ゐられて男爵を授けらる、一七五四年死す。

フイヒテ ドイツの哲學者、一七六二年生る、初め神學を研究す、後カントに就て哲學を學び、其學を祖述す、思考力に富み、品性高しと稱せらる、またナポレオンの政略に反對して盛に之を攻撃せり、一八一四年死す。

ペスタロチ スイスの大教育者、一七四六年生る、夙に自然主義を唱へ、兒童教育の爲に一生を抛つ、尤もドイツ人に尊崇せられ、今に至るまで、教育者の鼻祖として仰がる、一八二七年死す。

アダム・スミス スコットランドの經濟學者、一七二三年生る、後グラスゴ
ー大學の教授となる、著書頗る多けれども富國論 (The Wealth of Nation) は經濟學の嚆矢と稱せらる、一七九〇年死す。

ニットトン イギリスの物理學者、一六四二年生る、一六六一年ケンブリヂ

大學に入り數學を研究し、一六六九年同教授となる、始めて重力の説を唱へ、また光學に就て發明する所多かり、著書頗る多し、一七二七年死す。

ボルタ イタリアの物理學者、一七四五年コモに生る、後パビア大學の講師となり、電堆の發明をなす、所謂ボルタ電堆なり、一八二七年死す。

ビュッフオン フランスの博物學者、一七〇七年生る、少時より博物學の研究に力を盡し、一七四九年より同六七年に至るまで、博物學史を著作す、また進化論を唱へたり、一七八八年死す。

ラボアジエー フランスの化學者、一七四三年パリに生る、化學の用語を定め、天秤を化學分析に應用せり、一七九四年罪を得て殺さる。

キュビエー フランスの生理學者、一七六九年生る、ノルマンディー海岸の海産動物を研究して、比較解剖學、生物學等を創始す、一八三二年死す。

ラプラス フランスの天文學者兼數學者、一七四九年生る、父は農夫なり、木星と土星との運行上不等なること、木星の衛星に就きての研究、遊星説等を公にす、一七九九年ナポレオンの内務大臣となり、一八〇三年元老院副議長となり、一八一七年侯爵に叙せらる、一八二七年死す。

ハリー イギリスの天文学者、一六五六年ロンドン近村に生る、太陽表面にある黒点によりて太陽の消耗することを論じ、また大彗星を発見す、一七一九年帝室星学者となる、一七四二年死す。

リンネ スウェーデンの植物学者、一七〇七年生る、ウプサラ大学の教授となり、植物分類法を作り名を揚ぐ、著書多し、一七七八年死す。

ボイル イギリスの理学者、一六二七年生る、排気鐘の発明をなす、一六九一年死す。

ジェンナー イギリスの醫士、一七四九年生る、牛痘を以て人に施し痘瘡を免るゝ法即ち種痘法を發明す、一八二三年死す。

アークライト イギリスの發明家、一七三二年ランカシャーのプレストンに生る、初め理髪師なりしが、遂に苦辛の後、一七七二年紡車を發明す、後ナイトの爵を賜はる、一七九二年死す。

ワット イギリスの理学者、一七三六年スコットランドに生る、父は一商人なり、初め機械師の弟子となり、後グラスゴーに移り、更にパーミンガムに轉じ、一七六五年ニコロメンの發明せし蒸気機関に大改良を施し、一七六九

ジェームス・ワット名
古屋高工
三九

年特許を得、以て世界交通上工業上に大進歩を與へ、一八一九年死す。

ウォルムス ライン河の左岸にある都市、ブルグンド人初め此に都す、一一二二年神聖ローマ皇帝ヘンリ五世此に會合を開き、僧官叙任、皇帝より與へられたる土地に就て論議し、法皇と和せり、一五二一年カロー五世此に大會議を開き、ルーテルを召して其所説を棄てしめんとして成らざりき。

パビア イタリア、ポー河上流の都市、一五二五年カロー五世のフランス王フランシス一世と此に戰て之を擒にせしを以て名あり。

アウダスブルグ バワリアの都市なり、一五三〇年カロー五世國會を此處に開くや、新教徒等メラnhitonの編纂せるアウダスブルグ自認書を呈出して、新舊兩教の委員調和を計りて成らず、一五五五年帝また此に宗教會議を開き、遂に新教徒の信仰自由を許せり。

ニッルンベルヒ バワリアの都市、一五三二年カロー五世此地に條約を結び、一時新教の自由を與へたり。

トリエント イタリア、チロール州南方の都市、一五四五年カロー五世此に新舊兩教徒を會合したるが、新教徒は一人も出席せざりき。

リウツェン サクソニアの小市、一六三二年スウェーデン王グスタフ・アドルフ、ドイツ將軍ワールンスタインの軍を撃破し、傷を被て死せしを以て名あり。

モハチ ホンガリア南方の都市、一五二六年八月二十九日トルコのセリム一世とホンガリア兼ボヘミア王ルイス二世と此地に戦ひ、ルイス二世戦死せり。

ブレンハイム アウグスブルグの北西、ドナウ河畔の都市、一七〇四年マールボロ侯及エウジニオの兩將此處にフランスの軍を破りしを以て知らる。

ヘックステット (Hochstadt) バウリアの小邑、一七〇四年マールボロ侯エウジニオの兩將大にフランス軍を此地に破れり。

ヨーク イギリス、ヨーク州の都市、一六四二年イギリス王カロー一世國會と衝突して此地に奔り、内亂爲に起る。

ネースビー イギリス、ノースamptonの小村、一六四五年カロー一世の軍とクロムウェルの軍と大に此に戦ひ、王の軍破れたり。

ナルバ ロシアのフィンランド灣に近き都市、一七〇〇年十一月三十日、スウェーデン王カロー十二世、大にペテロ大帝の軍を此に破れり。

ポルタバ 南ロシア、ウクライナの都市、一七〇九年ペテロ大帝此に大にカロー十二世を破りしを以て史上に名あり。

ニスタット
陸士三九

ニスタット フィンランドの都市、一七二一年ロシア、スウェーデン此地に條約を結び、ロシアはインゲルマンランド、エストランド、リヴォニア等を得たり。

プラッツシー インド、カルカッタの北三十六里にあり、一七五七年クライブがフランスとベンガル副王との連合軍を撃破したる名高き地なり。

ロスバハ サクソニアにあり、ハルレ南方の一村、一七五七年ロシア王フレデリキ大王、フランス、オーストリア等の連合大軍を此地に破れり。

ロイテン シレジアにあり、ブレスラウ附近の一村、一七五七年フレデリキ大王、オーストリア軍を此地に破れり。

ツォルンドルフ プロシア、ブランデンブルグの一村、一七五八年フレデリキ大王ロシア軍を此地に粉碎せしを以て名高し。

クネズドルフ プロシア、ブランデンブルグの一村、一七五九年フレデ

リキ大王、オーストリア、ロシア同盟軍と此地に戦ひ、大敗せり。

ブルケルスドルフ オーストリアの一小村、一七六二年フレデリキ大

王此地にオーストリア軍を撃破せり。

ヤアシ モルダビアの古都市、一七九二年ロシア、トルコの條約あり、ロシア

がクリム半島及ドニエプル河畔の地を領有するを定む。

サラトガ アメリカ、ニューヨーク州にあり、一七七七年十月獨立軍大にイ

ギリス軍を此地に破り、守將バーゴイン及兵六千を捕虜とせり。

ヨークタウン アメリカ合衆國バージニアの一市、一七八二年ウォシ

トン、フランス艦隊と共に此地を陥れ、イギリス守將コーンウォリスと全軍七千とを降せり。

プロテスタント 抗論者の義、一五二九年カロロ五世スバイエルに宗

教會議を開き、ウルムス勅令の實行を促す、新教徒之に抗したりしより、プロテスタントの稱を得たり。

エスイタ 新教の興るに際し、一五四〇年イグナチオ・デ・ロヨラ等、舊教の

革新を唱へ、同志の徒と一種の會を組織し、エスイタ團體と稱し、身體強健、

意志確固の青年を選て布教に従事せしめたり。

ユグノー カルピンの新教フランスに行はるゝや、其信徒をユグノーと

稱す、蓋しユグー(Hugo)といふ妖怪王の名より出でたる綽號とも、スウィス同盟をアイドゲノス(Eidgenoss)といへるより出でたりともいふ。其宗徒には學者、文人、技術家及巧妙なる職工多かりき。

ナントの勅令 一五九八年フランス王ヘンリ四世の發したるものに

して、信教の自由と、新舊兩教徒の同權を確定し、宗教上に段落を告げたる要件なり、一六八五年ルイス十四世之を廢したるより、新教徒の實業家二萬餘人フランスを去り、爲めにフランスをして衰へしめたり。

ピューリタン 清教派と譯す、イギリス女王エリザベタの時エビスコバ

ルといふ一宗派を創め、舊教寺院を廢し、王を主宰者となせしより、之に不賛成のものを生じ、温和手段を執りて反抗せしものをピューリタンといふ、此徒多くアメリカに移住せり。

ロング・パリアメント 長期議會と譯す、一六四〇年イギリス王カ

ロ一世の召集したる議會なり、是れより先き王は妄に國會を解散し、不當

の課税不正の裁判をなしたるを以て、此議會は王命に従はず、國會の決議ある迄解散せざるを盟ひ、一六五三年まで十四年間繼續せり、故に然か名づく。

テスト・アクト 審査律と譯す、一六七三年イギリス議會のカロロ二世に逼て發布せしめたる法令なり、舊教徒の官吏及議員たることを禁ずるにあり。

ハベアスコルプスアクト 人身保護律と譯す、一六七九年イギリス議會の發せし法令にして、王の濫に人民を逮捕するを防遏せしものなり。
ネビゲーションアクト 航海條例と譯す、一六五一年クロムウエルの發せしものにして、外國の産物をイギリスに輸入するものは、必ずイギリスの船に由らしめ、よりに大にオランダの商權を奪へり。

ホイグ、トリー ホイグは民權に傾き、稍進歩的にして、トリーは王權に傾き、稍保守的なり、元來ホイグはケルチ語の Ugham-more (荷鞍) より轉化せる Viggam-more (荷鞍盜賊) より來れる戲號なり、蓋しホイグは概ねスコットランドのプレスピテリアン派のものよりなり、スコットランドの盜

賊が掠奪の爲め荷鞍馬を用ゐるより云へるなり。トリーはアイラランド語の Toruigh (草賊または賤民) より轉化せる賤號なり。

スタムプ・アクト 印紙條例と譯す、一七六五年イギリス議會の北アメリカ植民地に發布せし法令にして、植民地に於ける發行物には本國發行の印紙を貼布すべしと命ぜり、是れイギリスの財政挽回手段なり。

ポストン殺戮事件 スタムプ・アクト撤回の後イギリス兵ポストンに至り、人民を虐待す、人民大に怒り、之に抵抗し、一七七〇年爲めに殺戮にあふもの多かりき、之をポストン殺戮事件といふ。

王公同盟 (Deutschen Fürstenbund) ドイツ帝ヨセフ二世、其母マリア・テレサと共に力を帝權の固定に盡せしが、舊慣古法を顧みざる所多きを以て大に國民の不平を招き、加ふるに其領地の固定を謀りて、バウリヤ侯カロロ・テオドルに説き、バウリヤとオーストリア領ネーデルランド(ベルギー)とを交換せんとするや、一七八五年七月プロシア、サクソニア、ハンノーフェル等連合して王公同盟を結んで之に反抗し、戰爭將に破裂せんとせしが、ヨセフ二世の此交換を中止するに及て纔に事無きを得たり。

クロムウエルの航海條例に於てイギリスの船に由らしめよとの規定あり

トリーはアイラランド語の Toruigh (草賊または賤民) より轉化せる賤號なり

第四篇 最近世史

第五十三章 フランス革命

A 源因

- 一、ルイス十四世の征戦及豪華
- 二、ルイス十五世の征戦及内嬖
- 三、以上に於ける結果として財政紊亂
- 四、貴族僧侶平民の特權不同
- 五、ルイス十六世の優柔
- 六、革新文學及アメリカ獨立の影響

B 財政整理

- 一、シャルゴ
 - 二、ネッケル
 - 三、カロンヌ
 - 四、ネッケル
- 不成功

一、國會の召集—國民議會の分立

C 革命第一期

- 一、パリーの騷擾—バスチル監獄破壊
- 二、新憲法制定
- 三、ルイス十六世の幽閉

D 革命第二期

- 一、立法議會
- 二、三黨の分立
- 三、外國同盟軍のフランス侵入
- 四、九月の虐殺

E 革命第三期

- 一、共和政體の建設
- 二、ルイス十六世の死刑
- 三、列國の大同盟
- 四、恐怖時代—ロベスピエールの暴虐

源因

(一) ルイス十四世の時奢侈豪華を極め、且つルイス十五世オーストリア繼承戦役、七年戦役等の無益の戦争に従事し、また政を嬖妾に委ね、徒に攻伐を事とせしかば、國用缺乏して巨額の國債を生じ、疆域また縮少し、王室漸く人民の怨府となれり。

(二) ルイス十六世立ち、温厚にして人民を愛

フランス大革命の源因第一

ルイス十六世源因第二

源因第三

源因第四

フランス大革命の源因
(東京高師 三五三七)

シャルゴアの財政整理

ネッケル

し、秩序恢復を計りしが、當時土地財産の分配一方に偏し、貴族高僧は莫大なる資産を有し、大多數の平民は僅に三分の一の土地を有し、赤貧洗ふが如く、加ふるに貴族僧侶は諸種の特権を有し、納税の義務を免ぜられ、平民獨り重税を負担し、且つ内地には到る處税關の設ありて交通貿易を妨げられたれば、ルイス靡濇の精神あるもまた如何とするに由なし。(三)時にフランスにはモンテスキュー、ボルテール、ルソー等の學者出て、懷疑的哲學及革新的思想を鼓吹せしかば、人心爲に激動し、國王、貴族、僧侶を嫉惡すると共に革新の大希望を起せり。(四)會北アメリカ合衆國獨立の舉ありしかば、往て之を援助するものあり、隨てアメリカの風を敬慕して自由平等民權擴張を呼號するもの次第に増加するに至り、遂に革命を惹起せり。**ルイス十六世の財政整理** フランスの國債數千萬圓に達するや、ルイス十六世は之を整理せんと欲し、一七七四年財政家 ●シャルゴア(Chargé) を擧げて其任に當らしむ。されどシャルゴアは行政軍政の改革を計ると共に貴族僧侶の特権を削りしかば、其激怒に遇ひ、在職三年にして職を免ぜられ、ジエノバの經濟家 ●ネッケル(Necker) 代りて其局に當り、

一七七六年より一七八一年に至るまで銳意經費の節減を計り、明に歳入の歳出に超過するを示せり。されど財政一覽表を製して貴族等の免税を公示せしかば、忽ち其怒に觸れ、遂に其職を斥けられたり。ルイス乃ちカロンヌ(Calonne)を擧げてネッケルの後となせしが、定見なく學識乏しければ、公債の濫發甚しく、また國民一般に徴税を課し、益、財政を紊亂して退けられ、一七八八年ネッケル再び撰ばれて財政官となれり、されど財政の整理は遂に望むべからず。

國會の召集

ネッケル最後の手段として、一六一四年以來久しく召集せざる ●國會議(États Généraux) を開きて財政上の問題を可決せんと欲し、一七八九年五月五日を以て國會をベルサイユに召集し、ルイス親臨して其開院式を舉行せり。國會は貴族、僧侶各三百人、平民六百人、之を三部議會と稱す。然るに未だ議事を始めざる前に於て、平民は階級投票を廢して、員數投票を用ゐんことを主張し、爲めに貴族僧侶と衝突を生じ、六月十七日平民議員はシーイェー(Sieyès)の發議により、別に獨立することに決して、●國民議會(Assemblée Nationale) を組織し、ルイスが兵力を以て

平民議員の分立
國民議會

國會の閉會

之を停止せんとするや、平民は相替てフランスの新憲法を議定するまで決して解散せずと稱したれば、王止むを得ず貴族、僧侶をして參會せしめたり。

パリーの騷擾

ルイス十六世是に至て、ネッケルを斥け、兵を集めてベルサイユ宮殿を護衛せしめしかば、パリ一大に騷擾し、府民は護國軍を組織してラファエット (La Fayette) を首領となして鎮壓を計り、國會は貴族、僧侶等の特權を廢し、租税を平等にし、出版及言論の自由を公布せり。●バスチール監獄の破壊 此時に當てパリーの暴民は市中を狂奔して、到る處切掠を繼にせしが、七月十四日に至りバスチール (Bastille) の監獄を襲ひて之を破壊し、其蓄藏せる兵器を劫奪したるが、王の慰諭と護國軍の力とによりて漸く鎮撫せられぬ。されど是より各地方の農民もまた暴起して貴族に抵抗し、或は之を殺戮し、或は城砦を破壊せしかば、貴族の國外に逃るゝもの多し。

新憲法の制定

是に於て貴族、僧侶は議會に於て自ら其特權を廢棄する旨を公言せしが、一七八九年八月四日國民議會は、ノアイユ (Noailles) の

バスチール監獄の破壊

貴族特權の廢止

暴徒のベルサイユ宮闖入

新憲法の發布

ミラボーの死

發議によりて貴族の特權を廢しぬ。●ベルサイユ宮の暴亂 ルイス十六世平民の權力争奪なるを見て兵を召して護衛せしめ、之に酒宴を賜ひしに兵士等王の萬歳を唱へ、パリ暴民の記號なる三色の朝章を破棄したり。暴民之を聞て大に憤激し、物價の騰貴と飢渴とに窮困したる數千人の徒を率ゐて、十月五日ベルサイユ宮に迫り、門戸を破壊して皇后の室に闖入したるが、ラファエット護國兵を率ゐて來り之を慰諭して退かしめ、漸く王及皇族をして難を逃れしめたり。然るに暴民等王及皇后を擁してパリに還奉せしめ、嚴に之を監守せしめしかば、貴族の國外に遁るゝもの漸く多くなれり。●新憲法發布 是に於て國會もまたパリに移され、一七九〇年新憲法制定せられ、從來有せし貴族、僧侶の地を沒收し、フランスを八十三縣に分て郡村に小分し、從來の裁判制度を改め、國民の權を平等とし、寺院制度を改めて、其財産を沒收し、國債券を發行し、民有財産を調査せしめ、其他度量衡貨幣等の制度を一定したり。●ミラボーの死 國會に於ける名士はランヴェット、ミラボー (Mirabeau)、ロベスピエール (Robespierre)、タレーラン (Talleyrand) 等なるが、中にもミラボーは稀世の英傑にして、國

ルイス十六世
脱走を企つ

運の維持と皇室の扶翼とを以て自ら任せしが、一七九一年四月病を以て死したれば、ルイス十六世は全く其頼る所を失ひ、同年六月皇后皇妹及二皇子等とパリを脱走してオーストリアに赴かんとし、バラヌヌ(Varennes)に至り追兵に執へられて、再びパリに護送せられ、却て過激派の勢威を加ふるを致せり。

立法議會

是に於てロベスピエール等は新憲法を批准し、フランスをして

國民議會解散
と立法議會の
成立

立憲王國たらしめたれば、同年九月二十九日國民議會を解散し、十月一日を以て七百四十五人の新議員を召集して立法議會(Assemblée Legislative)を組織せり。

三黨派

●三黨派 而して立法議會の議員は、フーイオン(Fouilland)、ジ

フーイオン

ロンデン(Dironde)、モンタージュ(Montagne)の三黨派に分る。(一)フーイオンは

ジロモン

王黨或は立憲黨と稱し立憲王政主義を執りて、ラファエット、バリー(Bally)等首領となり、(二)ジロモンは共和主義を執り、北アメリカ合衆國の制

モンタージュ

に倣はんとし、ローランド(Roland)、ブリソフ(Brissof)等牛耳を執り、(三)モンタージュは過激黨にして、激烈なる共和主義を唱へ、其間またジャコベン(Jacobin)、コルデリエー(Cordeliers)の兩派に分れ前者はロベスピエール之を率

外國の干渉

る後者はマラー(Marat)、ダントン(Danton)、デムーレン(Desmoulin)等之を率ゐ、ジロモン黨と共に威を振ひ、フョロン黨の勢は甚だ微弱なりき。

外國の干渉

フランス國民の王室に對する態度此に至るを見て、ヨーロッパ諸國は革命思想の波及せんことを恐れ、ブルボン家を擁護して其革命を鎮壓せんと欲し、プロシア王フレデリック・ウィルヘルム三世及オーストリア帝フランツ二世は同盟を結んでフランスに侵入し、ルイス十六世を救はんとす。

プロシア及オ
ーストリアの
同盟

フランス人はルイスの外國と同盟して此舉に出でしを疑ひ大に激昂し、一七九二年四月立法議會は王に迫りてプロシア、オーストリアに對して開戦を布告せしむ。是に於て連合軍は益々侵入し、フランス國內大に騷擾せしかば、ロベスピエール等は機に乗じてルイスを廢せんとし、暴民を煽動して八月十日

テイルリ
宮襲撃

●テイルリ(Tuileries)宮の襲撃をな

ルイスの幽囚
と九月の虐殺

し、ルイスを以て免れ、立法議院に投ず、議會直に王をタンブル(Temple)獄に幽閉して王權を停止せり。

ダントン王黨
を殺戮す

●九月の虐殺 此時外國軍益々侵入せしかば、ダントン等は勤王黨を恐怖せしめて外敵を拒がんとし、獄舎に繋がれし王黨及寺院の僧侶等凡一萬餘人を殺戮し、流血パリ市内に

外敵撃退

溢れて川をなせり、之を九月の虐殺といふ。●外敵撃退 時にラファエットはオーストリア軍に捕へられしが、デュムリエー(Dumouriez)能く戦ひ、プロシア軍をバルミー (Valmy) に破りぬ。加ふるに連合軍は將校の軋轢、糧食の缺乏、疾疫の流行ありしかば、革命軍は之に乗じて之を連破し、遂に進てライン地方及オーストリア領ネーデルラント即ちベルギーまで侵入せり。

國民集會

一七九二年九月二十一日に至り、立法議會の任期終りしを以て國民集會(Convention Nationale)之に代る。此集會はジロンドン黨とセ

立法議會の閉會と國民集會の成立

ルイス十六世刑せらる

ンターヌ黨との兩派より成り、一人の立憲王政を主張するものなく、ロベスピエール、ダントン、マラー等の首唱により、集會開會の日即ち九月二十二日を以て王政を廢して共和政體となし、新時代第一年の第一月となせり。●ルイス十六世の死刑 集會乃ちルイスを審問せんとし、十二月タンブル獄より引き出して裁判に附し、其革命に反對せしこと、外國に通ぜしこと及九月の虐殺を生ぜしめしこと等を以て其罪となし、一七九三年一月二十一日、ギロチン(Guillotins)といへる斷頭機を以て王を死刑に處せり。列國同盟 ルイス十六世死刑の報ヨーロッパ諸國に傳はるや、イギリスの

保安委員會

モンターヌ黨の勢力

宰相ピットはイスバニア、オランダ二國に説き、共にオーストリア、プロシアの同盟に加はり、二十五萬の大軍フランスに進撃せり。●保安委員會(Co-mité du Salut Public) 當時フランスにはモンターヌ、ジロンドンの二黨相軋轢したるが、モンターヌは遂にジロンドンを仆し、暴力を用ゐて其黨員を拘禁し、獨り國會の全權を握りて新に保安委員會を設け、マラーを委員長とし、ダントン、ロベスピエール等を委員となせり。

恐怖時代(Le règne de terreur)

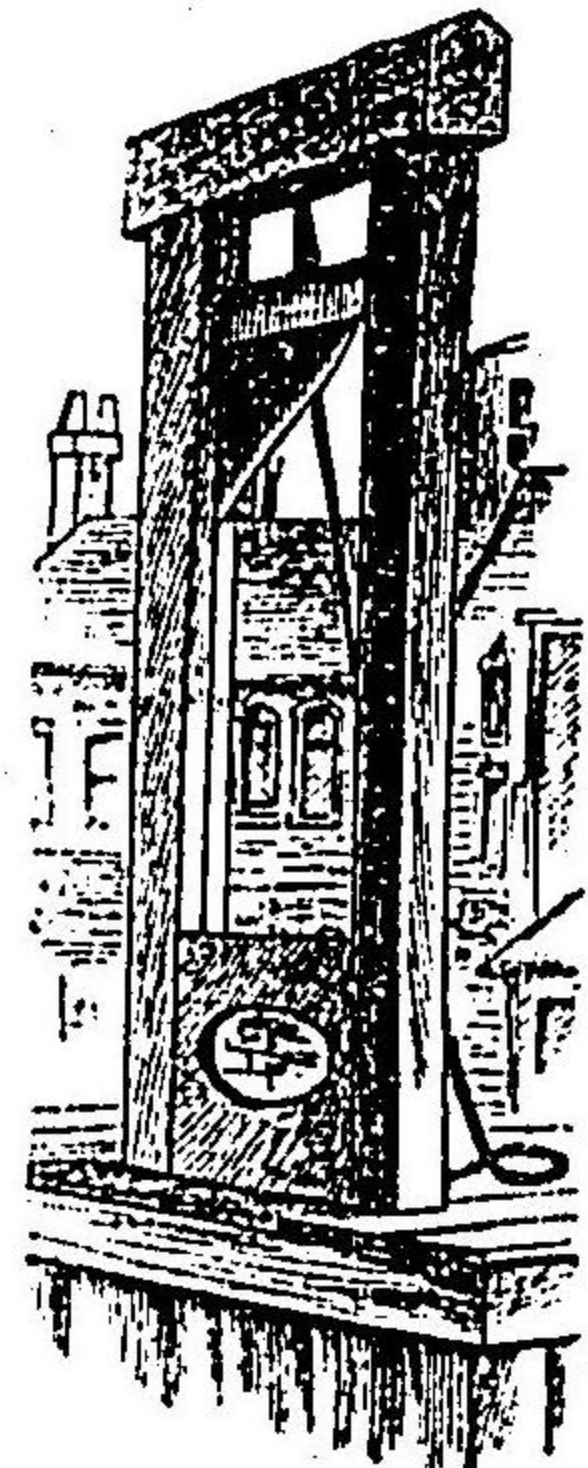
モンターヌ黨既に勢力を得たるも、一七九

三年七月十三日マラーは、シャーロット・コルデー(Charlotte Corday)に刺殺せられしかば、ロベスピエールは暴虐を逞うし、日々非革命黨を執へて之を斬首し、遂にルイス十六世の皇后マリー・アントアネット(Marie Antoinette)皇妹エリザベタをも殺し、斷頭臺上の露と消えしもの無慮萬餘人、リヨンナント等の地方の都會にても更に虐殺を行ひ、はては斷頭、溺殺、銃殺等殘忍の殺戮を行ひ、また秘密探偵を放ちて人心を攪亂せしめき。●諸制度の改革 是に於てモンターヌ黨は古來の制度習慣を改革して王政時代の舊態を破壊し、新に共和曆を制定して共和政建設の日即ち一七九二年九月

諸制度の改革



ル・ベスベロ



圖のンチヨギ



マラ



ンソルネ

ロベスピエールの暴威
ロベスピエールは機に乗じて己獨り
破壊説を執り互に相猜忌せしかは、ロベスピエールは機に乗じて己獨り
権力を弄せんと欲し先づエベール以下其黨人を執へて斷頭機上に送り、
尋でダントン、デムーレン等をも斬首し、更に其黨與一千餘人を殺せり。
●ロベスピエールの刑死 ●ロベスピエール既に勢を得るや、人民を平等
にして勞働をなさしめ、其所得の半を政府に獻納せしめ、質素清廉の生活
を送らしむるの理想を抱きしかば、益、恐怖的刑戮を勵行して、是が實行に
力めたり。然るに保安委員等其殘虐にして空想に流るゝを憤り恐れ、遂
にロベスピエール以下九十餘名を捕へて、一七九四年七月二十八日之を
死刑に處し、保安委員革命裁判所を廢し、國會再び權力を恢復して恐怖時
代は全く終を告げぬ。

ロベスピエールの理想と其
死刑

恐怖時代の終

二十一日を第一年の一月一日となし、キリスト教を禁じて、道理崇拜の教
を起し、以て寺院を閉鎖せり。 ●ロベスピエールの暴威 既にして過激
黨は三派に分れて、ダントンは稍、緩和説に傾き、エベール (Hebert) は依然
破壊説を執り、互に相猜忌せしかは、ロベスピエールは機に乗じて己獨り
権力を弄せんと欲し、先づエベール以下其黨人を執へて斷頭機上に送り、
尋でダントン、デムーレン等をも斬首し、更に其黨與一千餘人を殺せり。
●ロベスピエールの刑死 ●ロベスピエール既に勢を得るや、人民を平等
にして勞働をなさしめ、其所得の半を政府に獻納せしめ、質素清廉の生活
を送らしむるの理想を抱きしかば、益、恐怖的刑戮を勵行して、是が實行に
力めたり。然るに保安委員等其殘虐にして空想に流るゝを憤り恐れ、遂
にロベスピエール以下九十餘名を捕へて、一七九四年七月二十八日之を
死刑に處し、保安委員革命裁判所を廢し、國會再び權力を恢復して恐怖時
代は全く終を告げぬ。

フランス軍の勝利

此間フランス共和政府諸將の率ゐたる軍は、境上
に侵入せる列國の聯合軍を破り、南アルプ及ピレネー一帯の地方を降し、

ポーランドの分割を記す(海兵三五)新憲法の發布

して國勢挽回の手段を講じ、一七九一年新に憲法を發布し、(一)選舉王國を世襲王國に變じ、ポーランド王位をサクソニア家の世襲となし、(二)國王及樞密院は司法權を掌り、兩院より成る國會は立法權を握り、(三)市民及農民に貴族となるべき特典を與ふることゝなせり。然るに之に反對せる黨派は援をロシアに請ひしかば、**◎ロシアの干渉**を生じぬ、カタリナ二世乃ち革命主義の鎮壓を名とし、其將スワロフをして兵を率ゐてポーランドに侵入せしめ、ポーランドの志士コシィシコは愛國黨を率ゐて之を拒ぎ、争亂また起りしが、愛國黨遂に破れ、ポーランド王はロシアに黨して新憲法を廢せり。**◎プロシアの外交**、是より先きプロシアはロシアの強大を忌み、ポーランドの志士を援けしが、ロシアに獨り利益を得られんことを恐れ、遂に之と合同してポーランドを伐ち、一七九三年第二回の分割を行ふに至れり。即ち(一)ロシアはポーランドよりリトワニアの殘部、ウァルビニ(Wolhyni)及ポドリ(Podol)の地を得、(二)プロシアはダンチヒ、トルン(Thorn)、ポーゼン(Posen)の地を得、(三)ポーランドは爾來開戦條約の締結に際してロシアの許可を経べきことを約せり。

ポーランドの屈服
プロシアの外

第二回ポーランド分割の狀態

第三回ポーランド分割

是に於てロシア、プロシアの二國は新領土に守兵を置て威を示したれば、コシィシコ以下の愛國黨は憤慨して國辱を雪がんと欲し、一七九四年兵を擧げしが、貴族農民の衝突起りて上下和せず、ロシアの將イゲルストロム(Igelstrom)はワルシャワに進み、プロシア軍はクラカウ(Krakou)を抜きてロシア軍に合し、コシィシコ力屈して腐となりしかば、ロシア、プロシア、オーストリアの三國相謀り、一七九五年ポーランド王を廢し、第三回の分割を行ひ、ポーランド遂に滅亡せり。其占領地は(一)プロシアはマンビヤ(Masovia)、ビスタラ(Vistula)、ブグ(Bug)、ニイメン(Niemen)三河間の地及クラカウ地方の一部を得、(二)オーストリアは西ガリシア及ブグ河に至るクラカウの一部を得、(三)ロシアは以上二國所得の殘部及クルランド(Kurland)を得たり。

フランス革命思想波及の影響

此時に當りフランスの革命思想列國に波及し、(一)プロシアには文學、科學の隆盛に伴うて革命の思想其中に萌し、(二)イギリスには革命の潮流人心を浸潤して議會改革の企圖起らんとし、またアイルランドはフランスの援を得て獨立せんとし、(三)

ポーランドの滅亡
の分割及波
亡を記す
陸士(三八)
の滅亡
海兵(三九)

ヨーロッパ局の一變

フランス革命のヨーロッパに及ぼしたる影響を略記せよ (神戸高商、三七七)

イタリア、オランダにはフランス人の助を得て共和國を設立せるあり、(四)其他の列國にも國民漸く革命思想に心酔し、フランス之が中心たり。加之フランスに侵入せる同盟軍は其境上に撃破せられ、フランス軍反て列國を威嚇するに至り、ヨーロッパの局面之が爲めに一大變化を來せり。

第五十五章 ナポレオン一世の業 イギリス植民地の擴張

- 元老院
- 一、新憲法 五百名議會 監督官
- 二、勤王派の蜂起—ナポレオン鎮定
- A、ディレクトアル政治
- B、フランスの外征
 - 第一軍 オーストリア征伐—敗軍
 - 第二軍 オーストリア征伐—敗軍
 - 第三軍 ナポレオンのイタリア征伐 大勝利
 - カンポ・フォルミオ條約

新憲法

ディレクトアル政治 (Directoire)

を経て國民集會は事成れりとして解散し、ディレクトアル政治を行ふに至れり。新政府は先きに發布せし憲法の缺點多きを以て更に新憲法を制定し、(一)元老院(上院) (Salut de Anciens) 五百名議會(下院) (Conseil de Cinq-Cent) を設定して立法の事を掌らしめ、(二)監督官 (Directeurs) 五名を置き上下

- C、ナポレオンの事業
 - 一、立身
 - a、エジプト征伐
 - b、武力を以て五百名議會を解散し執政となる
 - c、イタリア再征—リッネビル條約
 - 二、内治—帝政
 - 一、内政改良—ナポレオン法典の編成
 - 二、皇帝となる—諸兄弟の封王
 - 三、オーストリア、ロシアを破る—ライン同盟
 - 四、プロシアを伐つ
 - 五、大陸封鎖
 - 三、外國關係
 - 四、イスパニア、ポルトガル征伐
 - 五、オーストリア征服

勤王派の蜂起

ナポレオンの立身

オーストリアの征伐

ナポレオンの戦勝

兩院より之を選擧せしめて行政の全權を委ね、而して五人の中一人は三ヶ月毎に交代して議長の椅子を占むることとせり。●勤王派の蜂起然るにパリーの勤王黨は此新憲法に異議を唱へ、相集りて一揆を起し議會に迫る、議會乃ちバラール(Barras)をして之を鎮定せしむ、バラール依て砲兵士官ナポレオン・ボナパルト(Napoleon Bonaparte)を抜擢して之を撃退せしむ、時に一七九五年十月四日なり、是よりナポレオンの名始めて顯はる。

フランスの外征

●オーストリア征伐 フランス既にプロシア、イスパニアと和せりと雖も、オーストリア、イギリスの兩國尙ほ反抗の態度を取りしかば、監督等は先づオーストリアを伐たんと欲し、兵士十四萬を募り、三道より進軍せしむ。第一軍はヨルダン(Jordan)之に將とし、第二軍はモロー(Moreau)之に將とし、第三軍はナポレオン之に將たり。前二將はライン河を渡りてオーストリアに侵入し、ナポレオンはアルプ山を踰えて北イタリアに進軍したるが、ヨルダン、モローはオーストリア將カロロの破る所となれり。されどナポレオンは向ふ所敵なく、イタリアを席捲して、一七九六年五月サルヂニア王ビクトル・アマデオ(Victor Amadeus)をして和を講

ナポレオン一世の業
イギリス植民地の擴張

ぜしめ、更にオーストリアに進入し、マンントワ(Mantua)の一戦に之を破り、長驅してウィーンに迫る。オーストリア力盡きて和を請ひしかば再びイタリアに向ひ、ベネチア共和國を併せ、ミラノ、モデナ、フェッララ(Ferrara)・ボロニャ、ローマニヤ(Romagna)等を合して、チサルピナ(Cisalpinia)共和國を建て、またジエノバ共和國をリグリア(Liguria)共和國と改め、共にフランス領となし、一七九七年十月オーストリアと ●カンポ・フォルミオ(Campo Formio)條約 を結べり。條約の要項は (一)オーストリアはフランスにベルギー諸州及ライン左岸の地方を割讓すること、(二)オーストリアはナポレオンの設立したるチサルピナ共和國を承認すること、(三)オーストリアはラスタット(Rastatt)に大會議を開きてドイツの國安を謀るべきこと、(四)フランスはベネチア地方をオーストリアに還附すること、(五)フランスはイオニア諸島を占領すべきこと等とす。

ナポレオンの立身

ナポレオンは地中海の一島なるコルシカ(Corsica)に生る、長じてパリーの兵學校に入り、品行方正學力優等を以て卒業し、砲兵士官となり、革命の起るや政府の命を受けてツィロン城を陥れ、デレクト

ナポレオンの
威名とエジプ
ト征伐

ピラミッドの
戦

アブキルの海
戦

ナポレオン、
シリア征伐の
失敗

ナポレオンの
歸國

ラビットの對
フランス略

ナポレオンの
新憲法

ナポレオンの
イタリア再征

アル政府の成立するや、バラの命を受けて勤王派の暴徒を撃退し、漸く其材幹を知らるゝに至り、遂にイタリア征伐に功を奏して、パリに凱旋するや、名聲一世に高まれり。◎ナポレオンのエジプト征伐 監督官等其威望を忌み、之を國外に出さんと欲し、イギリス征伐を命ぜしに、ナポレオンは先づエジプトを征してイギリスとインドとの交通を遮断せんと欲し、政府の許可を得て、一七九八年五月兵三萬五千に將とし、ツィロンを發して七月一日エジプトに上陸してアレクサンドリアを略しぬ。◎ピラミッドの戦 ナポレオン進でマムルク(Mamelukes)兵をピラミッド塔下に破り、カイロ(Cairo)を陥れて殆ど全國を平定せり。◎アブキルの戦 然るにイギリスの水師提督ネルソン(Nelson)艦隊を率ゐて來り、伐ち、フランスの海軍をアブキル(Aboukir)に粉砕せしかば、ナポレオンは本國との連絡を絶たれぬ。◎シリア征伐 ナポレオン乃ち翌年を以てスエズ(Suez)地峽を過ぎ、シリアを征伐してアッカ(Akka)を圍みしが、イギリス將軍シドニ・スミス(Sidney Smith)に妨げられ、志を達すること能はずして再びエジプトに還り、占領地の事務を處理し、またトルコ軍を破れり。◎ナポレ

オンの歸國 ナポレオンのエジプトに孤立するや、イギリスの宰相ピットは、輿論の後援を得て益戰を主とし、一七九九年ロシア、オーストリア、トルコ、ポルトガル、ナポリ等の諸國と大同盟を結び、各所に於てフランス軍を破り、チサルピナ等の共和國を解散せり。是に於てフランスの國內四分五裂して、列國に對抗すること能はず、政府頗る動搖するに至りぬ。ナポレオン、エジプトに在りて此報に接するや、機失ふべからずとなし、直にパリに還り、武力を以て五百人議會を解散し、新憲法を作り、三人の執政官(Consul)を置き、十年を以て任期となし、行政司法の權を掌握せしめ、其中一人をして實權を有することとし、ナポレオン自ら執政總長(Premier Consul)となりて政務を處理せり。

全ヨーロッパの平和

此時に當りイギリス、オーストリアの二國はナポレオンの執政政府を承認するを拒み、反て敵意を表せしかば、ナポレオンは兵をライン河畔に募り、モローを以て將となし、以てドイツ地方に侵入せしめ、またアルプ山下に兵を募り、自ら將としてイタリアに向ひ、一八〇〇年春アルプ山を越えて北イタリアに入り、六月十四日オーストリア軍

マレンゴの戦
リッネビル
條約

を ●マレンゴ(Marengo) に破りてイタリアを恢復し、尋てモローもまたオーストリア軍をホーヘンリンデン(Hohenlinden)に撃破しければ、オーストリア遂に屈し、一八〇一年 ●リッネビル(Lüneville)の條約 を結び、其要項は (一)オーストリアはトスカナ(Tuscany)公國をフランスに與したるサルマ公に割譲すること、(二)オーストリアはフランスにライン河西を與へ、ライン河を以て兩國の境となすこと、(三)オーストリアはカンポフォルミオ條約を承認すること、(四)オーストリアはフランスにベルギーの一部を割與すること、(五)オーストリアはバタビア、チサルピナ、リグリア、ヘルベチア等の共和國を承認すること等とす。是に於てヨーロッパの平和漸く恢復に歸せり。

ナポレオンの内治及帝政

ナポレオンの内治
ナポレオン法典
ナポレオンの帝政

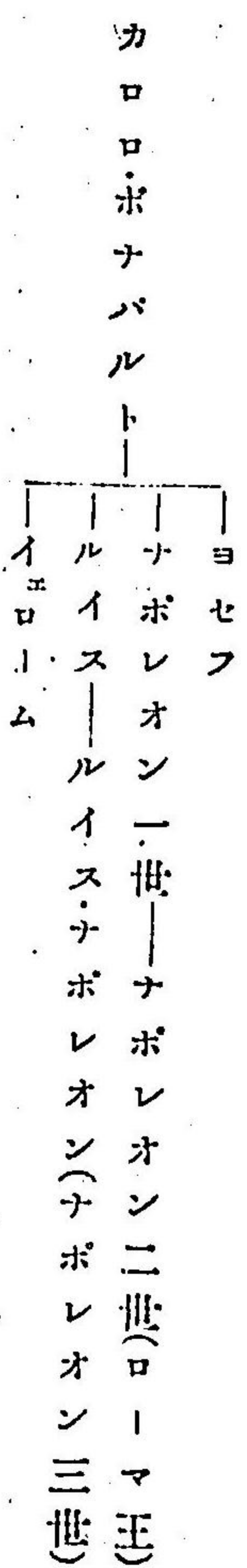
ナポレオン既に政權を握りしかば、銳意内治の改良に従事し、タレーラン、カルノー(Carnot)以下の人材を擢用し、カトリック教を復して國教となし、諸般の學術を獎勵し、政談集會を禁じて言論の自由を束縛し、商業貿易を自由にし、フランス銀行を設立し、司法制度を改め、裁判法を構成し、有名なるナポレオン法典(Code Napoleon)を編成

ナポレオンの即位

ナポレオン兄弟の封王

し、舊弊を矯正して百年の法制を確定せり。 ●ナポレオンの帝政 かくて舊來の稅政と革命の慘劇とに懲りたるものは、新政を歡迎してナポレオンを仰ぎ、一八〇二年國民一般投票の結果ナポレオンを終身執政官となし、一八〇四年元老院は共和政體を廢して君主政體となし、終に皇帝の位に即かしめぬ。翌年ナポレオン、イタリアに入りミラノに至りてロンバルド王家の鐵冠を得、イタリアの王位を兼ね、其翌年更にナポリを取て兄ヨセフに與へ、バタビア共和國を轉覆してオランダ國を興し、其弟ルイスを王となせり。

●ポツバルド家の系統



ナポレオンと列國

ヨーロッパ諸國はフランスの共和政體仆れて、君主政體となりしを見て大に驚き、イギリス宰相ピットの首唱に従ひ、一八〇五年イギリス、ロシア、スウェーデン、オーストリアの諸國大同盟を結び、フラン

列國の大同盟

ナポレオンの連勝
ウルム、アウステルリッツの戦、プレスブルクの條約

アウステルリッツの戦
（東部の諸師三六、西師三八）

ライン同盟

スに進軍せり。時にナポレオンはイギリスを伐て之を懲さんとせしが、ロシア、オーストリアの同盟軍既に國境に迫ると聞き、急に鋒を轉じてライン河を渡り、十月十七日オーストリアの將マック(Mack)と ●ウルム(Ulm)の野に會戦して之を破り、長驅してウインに向ひ、十二月二日 ●アウステルリッツ(Austerlitz)の戦に於てロシア、オーストリアの連合軍十萬を撃破し、十二月二十六日 ●プレスブルク(Presburg)の條約を締結し、(一)フランスはピエモンチ(Piedmont)・サルマ・ピアチェンツァを領有すべきこと、(二)オーストリアはベネチア地方をイタリア王國に割讓し、ナポレオンを其王となすこと、(三)オーストリアはバウリアにチロル(Tirol)・フォルアールベルグ(Vorarlberg)・ブリクセン(Brixen)・ブルガウ(Burgau)・アイヒスタット(Eichstadt)・パッサウ(Passau)・リンダウ(Lindau)・アウグスブルグを割讓すること、(四)オーストリアはユルテンベルヒとバーデンとに殘餘の前オーストリア領を割讓すること、(五)オーストリアはバウリア、ユルテンベルヒを王國となすことを承認すること等を決定せり。 ●ライン同盟 是に於て翌一八〇六年七月バウリア、ユルテンベルヒの二王國、

神聖ローマ帝國の滅亡

ナポレオンのプロシア征伐

イエナ、アウステルリッツの戦

ーデン、ヘッセン・ダルムシュタット(Hessen Darmstadt)・ベルグ(Berg)の三大公國、ナッサウ(Nassau)公國等ライン地方の十六州はドイツ帝國より分離してライン同盟を組織し、ナポレオン一世を戴て盟主となし、六萬三千の常備軍をナポレオンに附せり。其後オーストリア、プロシア、プラウンシュヴァイヒ等の外また之に加盟せしかば、ドイツ統一全く破れたり。 ●神聖ローマ帝國の解散 八月六日ドイツ帝フランツ二世は帝號を辭し、單にオーストリア皇帝と稱す。是に於て神聖ローマ帝國は名實共に滅びぬ。 ●プロシア及ロシアとの戦争 プロシア王フレデリック・ウィルヘルム三世はナポレオンの態度を惡みて、イギリス、ロシアと同盟を結び、フランスに開戰を宣告せしかば、ナポレオンはプロシア軍の未だ整頓せざる間に、疾風の如くプロシアに侵入し、プロシア總督ホーヘンローヘ(Hohenlohe)侯の兵と ●イエナ(Jena)に戰て之を破り、長驅してベルリンに入り、別將ダヴー(Davout)また ●アウエルシュタット(Auerstadt)に於て勝ちしかば、プロシア屈服し、ナポレオンは多く美術品を收めてパリに送致せり。翌年ナポレオンはロシア帝アレクサンドル一世のプロシアを援けしを怒り、兵を

アイロウ、フ
リドランド
の戦とチル
ットの條約

トラファル
ルの海戦
トラファル
ガル(陸士
三九)海兵
ガルの位地
と著名なる
所以を記せ
(神戶高商
三八)

大陸封鎖
(神戶高商
三八)
ベルリン命令
イスパニア、
ポルトガル征
伐

ウェリントン

率ゐてポーランドに入り、**●アイラウ(Eylau)** にロシア軍を破り、次
てロシアの軍を **●フリードランド(Friedland)** に破りて、**●チルジット
(Tilsit)** の條約 を結び、(一)ロシアは南プロシア、西プロシア、新プロシア
等より成る、プロシア領ポーランドをワルシア王公領となし、サクソニア王
をして之を治めしむることを承認し、**ダンチヒ(Danzig)** の自由市たるを
認め、新東プロシアの一部を收め、ヨセフのナポリ王となり、ルイスのオラ
ンダ王となり、イェロームのウエストファリア王となることを認め、併せてライ
ン同盟を承認することとし、(二)プロシアはナポレオンにライン、エルベ
兩河間の地を割讓すること、ナポレオンの兄弟が諸國王たるを承認する
こと、イギリス、フランスの和議の成るまで、イギリス船のプロシア諸港に
出入することを禁じ、またイギリスと通商をなさざることを決せり。

ナポレオン一世の全盛

ナポレオンの大敵はイギリスなりしかば、
之が屈服に力を盡せしかども常にイギリスの爲めに惱まされ、一八〇五
年十月二十一日 **●トラファルガル(Trafalgar)の海戦** にフランス、イスパ
ニアの連合艦隊はイギリスの水師提督ネルソンの爲に殲滅せられしか

ば、到底兵力を以て克つ能はざるを看破し、商業上之を苦めんと欲し、ベル
リン滞在の間 **●大陸封鎖(Systema Continental)** の令を發布し、大陸に於
ける諸海港を封鎖して各國のイギリスと通商するを禁じ、ヨーロッパの諸
國殆ど之に服従せり、其ベルリンに於て發せし故に、また一にベルリン命
令ともいふ。 **●イスパニア、ポルトガル征伐** 既にしてポルトガルは第
一に大陸封鎖の命を拒みしかば、ナポレオンは一八〇七年十月を以て之
を伐たしめ、其王をブラジルに驅逐して全國を占領せり。ナポレオンま
たイスパニアを取らんと欲し、國王カロー四世及太子フェルデナンドに迫
りて、王位を辭せしめ、其弟ナポリ王ヨセフを立つ、イスパニア人服せず、蜂
起してヨセフに抗せしかば、ナポレオンは兵を發して之を鎮せしめたり。
然るにイギリス將ウェリントン(Wellington)侯兵を將ゐてイスパニアに來
り、國民を援けしかばフランス軍遂に破れ、ヨセフまた逐はる。ナポレオ
ン聞て大に怒り、一八〇八年十月エルフルト(Erfurt)に大會を開き、四王三
十四侯をしてフランスに應援せしめ、自ら兵數萬を率ゐてイスパニアを
征し、マドリッドを陥れてイギリス兵を驅逐し、ヨセフを位に復して翌年

オーストリア
征服

ワグラムの戦
とウィーン條
約

ナポレオンの
再婚

イギリスのイ
ンド征服

一月パリに凱旋せり。然るにイスパニア人また起り、ウェリントンまた之を援けて、フランスの勢力半島より去るに至れり。●オーストリア征服。オーストリア帝フランツ二世はアウステルリッツの敗に報いんと欲して、常に心を苦しめつゝありたるが、ナポレオンがイスパニアに遠征せる不在を期とし、兵を集めてフランスに進軍せり。ナポレオン之を聞き、鋒を轉じて直にドナウ河を越え、一八〇九年七月五六日 ●ワグラム(Wagram)の戦に大にオーストリア軍を破り、十月十四日 ●ウィーン條約を結び、(一)オーストリアをしてバヴァリアにザルツブルグ(Salzburg)及インブールテル(Innviertel)を、リシヤフ公國に西ガリシヤを、ロシアに東ガリシヤの一部を、ナポレオンにサヴ(Sav)河地、方イストリア(Istria)とダルマチア(Dalmatia)とを割讓せしめ、(二)オーストリアをして大陸封鎖に加盟してイギリスと交通を絶たしむることに決し、翌年皇后ヨセフィナ(Josephine)を廢し、更にオーストリア帝の女マリアルイサ(Maria Louisa)を娶て皇后となし、以て帝位の鞏固を計れり。

イギリス植民地の擴張 此時に當てイギリスは、獨りフランスの壓

イギリスの外
國植民地侵略

抑を受けず、ヨーロッパ大陸の攻争して外を顧るに違なきに乘じ、連りに海外に力を伸し、益其植民地を擴張せり。殊にインドに於てはクラインポスチングスの後總督ホルンウオリス(Cornwallis) ウェルズリー(Wellesley)等の政略其宜しきを得て、モンゴル帝國を壓して殆ど全インドを服しぬ。此間イギリスはまたフランス、オランダ、イスパニアの植民地を奪ひ、セイロン島、ケープ植民地、マウリチウス(Mauritius)島、西インド諸島等を併せたり。而してオーストラリア(Australia)及其附近の諸島はタスマン(Tasman)の發見にかゝり、クック(Cook)の探險を經、一七八七年イギリス政府始めて罪人を放ちて之を拓殖せり。されば第十九世紀の初めより、移民續々生じ、ニューサウスウェルス(New South Wales) タスマニア(Tasmania) ニージーランド(New Zealand)等の植民地の基をなせり。

第五十六章 ヨーロッパ獨立の戦役 ウィーン列國會議

ウィーン列國會議

法王の廢立

A、ナポレオンの失墜
 ロシア征伐—大敗
 同盟軍侵入—バリー陥落—
 退位—エルバ島の主となる

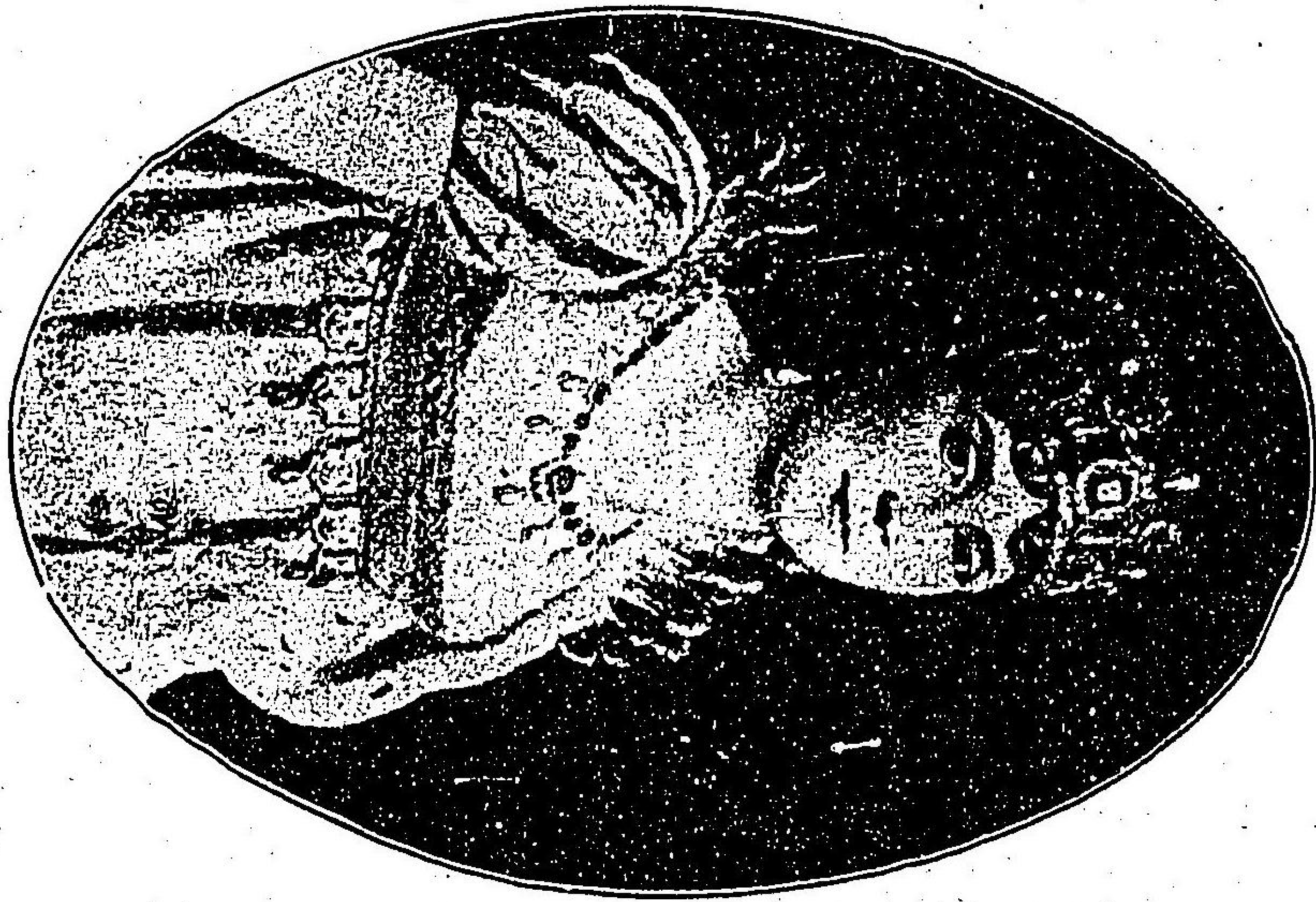
B、ナポレオンの末路
 再興—ルイス十八世の専制
 フランソ人の歓迎
 最後—ワテロロの大敗
 セントヘレナの配流
 オーストリア
 プロシア
 ロシア
 イギリス
 フランス

一、會合國

二、紛議(ボクソニア)の處置—戰雲暗澹
 サクソニア)

三、結末
 a、オーストリア、プロシア、ドイツ、ロシア、オランダ、スウェーデン、デンマーク、イギリス、スイスの膨脹
 b、イスパニア、イタリアの舊王家恢復

ナポレオン勢力の絶頂
 ◎法皇の廢立—ナポレオン既にイスパニア半島を略し、またオーストリアを怒らして起つこと能はざらしめしが、法王ピオ(Pio)七世が大陸封鎖に反対せるを怒り、之を廢して其領地を奪ひ、



拿破崙一世の肖像

ナポレオンの版圖

ロシア征伐大陸封鎖の失敗

ナポレオンの敗退

またオランダ王ルイスの領地を直轄とし、益々大陸封鎖を勵行せり。其版圖 當時ナポレオンの版圖頗る大にして、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ西北部、アペニン山西部より南ナポリに至る一帯の地及アドリア海に跨り、其他のヨーロッパ諸國をして其意に服従せしめたり。

ナポレオンの失墜

●ロシア征伐 ナポレオンの大陸封鎖を發する

や、ヨーロッパ列國其勢威を懼れて一時之に服従したるが、固より其欲する所に非ざれば、ポルトガル先づ背き、一八一二年に至てロシア帝アレクサンドル一世また之を放棄せり。ナポレオン之を聞て大に怒り、直にロシアに開戦を布告し、此歳六月大軍を起して之を伐ち、オーストリア、プロシア、イタリア、スウイス、オランダ、ライン同盟の兵凡六十萬之に加はり、ロシアはスウェーデン、イギリス、トルコ等と同盟して之を禦げり。ナポレオン破竹の勢を以てロシアに入り、スモレンスク (Smolensk)、ボロヂノ (Borodino) 等に大捷を得、長驅してモスクバに迫る。

ナポレオンの敗退

時に九月十四日府民悉く退去し、フランス軍の侵入するに及び、翌日より二十日に至る間、市街に放火して之を灰燼となす。

フランス軍宿するに處なく糧を得るに途なし、天また寒冽にして窮困名
状すべからず、ナポレオン遂に十月十九日を以て、モスクバを退てスモレ
ンスクに赴きしが、ロシア軍の要撃に遇て殆ど全軍を喪ひ、ナポレオンは
倉皇單身にして晝夜兼行パリに逃れ還れり。

ナポレオンの失敗

ロシアに於て大敗してより、ナポレオンの勢威頓
に衰へ、プロシア、イギリス、スウェーデン等の諸國同盟してフランスに迫り
しかば、ナポレオンは三十萬の少壯者を募集して之に當り、一八一三年五
月 ●リッテン (Lützen) ●バウツェン (Bautzen) の二役に於てプロシア軍を
破りしが、既にしてオーストリアまた同盟に加はり、十月十八日ライプチ
ヒ (Leipzig) に戰ひ、フランス軍大に破れ、ナポレオンは退てパリに入る、
之を ●ライプチヒの國際戰爭 といふ。 ●パリ陥落 是に於て同
盟軍は追撃してフランスに向ひ、イギリス將ウエリントン はイスパニアを平
定してフランスの南部に入り、ロシア、スウェーデンの兩軍はネーデルラン
ドを超えて侵入し、ブリッヘル (Brücher) はドイツ軍を率ゐてライン河よ
り進み、一八一四年三月パリを陥れたり。 ●ナポレオンの退位 是に

リッテン、バ
ウツェンの戰

ライプチヒの
國際戰爭とナ
ポレオンの大
敗

列國のフラン
ス侵入

パリ陥落

アルボン朝の
再興

パリの條約

ウィーン會議
委員

於て元老院議決してナポレオンの位を廢してエルバ (Elba) 島の主とな
し、年々フランス政府より二百萬フラン(約八十萬圓)の手當を供給し、マリ
ア・ルイサにバルマ、ピアチェンツァの公領を與へ、ルイヌ十六世の弟十八世を
迎へて帝位に即かしめ、 ●ブルボン朝を再興 したり。

パリ及ウィーン會議

一八一四年五月三十日列國は ●パリ條
約 を結び、(一)フランスは一七九二年の舊領に復し、(二)フランスはオ
ランダ、ドイツ、イタリア及スウイスの獨立を承認すること、(三)イギリスは
占領せるフランス植民地タバゴ島、サン・ルシー (St. Lucie) フランス島 (Ile
de France) を除くの外、の占領地をフランスに還附し、(四)同盟諸國はフ
ランスに償金を要求せざることに決し、尋で九月より六月に互て ●
ウィーン會議 を開く、是より先き列國の境界はナポレオンの爲めに攪亂
せられしかば、各國其境界劃正の必要を生ぜしなり。當時會したる談判
委員はオーストリアよりはメッテルニヒ (Metternich) フロシアよりはハル
デンブルヒ (Hardenberg) ノンボルト (Humboldt) ロシアよりはラスモウス
キー (Rasumovsky) カポヂストリアス (Capodistrias) イギリスよりはカッスル

ウィーン會議の結果

あること六年一八二一年五月五日年五十二を以て病死せり。

ウィーン會議の結果

是に於て列國は第二回パリ條約を結びて、フランスの境界を殆ど一七九〇年の舊に復し、次でウィーン會議の決議を結

- び、(一)オーストリアはベネチア、イルリリア (Illyria) 地方、ミラン、チロル (Tirol)、ザルツブルグ (Salzburg)、ガリシア等を領有し、(二)プロシアはワルシア大公國の一部、ダンテヒ、ライン地方、ウエストファーア地方、ニーウシュテル (Neuschätel)、リューゲン (Rügen)、スウェーデン領ポメラニア、サクソニアの大部を領有し、(三)ドイツは舊制を廢し、三十五邦及四自由市を以て新にドイツ聯邦を組織し、(四)ロシアはワルシア大公國の大部を得、(五)オランダ共和國はベルギーを合してネーデルラント王國を建設し、ウィルヘルム一世を以て其王とすること、(六)スウェーデンはノールウェーを併せ、(七)デンマルクはノルウェー割與の報としてラウエンブルグ (Lauenburg) を得、(八)イギリスはマルタ (Malta)、ハリゴランド (Heligland) 及ケープ植民地を得、イオニア共和國の保護者となり、(九)スイスは舊十九聯邦にジェネーブ、ワリス (Valais)、ニョーシャテルの三州を増加し、(十)イスパニア及イタリアに於ては舊王家を恢復することとなれり。

第五十七章 ヨーロッパ亂後の國情

フランス革命の影響

- 一、原因 自由平等主義の擴張
- 二、目的 博愛仁慈の政を布き 聖經の正理に基づき 緩急相救ふ
- 三、影響
 - 一、メッナルニヒの自由鎮壓主義
 - 二、ドイツ、イスパニア、ポルトガル、イタリアの改革運動
 - 三、フランス、イギリスの内政改良

神聖同盟

●源因

フランス革命及ナポレオンの征服は自由の思想を四方に散布せるを以て、自由平等の主義各國に擴がり、各國民皆憲法を立

神聖同盟の源因

歸せしめんと圖れり。

ドイツ國內の改革運動

ドイツ人は切に秩序の恢復、安寧の増進を希望し、大學生の如きは青年會(Burschenschaft)體育會(Turnverein)を組織して、盛にドイツの統一、自由を呼號せり。會一八一七年十月十七日ワルトブルグ(Warburg)に於てライプチヒ戰勝紀念會と、宗教改革の三百年祭との舉行あり、大學生等之を機として演說會を開き、ドイツの專制を攻撃して警視廳より發したる訓令を燒棄し、一八一九年三月二十三日、學生サント(Sand)は青年會鎮壓を勵行せるロシア帝の探偵者コツエプー(Koetzuepue)を暗殺せり。◎メッテルニヒの干渉　メッテルニヒ乃ち之を鎮壓せんことを計り、一八一九年カルルスバード(Karlstadt)に大臣會議を開き、(一)大學生を禁錮し、(二)ドイツに於て刊行する新聞雜誌等を嚴重に檢閲して言論の自由を抑制せり。

大學生の自由
唱導

メッテルニヒ
の干渉

イスパニアの
自由運動

イスパニアの改革運動

イスパニアはウィーン會議に基づきフェルデナンド七世位に復せしが、王は專制を事とし、一八一二年に發布せる憲法を廢し、嬖臣及僧侶を以て内閣を組織し、民權の自由を壓せしかば、所在の

イスパニアに
對する神聖同
盟の干渉
ベロナ大會

有志等相結びて獨立自由を唱へ、一八二〇年王に迫て憲法を恢復せしめ、
國內爲めに紛亂を生ぜり。◎神聖同盟の干渉。メッテルニヒ乃ち一八二
二年ベロナ (Verona) に列國會議を開き、フランスをしてイスパニアの騷
亂を鎮定せしめ、再び舊時の專制王制を復せしめたり。

ポルトガルの改革運動

ポルトガルの
新憲法

ポルトガル王ジョアン六世は、一八〇七年ナ
ポレオンに驅逐せられてブラジルに奔りしが、ウィーン會議の結果其位を
復せられしにも拘らず、本國に還らざりしかば、イギリス將ベレンスフォード
(Bellerford) 之を占領して專横を極め、専らイギリスの利益を圖る。一八
二〇年イスパニアに革命の亂起るや、國人蜂起してオポルト (Oporto) リス
ボン等を陥れ、憲法を制定して假政府を設立し、イギリス人を驅逐してジョ
アン六世をブラジルより奉還せしに、メッテルニヒ之を聞き、忽ち干渉して
憲法の破棄をなさしめ、國王をして舊制を復せしめたり。

イタリアの改革運動

オーストリア
のイタリア管
轄

イタリアはナポレオンの時其國民的統一に大
進歩をなせしが、ウィーン會議後再び變動を生じ、北部イタリアは全くオ
ストリアの管轄に歸し、其他はサルヂニア、ナポリ、シチリア、バルマ、モデナ、

カルボナリ

トスカナ等なりしが、皆オーストリアの勢力範圍内に歸せり。◎カルボ
ナリ (Carbonary) 當時メッテルニヒの專制政略勵行せられし爲め、イタリ

カルボナリの
結社

アは其束縛に苦み、敢て羈絆を脱せんことを企て、ナポリ、シチリアの人民
は尤も自由自治を熱望し、カルボナリ(炭燻)といふ秘密結社を結び、一にイ
タリアの統一と自由の擴張とを唱導せり。後イスパニア革命の報達す
るに及て、一八二〇年ナポリ人先づ蜂起し、國王フェルヂナンド四世に迫り
て、イスパニア憲法を頒布せしめ、シチリア人民もまた之を聞て獨立を圖
り、サルヂニア、ミラノもまた不穩の兆を示せり。◎メッテルニヒの干渉
是に於てメッテルニヒは、一八二〇年十月トロップハウ (Troppan) に翌年一月ラ

トロップハウ、ラ
イバンの列國
會議

イバン (Laybach) に列國會議を開き、其結果オーストリアは兵六萬を發し
てナポリの革命を鎮壓し、フェルヂナンドをして其舊態を維持し、專制政治
を勵行せしめたり。

フランスの形勢

ルイス十八世
の政治

ルイス十八世の位に復するや、屈辱を忍びて和を講
じ、七億フラン(約二億八千萬圓)の償金を出し、また割地の爲めに二百五十
萬の人口を失ひ、其四境は五年間外國軍隊の占領する所となれり。然る

に内閣及議會には貴族僧侶等の保守黨跋扈して、自由を壓せんとせしかば、ルイスは一八一六年議會を解散し内閣を改めて、デカーズ(Decazes)を首相とし、ギゾー(Gizot)、バラント(Barante)等の名士を用ゐて人心の激動を拒ぎしかば、國內の不平黨遂に破裂するに至らざりき、されど外に對しては神聖同盟に加入し、他國民の自由主義運動に反對せり。

イギリスの形勢

ウィーン會議後イギリスは首相カッスルリー(Castlereagh)

穀物條例
イギリス人民
の困弊

銳意内治の改良に盡せしが、是より先き數年の海戦とフランス對抗の爲め莫大の軍資を聯合軍に仕給したるとにより、國債の増加甚しく、●穀物條例(Corn Law)を通過して輸入穀物に重税を課せしより、工業の進歩と共に労働社會の困弊を來し、一八一六年同一七年の不作の爲めに穀物の價格非常に騰貴せしかば、人民の不平甚しく、暴徒各地に蜂起するに至れり。政府乃ち軍隊を發して之を鎮壓し、また集會條例、出版條例を發して自由を嚴制したるが、遂に民望を失し、一八二二年カッスルリーの死するに及て、●カンニング(Canning)外務の椅子を占め、自由主義を執て神聖同盟に反對し、またハスキソン(Huskisson)を擧げて大藏大臣となし、自

カンニングの
自由主義

由貿易を施し、着々財政の恢復を行へり。

第五十八章 アメリカ諸國及ギリシアの獨立

A、合衆國の形勢

- 一、 ウォシントン以後國力發展
- 二、 マチソンの時イギリスとの戦争—獨立の鞏固
- 三、 モンローの時—フロリダ購買

—モンロー主義

B、メキシコ

- 一、 獨立—一八二一年—皇帝イッルビデ
- 二、 共和政體—一八二三年

ベネスエラ

國名—スエバ・グラナダ

エクワドル

大統領—ポリバル

一、コロンビア聯邦

C、南アメリカ諸國の獨立

ニ、ブラザル

發端
ポルトガル王ジョアン5世の歸國
國民太子ペドロを推戴して兵を擧ぐ
獨立—イギリスの仲裁

a、リオデ・ジャネイロ

b、アルヘンテナ

c、モンテ・ビデオ

三、其他

d、ウルグアイ

e、パラグアイ

f、チレ

g、ペルー

D、

一、モンロー主義

起源

アメリカ諸國獨立に對する神聖同盟の鎮壓手段
合衆國大統領モンローの反抗的敎書

三、結果—アメリカ獨立の鞏固

一、原因—トルコ人の壓抑に對する反抗

ギリシア人の擧兵

E、ギリシア獨立

二、經過

ヨーロッパ諸國人の援助

エジプトの出兵(キタク)

イギリス、フランス、ロシアの聯合

トルコ敗北

三、結果

アドリアノブル和議
ロンドン會議—ギリシア獨立の確認

合衆國の形勢

合衆國はワシントンに繼いで、ジョアン・アダムス、トーマス・

ジェファソン (Thomas Jefferson)、ジェームス・マディソン (James Madison) 等交互

大統領となりしが、マディソンの時 ◎イギリスとの戦争 ①また興れり。

是より先きナポレオンの大陸制を布くや、イギリスは局外中立國のヨ

ロッパ大陸と通商することを禁じたれば、合衆國は爲めに其利益を妨げら

れ、國民憤恨の餘遂にイギリスに開戦を宣告したるなり。一八一八年締

和成り、合衆國獨立の基礎益々強固となり、國運次第に隆盛に赴ぐに至れり。

一八一七年モンロー (Monroe) 大統領となるや、イスパニアよりフロリダ

(Florida) を購買し、政黨の軋轢を鎮壓せり。

メキシコの形勢

是より先きメキシコはイスパニアの領地なりしが、

イギリス、
アメリカ合衆國
の戦争

イギリス
の戦争

モンロー主義
（高橋三六、東條三三、長崎八三）
モントローの教

に過ぎざるに至りしかば、神聖同盟は是を以て改革運動なりとなし、兵力を以て之を鎮壓せんとし、メッテルニヒ其首謀となりしが、イギリス首相カニング之に反対し、アメリカ合衆國大統領モンローは、一八二三年十二月敎書を發して、アメリカに於ける事件に對してヨーロッパ大陸の干渉を許さず、若し干渉を試むるものあらば、合衆國の平和と安寧とを害するものとして、斷然之に抗敵すべきを公言せり、是れ即ち所謂モンロー主義にして、是よりアメリカ獨立の基礎益鞏固となれり。

ギリシアの獨立

ギリシアはトルコの所領となりてより常に其壓抑を受けしかば、常に其羈絆を脱せんとする傾向を有せり。第十九世紀に至てトルコの勢力大に衰へ、武人権を弄して廢立を擅にし、エジプトのムルタンまた殆ど分離の状態となりしかば、ギリシア人は一八一四年オデッサ (Odessa) に、◎秘密交友會 (Hetairia) を組織し、ギリシア人にしてロシア帝の侍從武官たりし、イプシランチ (Ipsilanti) を會頭となし、以てロシアの後援を請へり。會、一八二〇年トルコに内亂起る、秘密交友會之を機として、兵をワラキア (Wallachia) 及モルダヴィア (Moldavia) に擧げ、直に鎮

ギリシア人獨立の企圖と秘密交友會
秘密交友會の擧兵

ギリシア人獨立の企圖と諸國人の應援

エジプトの出兵

獨立軍の連敗

ロシア、イギリス、フランス三國の聯合

定せられしが、翌年四月マイノト (Mainot) 族またモレア (Morea) に起り、次で叛亂全國を動かし、翌一八二二年に至りギリシア人遂に獨立を宣言せり。◎諸國人の應援 時にペロナ列國會議はギリシア人の此擧を以て一種の革命運動となし、之を鎮壓せんとしたるが、イギリス首相カニングは斷然ギリシア人を援くることを宣言し、同國詩人バイロン (Byron) は筆を投じ、劍を提げて獨立軍に赴き、ジエネーブのエーナル (Eynard) ドイツの詩人ウイヘルム・ミューレル (Wilhelm Müller) 等もまたギリシア人獨立の擧を賛同して、大に力を添え、獨立軍の勢大に振へり。◎エジプトの出兵 トルコ帝形勢を觀て大に懼れ、エジプトの太守メヘメッドアリ (Mehemed Ali) に應援を求む、アリ即ち其女婿ハサン (Hassan) をしてクレタ島を攻略せしめ、更に其子イブラヒム (Ibrahim) をしてトルコ兵を援けしむ、時にギリシア軍中黨派の軋轢起り、紛擾を極めしかば、連戰皆破れ、獨立の擧殆ど望むべからざるに至れり。◎三國の聯合 一八二五年ロシア帝アレクサンドル一世俄に死し、弟ニコライ (Nikolai) 一世立つに及て、痛くギリシアに同情を表し、イギリス首相カニングの勸誘に應じ、フランスを引て三國

ナポリの海

ロシア陸軍の勝利

アドリアノフ和議

ギリシア獨立の確認

ギリシア立憲王國となる

聯合軍を興し、メッテルニヒの抗議を排して獨立軍を援け、一八二七年十月二十日聯合艦隊はトルコ艦隊を ●ナポリの海戦● に撃て之を殲滅し、ロシア陸軍はバルカン(Balkan)山脈を横断してアドリアノフを略し、別軍はアジアより進でカルス(Kars)を陥れ、イェルサレムを併せたり。 ●アドリアノフの和議● 是に於てトルコ遂に屈し、一八二九年九月十四日、ロシアとアドリアノフに和議を結び、(一)ロシアはドナウ河口の諸島、カフカス山南の四地を得、(二)ドナウ侯領なるセルビア(Serbia)、モルダヴィア、ワラキアはキリスト教徒たる知事の支配に歸し、トルコ主權の下に屬せしめ、(三)トルコはボスボロス及ダルダネルス海峡の自由航行を許すことに決せり。 ●ギリシア獨立の確認● かくて一八三〇年列國ロンドンに會議を開き、全くギリシアの獨立を確認せり、是に於てカポド・イストリア(Capo d'Istria)を立て大統領となせしが、幾許もなく民望を失ひて暗殺せられしかば、イギリス、フランス、ロシアの三國はまたロンドンに會してギリシアを立憲王國となし、パルリア王ルイスの子オットーを向へて王となし、オットー一世と稱し、都をアテネに移せり。

第五十九章 七月革命及其影響

A、原因
 カロロ十世の民權抑壓
 アルジェリア事件
 セン・クルールの勅令
 宰相ポリニアクの失政

B、結果
 一、フランス
 カロロ十世の退位
 ルイス・フィリポ即位
 二、其他の諸國
 a、ベルギーの獨立
 b、ポーランドの叛亂
 c、スウイスの改革
 d、イタリアの改革
 e、ドイツの改革

革命の源因
 ●カ●ロ●ロ●十●世●の●失●政● フランス王ルイス十八世は一八二四年死し、弟カ●ロ●ロ●十●世●位●を●繼●ぎ●、頑●迷●固●陋●に●し●て●保●守●主●義●を●執●り●、民●權●を

カ●ロ●ロ●十●世●の●失●政●

自由黨の反抗

アルジェリア事件

セン・クルーの勅令
ポリニャクの政策

暴徒の蜂起
ポリニャクの免職

抑壓して王權の擴張に力を盡し、貴族僧侶を優遇して政權を委ねしかば、大に民望を失へり。されば宰相マルチニャク(Martignac)が、改進黨の内閣を組織したるに協はず、一八二九年王權黨の主領なるポリニャク(Polignac)をして之に代らしめ、益々專制主義を勵行せしかば、在野の自由黨はオルレアン公ルイス・フィリップ(Louis Philip)を推戴して政府を攻撃し、其勢頗る盛なりき。◎アルジェリア(Algérie)事件。ポリニャク依て民望を恢復せんと欲し、一八三〇年アルジェリア遠征軍を起して之を占領したるが、事豫想と反し、同年の總選舉に於て自由黨多數を占め、政府黨頗る少なかりき。◎セ・ン・クルー(Saint Cloud)の勅令。ポリニャク乃ち此歲七月二十五日を以て三條の勅令を發し、(一)最近選舉法の非法、(二)選舉權は行政官吏のみ之を有すべく、(三)出版の自由を禁ずることを布告し、同時に未だ集まらざる議會を解散せり。

革命の破裂

是に於てパリ一府民大に激昂し、七月二十六日ポリニャクの邸を襲ひ、四十二名の新聞記者は此勅令に反抗する宣言書を公にし、學生職工等また之に雷同して暴動を企て、其勢頗る猖獗となれり。◎ポリニ

ルイス・フィリップの迎立とカロロの退位

革命の影響

ベルギー獨立の源因

オランダとベルギー兩國國民根由的反對の理由

フクの免職。カロロ十世遂にポリニャクの職を免じて、モルトマル(Mortemart)を總理となし、内閣員の交迭を圖りしが、議員之を認めず、チエール(Thiers)等の首唱によりブルボン家の支族オルレアン公ルイス・フィリップをパリに迎へたり。◎カロロの退位。カロロ止むを得ず、位を王孫シム・ポール(Chambord)伯に譲り、フィリップを以て攝政たらしめんとせしが、議員等之を諾せず、フィリップを以てフランスに君臨せしむることに決し、フィリップ遂に王位に即き、憲法を修正して民權を鞏固にせり、之を七月革命といふ。◎革命の影響。此革命は忽ちヨーロッパ諸國の民心を鼓動せしめ、到る處に自由民權の擴張を企てしむるに至り、革命の亂所在に起れり。

ベルギーの獨立

◎源因

ベルギーはウイーン會議の結果により、オランダと合同してネーデルラント王國となりしが、兩國民の間に融和すべからざる根本的の理由ありしかば、兩國常に其分立を希望せり。即ち、(一)オランダ人はゲルマニ種族にして、ベルギー人は過半ケルチ種族なり、(二)オランダ人は新教を奉じ、ベルギー人は舊教を信じ、(三)オランダ人は商業を以て立國の基となし、ベルギー人は農業殖産を主となし、(四)

獨立運動

ベルギー革命
黨の獨立宣言
ロンドン會議

ベルギー獨立
の確證とオランダの反抗

オランダ人は自由貿易を喜び、ベルギー人は保護税法を便とし。(五)オランダ人はオランダ語を用ゐ、ベルギー人はフランス語、フランドル語を用ゐたり。加ふるに合同後の政府は主もにオランダ人を官吏に用ゐしかば、兩國の軋轢實に甚しかりき。●獨立運動 フランス七月革命の報達するや、一八三〇年八月二十五日ブルッセルに獨立運動起り、オランダ兵を撃退せしかば、獨立の氣運全國に亘り、十一月十八日國民議會を開きてベルギーの獨立を宣言せり。●ロンドン會議 是に於てイギリス、フランス、ロシア、オーストリア、プロシア等の強國は大使をロンドンに派して會議を開き、ベルギーの獨立を認め、サクスコープブルグ(Sachs-Coburg)の公子レオポルドを迎へて其王となすことに決せり。●オランダの反抗 然るにオランダは此決議に服せず、尙ほ兵を擁して反抗せしかど、フランス軍にアンベルス(Amvers)を陥れらるゝに及て、一八三九年終に其獨立を承認せり。

ポーランドの叛亂

是より先きロシアはポーランドに憲法を許し、特別行政を布き、以て人心を收めんとせしが、國人は亡國の悲を忘れず、秘密

ポーランドに於ける七月革命の形勢と獨立軍の興起

革命軍の鎮定

スウイスの自由主義改革

結社を起して恢復を計れり。●七月革命の影響 かくて七月革命の報到るに及て、十一月ワルシヤ府に一揆起り、忽ち全國に波及してロシアの徽章を撤し、ポーランドの白鷲旗を掲げ、ヨーロッパ列國の同情を豫想してロシアに反抗せり。されどプロシア、オーストリアは中立を守り、フランス、イギリスは兵を動かさざりしかば、獨立軍の勢更に振はず、加ふるにポーランドの痼疾たる貴族と平民との軋轢また起り、平民黨遂に貴族政府を倒し、次でロクビッキ(Chlopicki)を總統となしたるが、無能にして戰略を誤り、忽ちロシア軍の爲めにワルシヤを陥れられ、一八三一年十月獨立軍悉く鎮定せられ、特別行政廢せられ、幾多の志士はシベリアに流され、其財産は悉く沒收せられぬ。

スウイスの形勢

スウイスはウイーン會議の結果新に三州を加へ、二十二州を以て新聯邦を組織したるが、各州殆ど獨立して貴族政治となりしかば、統一完成、自由伸暢の聲大に起り、七月革命の報を得るや、ベルン、チューリッヒ等主動者となり、全國に擾亂を生ぜしが、一八三一年聯邦會議は自由憲法を採用し、各州に改革を斷行すべきを決せり、されど統一運動は未だ成功

せざりき。

イタリアの形勢

イタリアは既に革命運動に力を盡したりしが、七月革命の影響を受くるに及て、一八三一年モデナ、パルマ二國は其君主を逐うて假政府を建て、法王領また叛き、ナポレオン一世の二姪ナポレオン・ルイス及ルイス・ナポレオンまた之に加はり、フランス總理カシミール・ペリエ(Casimir-Perier)またイタリアを援けんとするに至りしかば、オーストリア乃ちフランスを威喝し、且つ兵を出して反亂を鎮壓し、イタリア統一の企圖をして水泡に歸せしめたり。

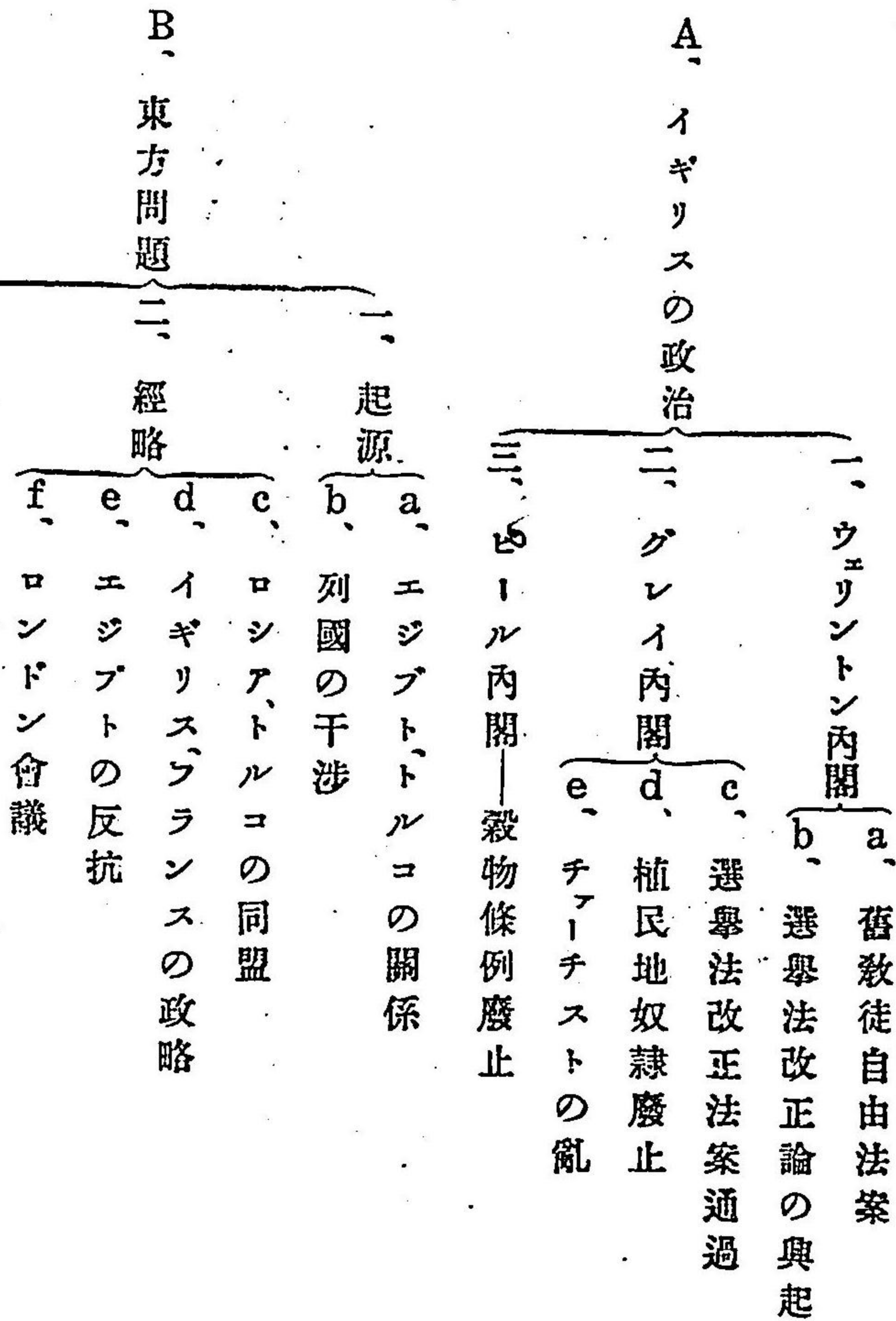
ドイツの形勢

ドイツもまた七月革命の影響を受け、ブラウンシュヴィヒの人民先づ一揆を起してカローロ公を退け、其弟ウルレムを奉戴し、次てヘッセン・カッセル(Hessen-Cassel)、サクソニア、ハンノーフェル等に自由主義の運動盛に起て憲法を定め、其他二三の侯國にもまた小亂を生じたりしが、久しからずして鎮定に歸し、ドイツの改革も事なくして終れり。

イタリアの擾亂

ドイツに於ける影響

第六十章 イギリスの政黨政治 東方問題



三、結果
g. エジプト屈服
h. フランスの失敗

舊教徒自由法案の通過

舊教徒自由法案の通過

選舉法改正論

ウエリントン内閣 カンニングは一八二七年を以て死し、ウエリントン侯翌年首相となりてトリーナー内閣を組織し、保守的政略を執り、一八二九年審査令を廢す。●舊教徒自由法案 (Catholic Emancipation Bill) 從來イギリスの制度として舊教徒は國會議員及官吏たるを得ざりしかば、其教徒最も多きアイルランドにては其不公平を鳴すこと多く、遂に團體を組織して其制度の打破を試み、有名なる辯士ダニエル・オコンネル (Daniel O'Connell) に委任して運動を試ましめ、遂に上下兩院の可決を経て、舊教徒は政治上、新教徒と同等の權利を有するを得るに至れり。●選舉法改正論 一八三〇年ジョージ四世死して弟ウィルヘルム四世繼ぐ、是より先きイギリスの選舉法は第十四世紀に規定したるまゝにして、頗る不完全を極められたれば、時勢の進歩につれ土地の興廢、人口の増加の爲めに改正の必用を生じ、ビートの如き既に改正に着手したれども、因襲の久しきによりて世上の反對を受けて果すを得ざりき。第十九世紀に至りてより蒸氣機關の應

ロックスバラ

ウエリントン内閣の熱辭職

選舉改正法案の通過

用、商業勃興業の隆昌につれ、社會の態度一變し、從來の小邑も忽ち大都となりしかど、リバプール (Liverpool)、マンチェスター (Manchester)、バーミンガム (Birmingham) の如きは選舉權を有するもの少く、却てコーンウォール (Cornwall) の如き小市よりは多數の議員を選出する權利ありしかば、有識の徒は改正の急を唱へ、是等の小市邑を ●ロックスバラ (Rotten Borough) 敗選區 と稱し、議論大に起る。是に於て改進黨のラッセル (Russell)、グレイ (Grey)、パーマーソン (Palmerston) 等はウィルヘルム四世の即位を機として選舉法の改正を提出す。ウエリントン侯等のトリーナー内閣は極力是に反對したるが、一八三〇年の總選舉に改進黨多く選ばれしかば、トリーナー内閣は不信任の爲めに總辭職をなし、グレイ代てホイッグ内閣を組織せり。
グレイ内閣 グレイは改進黨主義を執りしかば、兼ての問題たる選舉法の改革を斷行せり。●選舉法改正法案 (Reform Bill) の通過 一八三一年三月ラッセルは諸法案を國會に提出し、議論沸騰の後翌年上下兩院を通過したり、其結果として、(一)人口二千人以下にして代議士を出せし五十六のロックスバラを廢し、(二)人口四千以下にして多くの代議士を出せし三十選

選舉法改正の結果

植民地奴隷廢止案通過

植民地に於ける奴隷廢止

チャーチストの亂

舉區より各一人を減じ、(三)從來一人の代議士をも出すを得ざりし都市より四十三の選舉區を新設して、中二十二よりは各二人宛、二十一よりは各一人宛を出すを得べく、(四)イングランド、ウェールズの代議士を百五十九人とし、市府に住して毎年十ポンド(約百圓)以上の家屋税を納むるもの、または村落に住して毎年五十ポンド(約五百圓)以上の地租を納むるものに選舉權を與ふることなれり。●其結果 從來威力を逞したる地方の大地主は其勢力を減じ、商工業に従事せる中等社會之に代て實力を握るに至り、爲めに社會の進歩を來し政治上の面目を一新せり。●植民地奴隷廢止案通過 選舉法改革ありてよりイギリスの政治上の問題となしは、植民地に於ける奴隷廢止事件なり、ウィルバーフォース(Wilberforce)等之を唱へ、一八三二年遂に其廢止案の通過を見たり。是に於て奴隷八十萬人を解放し、政府は是に對して二千萬ポンド(約二億圓)を辯償せり。

ビクトリア女皇

一八三七年ウルレム四世死し、姪ビクトリア(Victoria)女皇位に即く。●チャーチスト(Chartist)の亂 會、オーコンネル等勞働社會を煽動してチャーチスト(券狀黨)を結び、普通選舉權、無記名投票選舉の施

穀物條例の廢止

非穀物條例同盟

穀物條例廢止案の通過

エジプト、トルコの關係

行、毎年國會議員召集法、被選舉者財産制限法の廢止、平等選舉區の設立、議員の俸給等に關する六箇條の請願書を提出したるが、一八三九年凶歉なるに乘じ、飢民等之に雷同し、五百萬人の捺印せる請願書を作て騷擾を極め、政府は漸く之を鎮壓するを得たり。●穀物條例の廢止 是より先き自由貿易派のリチャード・コブデン(Richard Cobden)、シヤンプライイト(John Bright)等は、穀物條例が其目的もと重税を輸入物に課して内國の工業を保護するにあるも、反て勞働社會を困窮せしめて、商工業の發達を妨害するに至れるを以て、非穀物條例同盟(Anti-Corn Law League)を組織して是が廢止運動に従事せり。一八四五年イギリスの穀物實らず、穀價騰貴して小民饑餓に迫りしより、時の首相ロベール・ピール(Robert Peel)のトリー・内閣によりて穀物條例廢止案提出せられ、貴族院に於て激烈なる反對を受け、ラッセル代て内閣を組織したるが、ピール再び首相たるに及び、遂に輿論の賛同を得て、一八四六年兩院を通過せり。

東方問題の起源

●エジプト、トルコの關係 エジプトの太守メヘメッド・アリ、ギリシア獨立の役にトルコを援けたるにより、カンヂア(Candia)

エジプトのイ
ブラヒム、シ
リアを占領す
ロシアの南下

ロシア、トル
コとの同盟
ウンキアル・
スケレシ條約

イギリス、フ
ランスの政略

イギリス、ト
ルコの通商條
約

即ちクレタ、キプロス二島を得たれども、更に望蜀の念を起し、一八三一年
其子イブラヒムを遣してシリアを侵し、コンスタンチノブルに迫る。ロ
シア乃ちトルコを救ふを名とし、大兵を發してダルダネルに據らんとせ
しに、ロシアの態度はヨーロッパ列國の利害上に關すること頗る大なりし
かば、權力の平均上列國遂にトルコに加勢するに至り、干戈忽ちバルカン
半島に動くに至る。

列國の干涉

西ヨーロッパ諸國は一八三三年を以て仲裁を斡旋し、シリア
及小アジアのアダナ(Adana)をエジプトに割かしめたり。◎ロシア、トル
コとの同盟 ◎ロシアは其計畫敗れたるを以て更に同年七月トルコに迫り、
ウンキアル・スケレシ(Uhkiar Skelessi)條約を結び、八年間の攻守同盟を約
し、他國の軍艦のダルダネルを通過するを得ざらしめき。◎イギリス、フ
ランスの政略 然るにフランスの首相チエール(Thiers)はエジプトを扶植
してトルコを抑え、以て自國の權力を張らんとせしかば、イギリス首相バ
ーマーストンは武力を以てエジプトを抑え、トルコの内政改革を計り、一
八三八年トルコと通商條約を結び、内地通行税を減ぜしむ。◎エジプト

ロンドン會議
四國のトルコ
援助

エジプトの風
服

の反抗 内地通行税の減ぜられたる結果は、忽ちエジプトに多大の損害
を生ぜしかば、メヘメッド・アリは之に服せず、トルコもまたシリア地方を取
られたるを怨み、此機に乗じて兵をシリアに發したれど却て破られ、國家
將に危殆に瀕するに至れり。◎ロンドン會議 是に於て一八四〇年イ
ギリス、ロシア、オーストリア、プロシアの四國、ロンドンに會議し、トルコを
助くることを定め、聯合艦隊を派遣してエジプトを攻め、アレクサンドリ
アを封鎖せり。◎エジプトの屈服 時にフランスの首相チエールは、四國
に反抗してエジプトを援けんとしたりしが、王ルイス・フィリポ之を許さざ
りしかば、エジプトは其豫期に反し、遂に大に大敗して降を乞ひ、シリアを
還附し、僅にエジプトを世襲するを得たり。後幾許もなくロシアはウン
キアル・スケレシ條約を廢棄せり。

第六十一章 二月革命及其影響

a. ルイス・フィリポ王の專政

二月革命に就き説明せし(三十七)臨上

- A、原因
 - b、エジプト事件の失敗
 - c、スウイス離盟戦争干渉の失敗
 - d、政黨の争
 - e、イスパニア王位に關する干渉

B、革命の破裂

- a、政黨各派の紛擾
- b、第二回選舉法改正宴會の禁止——パリ騷亂
- c、革命黨の共和政府設立
- d、ルイス・フィリポの出奔

始大統領
終フランス皇帝

C、結果

- a、フランス——ルイス・ナポレオン
 - 改革運動
- b、オーストリア
 - ハンガリアの叛亂
- c、プロシア——國會開設——憲法制定
 - サルヂニアの統一企圖——失敗
- d、イタリア
 - 其他小國の改革運動
 - ローマの反亂

革命の源因

フランス王ルイス・フィリポは即位の初め自ら平民王(L'eroi bourgeois)と稱し寛大なる政治をなし法令を改革し宗教の自由を許し

エジプト事件の失敗

スウイス離盟戦争の干渉と政黨の争

イスパニア王位に關する干渉

出版物の檢閲を寛にしたるが、後漸く專制に傾き、輿望次第に衰へたり。然るにチエール内閣は ●エジプト事件の失敗 によりて退きギゾー(Guzot)内閣之に代りしが、輿論の攻撃甚しく、また ●スウイス離盟戦争の干渉 をなし、イギリス首相バーマーの爲めに妨げられて國の體面を汚せる上に、 ●政黨の争 ありて、オルレアン黨、ボナバルト黨、共和黨の軋轢甚しく、殊にナポレオンの遺骸のバリーに迎へ葬らるゝに至り、ボナバルト黨の勢力頗る盛になれり。 ●イスパニア王位に關する干渉 是より先きイスパニア王フェルヂナンド七世の男統繼承法を破り、遺言して女イサベラ二世を立て、母后キリスチナ政を攝するや、極端王黨は前王の弟ドン・カロロ (Don Carlos) を奉じて兵を起し、母后は自由黨を引て助となし、兩黨相争ふこと七年、女王統遂に勝利を得たりしが、一八四六年フランス王は其子モンパシエール (Montpazier) 公をしてイサベラの妹ルイサ (Louise) を娶らしめ、オルレアン家にイスパニア王位を傳へしめんとするや、イギリスはユトレヒト條約に違背するを責め、爲めにフィリポの人望を失墜するに至り、前記の諸源因と共に遂に革命の破裂を來せり。

任期十年の大統領と即位
フランス帝政の再興
ナポレオン三世の逃走

メッテルニヒの逃走

ハンガリアの獨立運動

關稅同盟

兵士と人民との衝突
フランクフルトの國會

盡し、頗る專斷の處置をなせしかば、遂に議會と衝突を來せり。ルイス・ナポレオン乃ち反對者を威壓せんと欲し、一八五一年十二月二日の夜突然武力を以てカペイニアク以下オルレアン、ブルボン、共和等の黨士を捕縛して國事犯罪となし、直に議會を解散し、翌日更に數千人の反抗者を殺戮追放に處したり、之をクーデターといふ、蓋し非常處分といふ義なり。●任期十年の大統領。是に於てルイス・ナポレオンは憲法を修正して大統領の任期を十年となし、一八五二年一月十四日、七百五十萬餘の投票により、再び選ばれて大統領となれり。●即位。是よりルイス・ナポレオンはフランスの全權を握り、共和政治は唯名のみとなりしかば、元老院は帝政再興を發議し、一八五二年十二月二日國民大多數の贊同を得て、ルイス・ナポレオンをして帝位に即かしめたり、之をナポレオン三世となす、是に於てフランスは再び帝國となれり。

オーストリアに及ぼしたる影響

二月革命の影響また忽ちヨーロッパ諸國に波及し、到る處革命運動を惹起せり、中にもオーストリアの改革派は其勢最も猖獗にして、メッテルニヒはイギリスに逃走し、新内閣は議

會を召集して憲法の制定を圖りしが、皇帝フェルディナンド五世は位を其甥フランツ・ヨセフ一世に傳へて事漸く平定に歸せり。●ハンガリアの叛亂。然るにハンガリアは之を承認せず、コスート(Kossuth)を推して共和政府を建設せり。ロシア帝ニコライ一世依て兵を出してオーストリアを助け、遂にハンガリア軍を破り、コスートをトルコに奔らしめて漸く叛亂を鎮壓することを得たり。

プロシアに及ぼしたる影響

是より先きプロシア王フレデリック・ウィルヘルム四世盟主となりて、●關稅同盟(Zollverein)を組織し、オーストリア以外の諸邦の加入を得て、漸くドイツ統一の完成を遂げんとせり。メッテルニヒ逃走するに及て、王は三月十八日を以てドイツ國會設立と各邦の憲法許可とに關し、其嚮導者たるべき旨を公示せり、然るに端なく●兵士と人民との衝突。を生じ、王は已むを得ずして兵士を放逐し、ベルリンにプロシア民會を召集して纔に事なきを得たり。●フランクフルトの國會。三月末各邦新舊の議員等フランクフルトに假國會を開き、選舉規則及ドイツ憲法制定の件を議し、五月に至て新國會また同處に開かれ、

王侯の好

サルデニア王の暴兵

サルデニア軍の連敗

カロロアルベルトの讓位

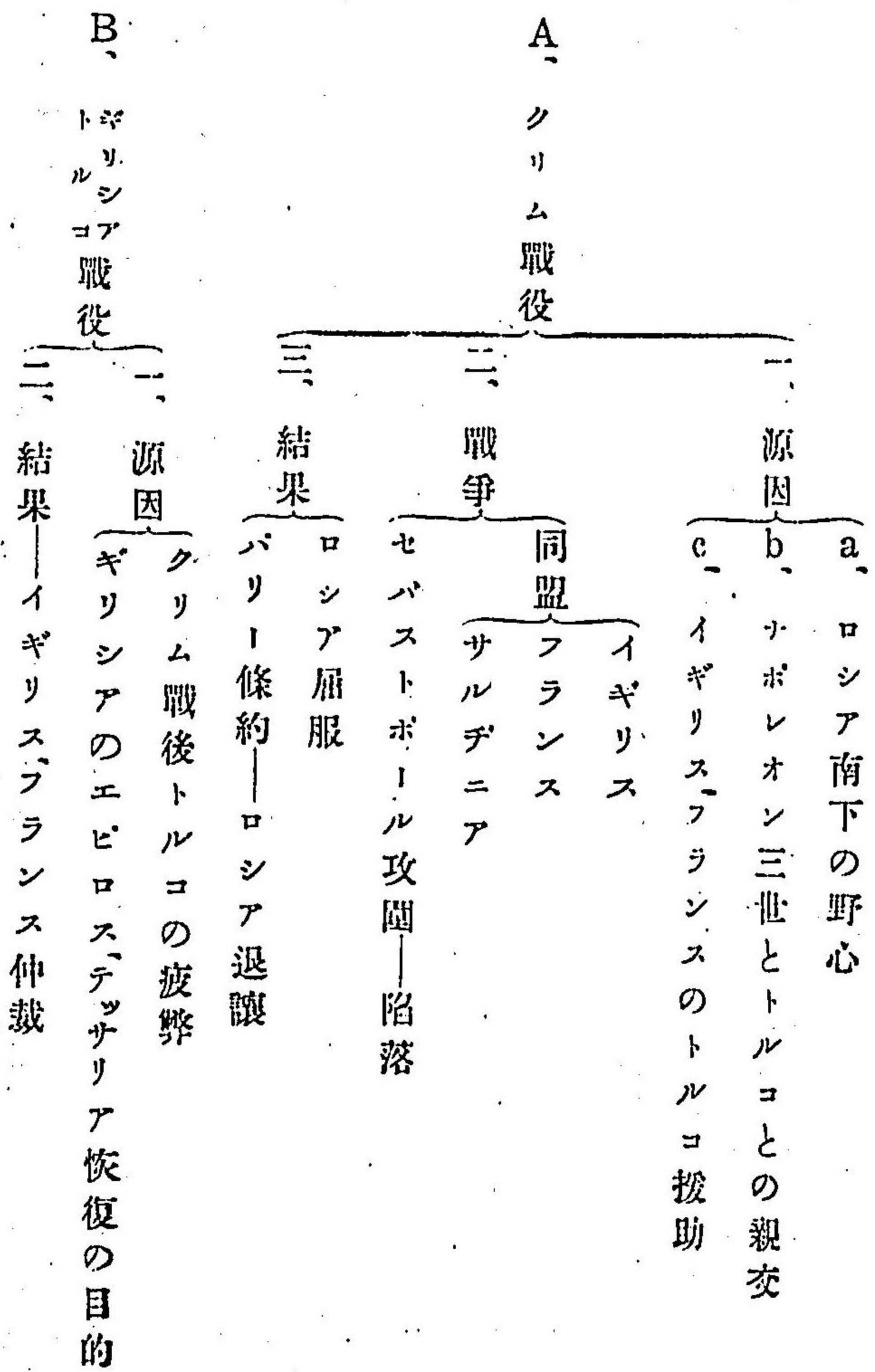
マツチニの事(東外三七)ローマの叛亂と共和政府

フランスのローマ駐在兵

新憲法を制定し、帝冠をプロシア王に勸進したるも、王は之を受けず、國會もまた有名無實の状態となりしかば、ドイツ統一の企圖は水泡に歸せり。**イタリアに及ぼしたる影響** サルデニア王カロロアルベルトは民意を迎へてイタリアの統一を企圖し、諸國もまた其希望盛なりしかば、二月革命の影響を受けてミラノ、ベネチア、ロンバルディア等兵を起すに至り、カロロアルベルトは以て機到るとなし、オーストリアに開戦を宣告し、オーストリア將ラデツキー(Radetzky)を苦む。◎サルデニア軍の連敗

既にしてラデツキーは本國の援兵を得、一八四八年七月廿五日クストツツァ(Custoza)に大にサルデニア軍を破り、翌年再びノバラ(Novara)の戦に大勝を奏せしかば、カロロアルベルト力屈し、位を子ビクトリオ・エマヌエロ(Vittorio Emanuele)に譲りて退隱し、オーストリアは依然イタリアを管轄せり。◎ローマの叛亂 此間ローマに叛亂起り、法王ビオ九世出奔せしかば、マツチニ(Mazzini)ガリバルヂ(Garibaldi)等ローマ府民を煽動し、一八四九年二月共和政府を設立せり。然るに法王援をフランスに乞ふに及び、時の大統領ナポレオンは直に兵を派してローマを陥れ、法王を復歸せしめ、之と共に兵をローマに駐めて不虞に備ふるに至れり。

第六十二章 西ヨーロッパと東ヨーロッパ



ニコライ一世の
大望とロシア
の交渉

ロシアの野心

●ニコライ一世の大望

ロシア帝ニコライ一世は性剛果にして南下の大望を抱き、トルコを以て垂死の病者に比し、一八五三年トルコ駐在イギリス公使に謀り、イギリス、ロシア共にトルコを分割し、ロシアはセルビア、ボスニア、ブルガリア、ワラキア、モルダヴィアを獨立せしめて之を保護國とし、また一時コンスタンチノブルを占領すべく、然らばイギリスのエジプト及キプロス占領を諸すべき旨を知照す。されどイギリス之に應ぜざりしかば、ロシア帝は更にトルコに迫り、其國內に住するギリシア教徒の保護者たらんとして成らざりき。●ナポレオン三世の政略 時にナポレオン三世は舊教僧侶の歡心を得んと欲し、トルコ帝に談じてギリシア教を排し、バレンチナ靈蹟管理權を舊教徒の手に歸せしめ、自ら其保護者となれり。ロシア帝之を聞て大に怒り、直に兵を發してモルダヴィア、ワラキアを占領す、トルコ乃ちロシアに開戦を宣告し、戰雲バルカン半島に暗燐たり。

イギリス、フランスの同盟

是より先き二國の艦隊ダルダネル及ボスボロス海峡にありて動靜を觀望せしに、ロシアの大兵を南下せしむるに至り、其暴横を惡み、之を本國政府に通牒せしかば、二國乃ち同盟してトルコを援助することに決し、一八五四年三月二十八日ロシアに向て開戦を布告せり。●ロシアの孤立 是に於てオーストリア、プロシヤは共に防禦同盟を結て兵をドナウ地方に出し、二國の政策に同意を表せしかば、ロシアは恰も孤立の有様となれり。

クリム戦役

二國艦隊既に二軍に分れ、一軍は北進してバルト海に入り、クロナスタット (Kronstadt) の砲臺を攻撃し、一軍は黒海に向ひ、クリム半島のセバストポール (Sevastopol) 軍港を攻撃せり。●セバストポールの攻圍 時にオーストリアは同盟に加入したるも兵を出す能はず、プロシヤは中立を守りしが、サルヂニアの宰相カプーレル (Cavour) は王ウグトリオエマヌエロを説て同盟に加はり、兵を起してセバストポールの攻圍に與らしむ。ロシアの守將メンシコフ (Menshikov) 力守し、會、同盟軍間に悪疫流行したれば、セバストポール容易に陥らず、劇戰相續くこと十二ヶ月、其間ロシア帝ニコライ一世死し、子アレクサンドル二世位を繼ぎ、更にゴルチャコフ (Gortschakoff) 侯を遣してメンシコフを助けしめたり。●陥落

ロシアの孤立

クリム戦役の
東部電報
三三〇

クリム半島
東部電報
三三〇

クリム半島
東部電報
三三〇

クリム半島
東部電報
三三〇

クリム半島
東部電報
三三〇

クリム半島
東部電報
三三〇

ニコライ一世
の死

セバストポールの陥落

八五五年九月八日に至り、フランス將ペリシエール(Pelissier)イギリス將シムプソン(Simpson)は胸塞マラコフ(Malakoff)を占領せしより、同盟軍忽ち優勢を加へ、十一日遂にセバストポールを陥れて之を占領せり。

パリ條約

パリ條約

是に於てアレクサンドル二世は平和を希望し、一八五六年三月三十日パリに於て、イギリス、ロシア、フランス、トルコ、サルデニア、オーストリア、プロシアの七國間に條約結ばれ、一、ロシアはドナウ河口並に其左岸なるベッサラビア(Bessarabia)の一部を割き、二、ロシアはトルコに於けるキリスト教徒並にドナウ侯領にかゝる保護を委棄し、キリスト教徒とイスラム教徒との同權はトルコ政府之を保證し、ドナウ侯領の關係につきては後日改革あるべきこととなし、三、ロシアはカルスをトルコに返却し、黒海沿岸には武庫を設けず、同海に軍艦を浮ぶること、トルコの艦數より多くすること能はず、四、セバストポールはロシアに還付すべきことを定む、而してワラキア、モルダヴィアの二國は一八五九年合同してロマニア侯領となり、トルコの保護に歸せり。

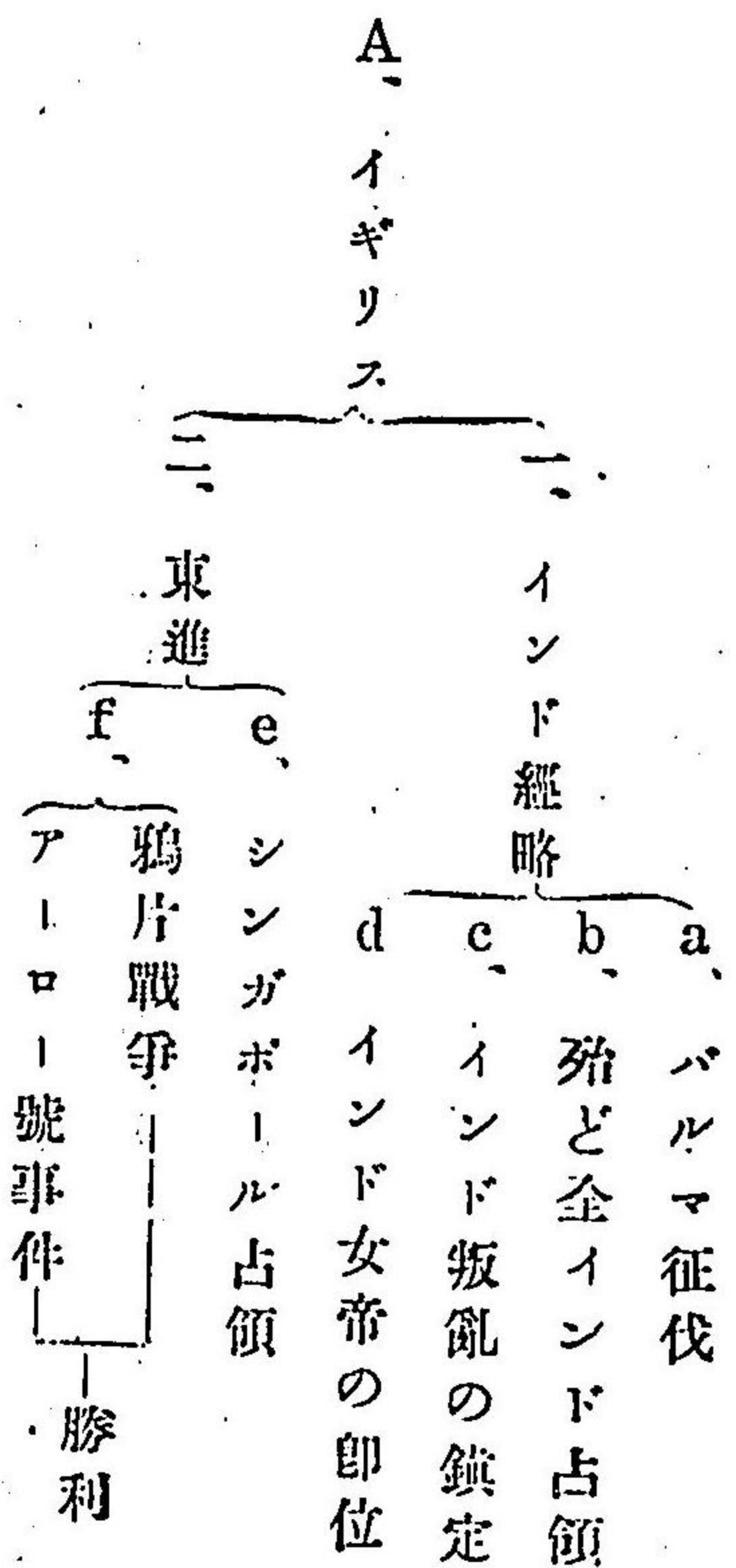
ギリシア、トルコ戦争

トルコはクリム戦争の爲めに多大なる打撃を

ギリシア、トルコの開戦

被ふりしかば、ギリシアは此機に乗じてトルコ領のエピロス、テッサリアの二州を併呑せんとし、ロシアの後援を恃みてトルコと戦を開きしが、イギリス、フランスの軍ピレウス(Pireus)に上陸してギリシア、ロシアの同盟を解かしめたり。後國人オトール王を廢し、一八六三年デンマルクの王子ジョルジ一世を迎へ立つ。

第六十三章 アジアに於けるロシア、イギリス、フランス



アロー號事件

北京陥落

○年鴉片戦争を起して全勝を占め、上海、寧波、福州、廈門、廣東の五港を開放せしめ、香港を割取し、南清に於ける商利を壟断せり。●アロー號事件一八五六年清人イギリスの國旗を立てたる汽船アロー(Arrow)號に關入して恣に垂組員なる清人を逮捕せしより忽ち戰端を開き、フランスまた同盟して廣東を陥れ、一八五八年天津條約を結びしが、翌年批准交換の際清人二國公使の上京を拒みて、白河の砲台より發砲せしかば、二國の連合軍は砲台を陥れ更に進んで北京を陥れて遂に前約を履行せしめ、揚子江の自由航行、新開港場許可、キリスト教保護の實を行ふに至れり。

ロシアの東略

ロシアは第十七八世紀の交より、カムチャツカ(Kamchatka)、アラスカ(Alaska)を取り、我千島列島の大部を占領し、一八〇四年通商を我邦に求め、一八五三年より漸くカラフト經營に着手し、我邦と衝突を惹起しぬ。●太平洋沿岸の經營　ロシアはまた太平洋沿岸の經營に力を盡し、總督ムラビヨフ(Muraviev)は連りに侵略を企て、アムール河口にニコライスク(Nikolajevsk)を建て、新に境界の劃定を清國に迫り、一八五八年●アイグン條約　を結びてアムール河北の地を得、シベリア、ウスリ兩江

ロシアと我邦との衝突
太平洋沿岸の經營

ムラビヨフにつきて述べる(山口高商、三八)

愛奴條約につきて知る所を記せ(高等學校、三七)

カラフト千島の交換

ロシアの中央アジア經略

ロシアのヒバ征伐の年を記せ(海兵、三九)

アフガニスタンとイギリス、ロシア

中央アジアに於けるイギリス、ロシアの角逐を略述せよ(海兵、三五)

ロシアの中央アジア經略

此間ロシアはまた中央アジアに侵略を進め、先づキルギス(Kirghis)を占領し、一八三九年ヒバ(Khiva)遠征軍を發し、漸次タシケン(D) (Tashkend)、ベンハラ(Bokhara)等の諸ハン國を併せ、一八六七年新略地を併せてトルキスタン州を置き、次でヒバ、サマルカンド(Samar kand)、ホーカンド(Khokand)を併せ、ロシアの勢、アフガニスタンに及ばんとせり。

アフガニスタン問題

アフガニスタン、インドは境を接するを以てロシアがアフガニスタンに勢を及ぼさんとするに及んで、インド總督オークランド(Auckland)は、アフガン王ドスト・ムハメット(Dost Muhameb)に説き、同盟して之を禦がんとせしに肯かざりしかば、オークランドは一八三九年

イギリス、ロシアの交渉

バミール問題

直にムハメットを討ちてカブル(Kabul)を陥れ其位を退く。既にしてアフガン人反亂を起し、イギリス人を虐殺せしかば、インド總督エレンボロー(Ellenborough)再びアフガンを討ち、ムハメットの位を復し、ロシアの後援を得てアフガニスタンに侵入せるペルシア軍を逐ふ。後ムハメット死し其子シェンアリ(Sher Ali)嗣ぐや反てロシアに與せしかば、一八七八年インド總督リットン(Lytton)は兵を發してカブルを陥れ、アリを逐て其子ヤクブ(Yakub)を擁立してインドの藩屏たるを約せしめ、次で一八八〇年に至りヤクブを廢してアフヅルラーマンを立てたり。●イギリス、ロシアの交渉 時にロシアは益々侵略の歩を進め、メルブ(Merv)を取り、ヘラット(Herat)に向ひしかば、イギリスはアフガン王を助け、一八八五年將にロシアと戦を開かんと思はしが、一八八七年に至り兩國共に一步を譲り、アフガニスタンの西北境を確定し、事無くして止むを得たり。●バミール(Pamir)問題 然るに東北なるバミールの境界は、イギリス、ロシア、清の三國に關聯して紛争絶えざりしが、一八九五年に至り妥協始めて成れり。

フランスの東方經略 フランスは第十八世紀以來アンナム(Annam)に

フランスと越南との交渉

清、フランスの交戦

着目し、一七八七年一種の條約を結び、爲めに清國と葛藤を生ぜしが、一八五七年イギリスと同盟して北清侵伐をなし、戦に關すること四年和を媾じて償金を得たり。●越南との交渉 越南王の獨立軍を起す時、フランスは其請に應じて之を助け、アンナムを統一せしめしに、王其所約を履行せざるを以て、一八五八年兵を發して越南を破り、サイゴン(Saigon)を占領し、尋てコチンシーム(Cochin-Chine)を割かしめたり。既にしてフランスはサイゴンを根據地となし、カンボヂヤ(Cambodia)を保護國となし、商賣の保護を名として、擅にハノイ(Hanoi)、ハイフォン(Haifon)兩所に兵を駐せしかば、越南王怒りて清人劉永福をしてフランス兵を攘はしめ、兩國遂に戦を開くに至れり。然るにフランスの海軍はクールベール(Courbet)の力によりて連りに勝ち、國都フエ(Hue)河口の要塞を陥るに及んで、越南王遂に和を請ひ、一八八三年トンキン(Tongking)を割き、國を以てフランスの保護國となし、平和の局を結び。●清國との交渉 越南は夙に清國の封冊を受けしを以て、此に至り清國異議を唱へ、遂にフランスとの間に戦を開きしが、クールベール等善く戦ひ、清軍大に敗れ、一八八五年天津條約を結び、フ

ンスは確實にトンキン地方を占領するに至れり、次てまた其西隣なるシ
アム(Siam)に迫りて數千方里の地を割取せり。

第六十四章 イタリア統一

A、サルデニア

ピットリオ・エマヌエロ王の善政
宰相カブールの政策

B、ナポレオン三世の應援

イタリア・フランス同盟
マジエンタ、ソルブレリノの大勝
ピラフランカの條約

サルデニアと四州との合同

C、統一の完成

ナポリ
ガリバルヂの經略
シチリア
降服
一八六一年エマヌエロのイタリア王
一八七〇年統一完成

ピットリオ・エマヌエロの政治 エマヌエロは父の業を紹きて夙に

ピクトリア
エマヌエロの
人望

カブールの劃
策

フランス、イ
タリア同盟

フランスの出
兵

イタリアの統一を圖り、自由主義を執りて立憲政治を布き、一に國家の幸
福を増進することに力を盡し、忠實の王といふ美稱を受けぬ。◎カブ
ルカブールの劃策 王またカブールの人物を知りて之を相となしたるが、カブ
ルは王を援けてイタリアの統一に力を盡し、グリュム戰役には兵を出して
イギリス、フランスの聯合に加りて以て其歡心を求め以て他日の援護を
受くる地を作り、一八五六年にはパリパリ會議に出で、列強の間に國威を
發揚し、尋でナポレオン三世を訪うて ◎フフランス・イイタリア同盟 を結
び、エマヌエロの皇女クロチルデ(Chotide)をナポレオンの叔父イェローム
の子に娶はし、以て關係を鞏固にせり。

戦争の破裂

イタリア統一の謀議世上に漏れしかば、一八五九年オース
トリアはサルデニアに向て兵備を撤回せんことを命ぜり、サルデニア従
はず、是に於てオーストリアは將軍ギョライ(Gyulai)をして之を討たしめき。
◎フフランス・イイタリアの出兵 ナポレオン三世乃ち兵を率ゐてサルデニアを援け、
二國の聯合軍忽ちオーストリア軍を破る。ガリバルヂまた崛起して義
勇兵を率ゐ、ロンバルディアに侵入しければ、サルデニアの兵勢甚だ隆盛と

オーストリアの敗北

マジエンタの戦
ソルフェリーノ

ビラフランカの條約

チャーリヒの條約

なれり。◎オーストリアの敗軍 ナポレオン三世また將軍カンローベル (Canrobert) マクマホン (Mac-Mahon) 等を率ゐ、六月廿四日を以て大にオーストリア軍を◎マジエンタ (Magenta) に破り、尋て同盟軍は同月二十四日◎ソルフェリーノ (Solferino) に於てオーストリア帝フランツ・ヨーゼフの率ゐたる大軍を破れり。

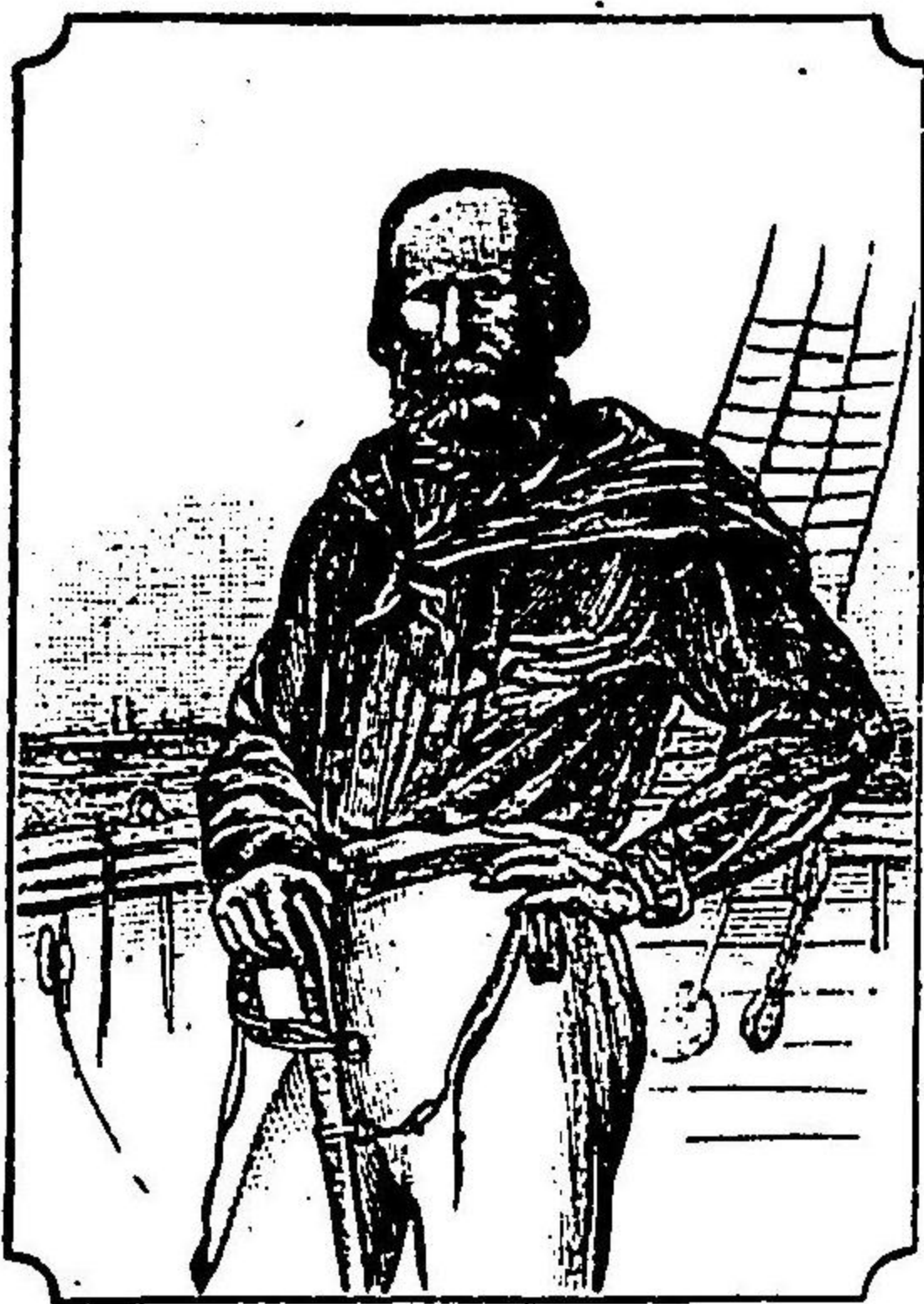
ビラフランカ (Villafraanca) の條約 時にプロシヤは密にオーストリア

アを援けんとするの傾向ありしかば、ナポレオン三世は、フランス國境の危からんことを慮り、七月十一日ビラフランカにオーストリア帝と會合し、(一)オーストリアはロンバルディアをフランスに割き、フランスは更に之をサルデニアに讓るべく、(二)オーストリアは従前の如く、ベネチアを領すべく、(三)イタリアはイタリア同盟を作り、ローマ法皇を其長となし、(四)さきに放逐せられたるトスカナ、バルマ等の諸公は舊領を復すべきこと等を決し、十一月十日更にチャーリヒ (Zürich) に於て之を確定せり。翌年サルデニアは報酬としてフランスにサボヤ、ニース (Nice) の二州を與へぬ。

第 二 十 六 圖



ビクトル・エマヌエール一世



ガリバルディ



カヴール

ガリバルディの
シチリア上陸

サルデーニヤの
発展

フランス、イ
タリアの條約
プロシア、オ
ーストリア、
フランスの關
係とイタリア
統一の完成

統一の進捗

是に於てビクトリオ・エマヌエロの威名大に揚り、バルマ、モ
デナ、トスカナ、ロマニアの四州は、舊主に從ふを欲せずして公然サルデー
ニアに來り屬しぬ。◎ガリバルディの戰略 時にシチリア島民はフランシ
ス二世の專制に苦しんで兵を擧げしかば、ガリバルディはカプールの援け
を得て、一八六〇年五月兵を率ゐシチリアに上陸して之を服し、次で鋒を
轉じてナポリを攻め、サルデーニアの援兵を得て國王フランシス二世を降
せり。◎サルデーニアの發展 是に於てエマヌエロはシチリア、ナポリを
合併し、法王領及ベネチアを除くの外イタリアを一統して、一八六一年新
議會をトリノ (Torino) に開き、イタリア王の位に即き、ビクトリオ・エマヌエ
ロ一世と稱せり。

統一の完成

一八六二年に至り、ガリバルディはイタリアより外國人を掃
蕩し、ローマを占領せんと欲して、兵を起せしかば、エマヌエロ王はフラン
スを憚り兵を發してガリバルディを執へしめぬ。◎フランスとの條約
一八六四年九月ナポレオン三世はイタリアと同盟を結び、フランスはロ
ーマに駐在せる兵を漸次に撤去するを約し、イタリアの首府をフィレンツェ

イタリヤの統一の完成
（東外）
三〇五
十九世紀に於けるイタリヤの統一
（東外）
三〇七

に遷せり。●プロシア、オーストリア、フランスの關係とイタリヤ統一の完成。一八六六年プロシア、オーストリア戦役起るに及て、イタリヤはプロシアに應援し、其結果としてベネチアを併せ、一八七〇年プロシア、フランス戦役起り、フランスのローマ駐在兵を召還するに至り、イタリヤはローマを占領し、多年企圖せるイタリヤ統一は遂に完成を告げたり。

第六十五章 北アメリカ合衆國の南北戦役

フランス、メキシコの交渉

- A、合衆國の發展
 - 一、テキサス事件——メキシコを破る
 - 二、ロッキー以西及オレゴンを得
 - a、政事上の軋轢
 - b、經濟上の相違
 - c、奴隸解放の利害

B、南北戦役

- 一、初め南軍勝利——リー將軍
- 二、戦況——ジャクソン將軍
- 三、結果——後北軍勝利——格蘭ト將軍
- 南北舊に復す
- 奴隸解放

C、メキシコ内亂

- 一、共和黨と僧侶との衝突
- 二、外國干渉
 - イギリス、フランス——居留民損害賠償の目的
 - メキシコ征服——成功
 - モンロー主義——失敗
 - フランスの野心

テキサス事件

合衆國の發展

モンロー大統領以來合衆國は次第に發達して、國力頗る盛になれり。●テキサス(Texas)事件。是より先きフロリダの合衆國の一州となりしより、イスパニア領との境界問題に葛藤を生じ、遂にサビネ(Sabine)リッオグランド(Riogrand)兩河間の廣大なるテキサスをメキシコより購入せんとするに至りしが、メキシコは之を拒絶せり。然るにテ

キサス人はメキシコに背き、反て合衆國に合同せんことを乞ひ、終に合衆國とメキシコとの間に戦端を開けり、其後メキシコ力屈し、テキサスに關する要求を放棄し、千五百弗にて其領地上カリフォルニア及ニューメキシコを合衆國に讓與し、事落着を告げぬ。尋て合衆國はまたイギリスと共にロッキー(Rocky)山以西を分割し、オレゴン(Oregon)を得たり。

南北合衆國の事情

合衆國はポトマク(Potomac)・オハイオ(Ohio)兩河によりて自然に南北に境せられ、隨て政治上經濟上の相違を生ぜり。◎二大政黨 當時政界に共和黨(Republican)と民政黨(Democrat)との二大政黨を生じて互に相争ひ、共和黨は北部に根據を固め、民政黨は南部に勢力を立てたり。◎經濟上の異點 南部は氣候温暖地味豊饒にして専ら農業に従事し、綿花・甘蔗の栽培甚だ盛なれども、北部は氣候寒冷土地豊沃ならざれば、一般に商業工業採礦林業に従事せり。◎奴隸廢止問題 是の如くなれば、南部は盛に奴隸を使役して耕作に従事せしめたるに、憲法の制定せられしより、奴隸使役を人倫に背くものとし之を解放せんと主張するに至り、北部は直に之に賛同したるも、南部は奴隸解放如何は經濟上重大なる關係を有するを以て、之に反對して論議數十年に亘れり。

南北經濟上の異點
奴隸廢止問題
アメリカ合衆國南北の争の源因を問ふ
(東京高商三五)

南北戦役

政黨上經濟上既に利害を異にせり、然るに、イメキシコ、カリフォルニア地方の合衆國に附きしより、北部の勢力頓に増加し、南人頗る之を含み、軋轢益甚しくなりき。◎戦争 一八六〇年非奴隸派なる共和黨のアブラハム・リンカーン(Abraham Lincoln)選ばれて大統領となるや、南部の南カロライナ(Carolina)州先づ分離し、翌一八六一年ミシシッピ(Mississippi)・フロリダ・アラバマ(Alabama)・ジョージア(Georgia)・ルイジアナ(Louisiana)・北カロライナ・テキサス・バージニア・テネシー(Tennessee)・アーカンソウ(Arkansas)の十州また分離し、是等十一州を以て聯邦(Confederate states of America)を結び、政府をリチモンド(Richmond)に設け、ジャフソン・デービス(Jefferson Davis)を推して大統領とし、アレクサンドル・ステュアート(Alexander Stephens)を副統領として公然北部に對抗せり。◎南北分離 是に於て南北全く分離し、一八六一年四月南軍先づ戦を開きぬ。初め南軍の勢盛にして其將ヨナタン・ジャクソン(Thomas Jonathan Jackson)等頻りに勝ち、北部の首府ワシントンに迫りしが、一八六三年七月北軍の將ミッド(Mede)の南

アメリカに於ける南北戦争の始末を記せ
女子高師(三五)

アブラハム・リンカーンの事蹟(三九)

ジャフソン・デービス

南北分離

南北戦役の終局

リンカーンの横死

グラントの東征(三三三)

併呑、共和二黨の軋轢

フランスの交渉とナポレオン三世の野心

メキシコ帝國

メキシコ共和國の復興

マキシミリアノの死刑

軍をゲッチェスブルグ (Gettysburg) に破りしより形勢一變し、北將グラント (Grant) 連りに勝ち、一八六五年四月リチモンドを陥れて守將リー (Lee) を降し、尋て大統領ブービスを虜にせり。◎結果 五月戦全く收まり、合衆國南北また一に合し、奴隸を全廢して黒人白人の同權たることを公布せり。◎リンカーンの横死 リンカーンは再び大統領に選ばれて名望高かりしが、一八六五年四月十四日ウASHINGTON 府の劇場に於て刺客に銃殺せられ、アンドロウ・ジョンソン (Andrew Johnson) を經て、一八六九年グラント將軍選ばれて大統領となれり。

メキシコの内亂

メキシコ既に合衆國と和せしが、大統領ベニト・ジャベレス (Benito Juarez) 僧侶の特權を奪ひ、信教及出版の自由、國土の開放を公布するや、◎僧侶黨と共和黨との軋轢 を生じ、戦争途に起れり、然るに其餘波引て居留イギリス、フランス、イスパニア人に損害を及ぼし、其賠償を迫まられしかば、ベニト・ジャベレスは之が承諾をなして敢て履行せざりしかば、一八六一年三國は同盟して兵を遣し之を懲せり。既にしてイギリス、イスパニアはフランスの望大なるを知り、一八六二年メキシコが償

金支出を約するに至て手を收めたり。◎フランスの交渉 フランス帝ナポレオン三世固より野心あり、合衆國が南北戦役を以て他を顧るに遑あらざるに乗じて、メキシコ共和政府を倒し、フランス保護の一新帝國を建てんと欲し、將軍フォレー (Forey) をして、連りにメキシコを伐たしめ、一八六三年五月プエブラ (Puebla) を陥れ、六月首府メキシコを占領し、オーストリア皇帝の弟マキシミリアノを立て、メキシコ帝となし、爰に立憲帝國を建設せり。

合衆國の干渉

然るに共和黨はフランスの處置に服せず、合衆國また南北戦役終を告げしかば、モンロー主義を主張して、フランスにメキシコより兵を撤せんことを求めたり。◎メキシコ共和國の復興 ナポレオン三世合衆國の抗議に敵すること能はず、終に一八六七年一月を以て兵を撤せり。是に於てメキシコの共和黨等マキシミリアノ帝を攻め、之を降して銃殺の刑に處し、ジャベレスを大統領に復し、國政の刷新を行へり。

第六十六章 プロシア、オーストリアの衝突

- 一、原因
- a. ドイツ統一に對する二國の確執
 - b. シュレスウイヒホルスタイン問題
 - c. オーストリアのプロシア輕蔑
 - d. プロシア、イタリア—同盟
 - e. プロシア軍サドワの大勝
- 二、戰況
- e. イタリア軍クストツァの敗北
- 三、結果—プラッグの和議

オーストリアとプロシア フランクフルト國會は有名無實を以て
 仆れしが、當時ドイツ國內はオーストリアと合同してドイツ統一を遂げ
 んとするものと、オーストリアを除きてプロシアを盟主となし聯邦を組
 織せんとするものとの二派に分れ、互に其議論を闘はしたるが、プロシア
 王フレデリク・ウィルヘルム四世は後者の聲みに應じて先づハンノーフェル、サ
 チアを得たり

ドイツの二派

圖七十二第



皇女アリトクピ



帝フセヨ・ツンラフ



タッペンガ



ンーカンリ

クソニアと同盟を結び、北部諸邦を糾合して、一八五〇年エルフルト(Elberfeld)に會議を開くや、オーストリア之に抗議し、二國の平和將に破れんとせしが、ロシア帝の仲裁とプロシア内部の動搖とにより、妥協遂に成り、一八五一年フランクフルトの國會は再び復せられぬ。

シウレスウイヒ・ホルスタイン(Schleswig-Holstein)問題

●プロシア

プロシアの雄
圖とウイ
ム一世

シウレスウイ
ヒ・ホルスタ
インとドイツ
との關係

の雄圖 一八六一年プロシア王フレデリキウレム四世死し、弟ウイレム一世王位に即く、時に年六十四なりしが、勇氣勃々年來の雄圖を遂げんとするに意あり。翌年ビスマルク(Bismarck)を擢て、首相となし、ローン(Roon)を陸軍大臣とし、モルトケ(Moltke)を參謀總長となしたるが、ビスマルクは議會の反抗を顧みず、軍制改良、軍備擴張をなし、所謂鐵血政略によりてプロシアを覇者となさんとす。◎シウレスウイヒ・ホルスタインの二公國は七年戰役の時デンマルクの屬領となりしが、是等の人民は純粹なるドイツ主義を愛し、常にデンマルクより分離せんとして止まず。一八四八年二國遂にデンマルクに叛き、プロシアの援を得たりしに、イギリス、ロシア二國はデンマルクに應援して之を伐ち、一八五二年ロンドン會

再度の叛亂

ウィーン條約

プロシヤ、オーストリアの衝突

プロシヤ、オーストリアの衝突の源因及結果を述べて、長崎高商(三九)

議の結果二國をして永久デンマルクの治下に屬せしむることとなれり、されど二國及ドイツ聯邦會議は之を承認せざりき。◎再度の叛亂 一八六三年デンマルク王フレデリキ七世死し、從妹の子キリスチナ九世立つや、ドイツ憲法に女子相續を禁ぜざるを口實とし、二國また叛き援をプロシアに求む。一八六四年プロシアはオーストリアと聯合してデンマルクを討ち、二國及ラウエンブルグ(Lauenburg)を占領し、一八六四年ウィーン條約を以てデンマルクをして是等三州を抛棄せしめぬ。

プロシヤ、オーストリアの衝突

翌一八六五年八月 ◎ガスタイン(Gasteln)條約 により、(一)オーストリア、プロシアはシレスウイヒ、ホルスタイン二國に對し共同主權を有し、(二)プロシアはホルスタインの軍道、郵便、電信等を保護し、(三)プロシアはラウエンブルグを得、其代りとしてオーストリアに二百五十萬タレント(約三百七十五萬圓)を仕拂ふべきを約せり

プロシヤ、オーストリア戰役

然るにプロシアはシレスウイヒ、ホルスタインを自國に合さんとし、オーストリアのホルスタインに於ける處置

プロシヤ、オーストリア同盟

プロシヤ軍の連勝 サドワの戰

七週間戰役

の不法なるを怒り之を占領するに至り、積年の怨み一時に破裂して一八六六年六月大戰を惹起せり。◎プロシヤ、オーストリア同盟 ビスマルク乃ちイタリア王ビクトリオ・エマヌエロのベネチア占領の望あるを利用して之と同盟し、北部聯邦を糾合して南北よりオーストリアを攻撃し、オーストリアはバウリア、ユルテンベルヒ、サクソニア、ハンノーフェル、バーデン、ヘッセン・カッセル等と結びて之に抗せり。◎戰況 プロシアはモルトケ非凡なる軍略を以て三十二萬六千人を五軍に分ち、ウィルヘルム一世親征の途に就きしかば、軍氣大に振ひ、忽ちハンノーフェル、ヘッセン・カッセル、サクソニアを略して、ボヘミアに侵入す。◎サドワ(Sadowa)の戰 七月三日ケーニヒグレイツ(Königgrätz)の附近なるサドワの戰にオーストリア軍を粉粹し、次でブラーグを畧し、他軍は長驅してウィーンに迫りしが、八月二十三日のブラーグの和議によりて平和を復しぬ、戰始まつてより僅に七週日、故にまた七週間戰役といふ。

イタリア方面の戰況

イタリア方面に於てはオーストリアの將アルベルト大公は六月二十四日クストツァ(Custoza)にイタリア軍を破り、また

イタリア軍の大敗

オーストリアの水師提督テゲトフ(Tegethoff)は七月二十日イタリアの艦隊をリッサ(Ussita)に破り、イタリア大に窮したるが、プラウグの條約成るに至て事全く收まれり。

プラウグの條約

プラウグの條約

- (一) オーストリアはドイツ聯邦同盟の解散を承認し、
- (二) オーストリアはドイツ聯邦より分離してドイツ帝國の新立を承認し、
- (三) オーストリアはシレスウイヒホルスタインに關する權利を放棄して、之をプロシアに委任し、
- (四) オーストリアは二萬萬タレント(約三萬萬圓)の償金をプロシアに拂ひ、
- (五) オーストリアはベネチアを放棄し、之をイタリアに與ふべきを定めしかば、プロシアはシレスウイヒホルスタイン、ハンノイフェル、ヘッセン、ナッサウ、フランクフルト等を占領し、國力大に揚るに至れり。

オーストリアの内治改良

オーストリアの内治

戰後オーストリアは銳意内治の改良を計り、財政を整理し、軍制を改め、ホンガリアに一八四八年の憲法を復し、新にホンガリア政府を建て、外交軍事以外の行政を司らしめ、一八六七年オーストリア帝フランツ・ヨゼフ改めてホンガリア王となれり。是に於て二國同元首を戴き、其内政は全然別政府より出て、善く調和せるが如きも、陰然たる人種の反目は遂に已む時なし。

る人種の反目は遂に已む時なし。

第六十七章 ドイツ、フランスの確執 ドイツの統一

ドイツの統一

- 一、原因—ナポレオン三世の覇氣 ライン左岸要求
 - 二、破裂—イスパニア王位問題 リクサンブル購買問題
 - 三、結果—ベルサイユ條約 フランス大敗—パリ降服
- ドイツ統一

プロシア、フランス戰役

ナポレオン三世の覇氣

ナポレオン三世は覇氣満々として一に國力發展に心を用ゐ、或はロシアに抗し、或はオーストリアに敵したるが、ロシアの盛なるに及てまた之を抑えんとするに至れり。一八六六年プロシア、オーストリア戰役起るに及て、二國の間に周旋して其宿望なるライン左岸の地を得んとして成らず、戰後またプロシアに要求して拒絶せら

ナポレオン三世の左岸要求の失敗

リックサンブル要求

プロシアの抗議

プロシア、フランス戦争の源因 東洋三八年

君政憲法の確定 ナポレオン三世の干渉

レオポルドの継承辞退

れしより、大にプロシアを怨み、之に報ひる所あらんとせり。●リックサンブル(Luxemburg)要求 是に於てナポレオン三世はオランダ王ウィルヘルム三世の領地なるリックサンブルを購求せんとせしが、リックサンブルはドイツ聯邦の一にして、其要砦にプロシアの戍兵を置きしかば、プロシア抗議を挟み、ナポレオンの希圖を挫けり。ナポレオン憤慨に堪はず、武力を以てプロシアを懲さんとし、其機會を待ちしに、愈、イスパニア王位相續の問題起り、之を口實として遂に干戈を弄するに至れり。

イスパニア王位相續問題

イスパニア女王イサベラ專制にして政治まらず、一八六六年九月國人亂を起して女王を逐ふ。マドリードの國會乃ち君政憲法を確定し、プロシア王ウィルヘルム一世の親戚なるホーヘンツォルレン公子レオポルドを迎へ立てんとす。●ナポレオン三世の干渉 一八七〇年七月ナポレオンはベネデッチ(Benedetti)を使節としてプロシアに遣し、ウィルヘルムをしてレオポルドの王位を辭せしめんことを強請し、プロシア王之を拒絶せしが、レオポルドは兩國間の事變を想ひて自ら王位繼承を辭せり。されどナポレオンは之にて満足せず、更にベネデッチ

戦争の破裂

プロシア、フランス戦役の源因 東洋三八年

二國の出師

千八百七十年に起りし世界史上重要な事件を問ふ 東外、三九

プロシア、フランスの戦役

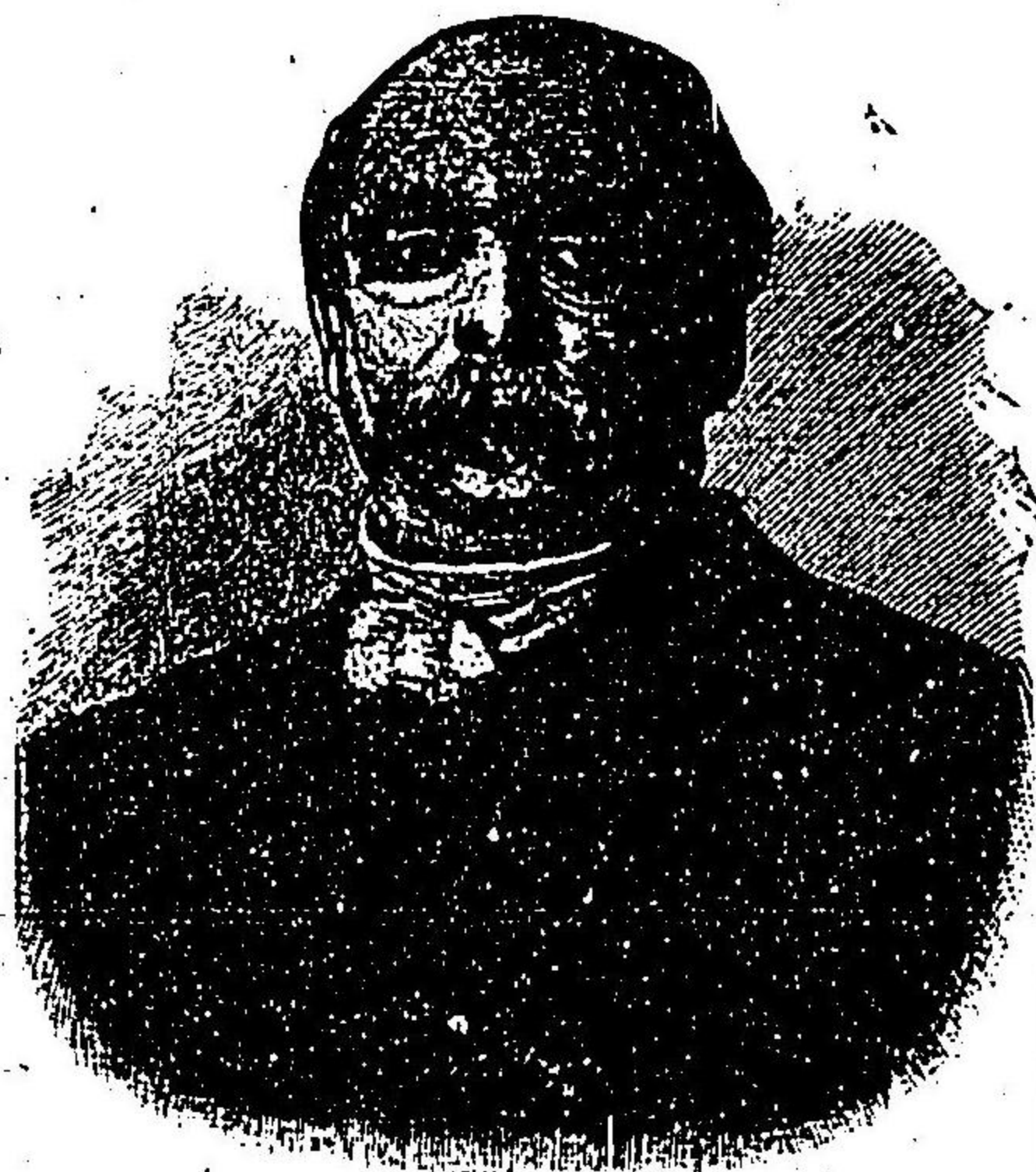
ナポレオン三世は南ドイツ諸州の已を援けんことを期して此舉に及びしが、南ドイツ諸州はナポレオンの態度の不正なるを惡み悉くプロシアに同盟せしかば、ナポレオンの豫想大に反せり。されどナポレオン少しも屈せず、總員三十二萬を三軍に分ち、マクマオン、バゼーヌ(Bazaine)等の諸將之を助てドイツに侵入せり。プロシアは既に期する所ありしかば、直に同盟軍八十五萬を三軍に分ち、モルトケ參謀となりて作戰計畫をなし、威風堂々として其勢當るべからず、第三軍進でフランスに入り、マクマオンをウエルト(Worth)に破り、第一二軍もまた連勝の勢を以てメッツ(Metz)に迫りしが、プロシア王ウィルヘルム一世もまた親征してフランス軍を驅逐せり。次でバゼーヌはメッツに退守し、プロシア親王フレデリキカローロはマクマオンをシャロンに撃ちしが、マクマオ



ルイ第一世



モレルケ



ピスマルク

プロシア、
フランス、
東外三
略の結
果を
述せよ

ガムベッタ

セダンの
攻圍
とナポ
レオン
三世の
降服
(セダン
神戶高
三三)

中等西洋歴史詳解 第四篇 最近世史 第六十七章 ドイツ、フランスの統一

ンはメッツを援はんとして、途プロシア軍に遮られ遂にナポレオンとセダン(Sedan)に據る。◎ナポレオン三世の降服 是に於てプロシア兵四面よりセダンを攻圍し、フランス軍力竭きて九月一日ナポレオン遂に降を乞ひ、全軍皆捕虜となれり。

パリーの降服 セダンの敗報パリーに達するや、人民大に激昂して、帝政を仆し再び共和政を建て、プロシアと和を議せんとせしが成らず、プロシア軍長驅してパリーを圍む。時にストラスブルグ、メッツ等また降りしかば、ガムベッタ(Gambetta)は風船に乗りてパリーを脱し、東南地方に至て兵を募り、シャンジ(Changy)、ブルバキ(Bourbaki)等をしてパリーを救援せしめしが、皆プロシア軍に破られ、パリーの突圍もまた其功を奏せず、包圍を受くること四ヶ月餘にして力竭き、一八七一年一月廿八日遂に降を乞へり。

媾和條約 是より先きピスマルクは共和政府の外相ファール(Faure)と會して、フランスよりエルザス、ロートリンゲンの二州を得んことを要求せしが、ファール諾せず談判無効に歸し、パリー降るに及て始めて休戰條約を結び、(一)フランスはすべて武器をプロシアに引渡し、(二)フラン

スはメッツを援はんとして、途プロシア軍に遮られ遂にナポレオンとセダン(Sedan)に據る。◎ナポレオン三世の降服 是に於てプロシア兵四面よりセダンを攻圍し、フランス軍力竭きて九月一日ナポレオン遂に降を乞ひ、全軍皆捕虜となれり。

休戦條約

ベルサイユの
假條約

フランクフル
トの本條約

始めてドイツ
皇帝の位
に即きたる
プロシア王
の名及び其
の代を問ふ
海機三八

ドイツ帝國憲
法

スはパリーの公安を維持する爲め、城中にある一萬二千人を殘留し、他は皆プロシアの捕虜となし、(三)フランスはプロシアに二億フラン(約八千萬圓)の償金の拂ひ、(四)フランスは三週間の休戦中フランス民會をボードー(Bordaux)に召集して和戦を決すべきこととせしが、ガンベッタ之に反對し議成らずして辭職し、チエール之に代て行政長官となり、ビスマルクと再び談判を開き、二月二十六日遂にベルサイユに假條約を結び、(一)フランスはエルザス、ロートリンゲンの二州を割讓し、(二)償金五十億フラン(約二十億圓)を三ヶ年内に仕拂ふべく、其間プロシア兵は國境を占領すべきことに決し、五月十日フランクフルトに於て本條約を締結せり。

ドイツ帝國の建設

パリ一の攻圍中ベルサイユのドイツ軍大本營に於て、聯邦の君主宰相等の間にドイツ統一の議漸く成熟し、一八七一年一月十九日プロシア王ウイレム一世ドイツ皇帝の位に即き、次で一八七一年四月十四日國會をベルリンに召集してドイツ憲法を發布せり。④憲法。プロシア王は世襲ドイツ皇帝となり、二十五聯邦の盟主として一切の行政の大權を掌握し、兼てドイツ帝國の陸海軍を攝し、聯邦議會(Bundesrat)

ドイツの統一
帝國議會 (Reichstag) は帝國立法の權を握り、各州の内政は其の自治に任すこととなれり。

チエールの政略と社會黨の騒亂

戦後のフランス

チエール、フランス大統領となりてより、粉骨碎身して國事に盡したるが、**◎社會黨の騒亂** 起て暴動をなせしかば、マクマオンを以て之を鎮壓せしめ、また巨額の償金を納濟せり。然るに帝政を希望するもの多かりしかば、一八七三年五月遂に職を辭し、マクマオン選ばれて大統領となり、保守的共和主義の憲法を發布し、大に紀綱を振起したるが、幾許ならずして共和黨の破る所となり、グレヴィ (Grevy) 選ばれて大統領となれり。

マクマオン大統領となる

イスパニアの内亂

イスパニアにてはレオポルド公の王位を辭するや、イタリア王の第二子アマデオ (Amadeo) 一世を迎立せしが、在位二年にして國內紛擾甚しく王遂に之を辭し、また共和國となれり。時にドンカロロの同名の子兵を北方に擧げしかば、全國一時無政府の状態に陥り、一八七四年舊女王イサベラの子アルフォンソ (Alfonso) 十二世軍隊の援助を得て王位に即き、一八七六年ドンカロロを國外に驅逐せり。

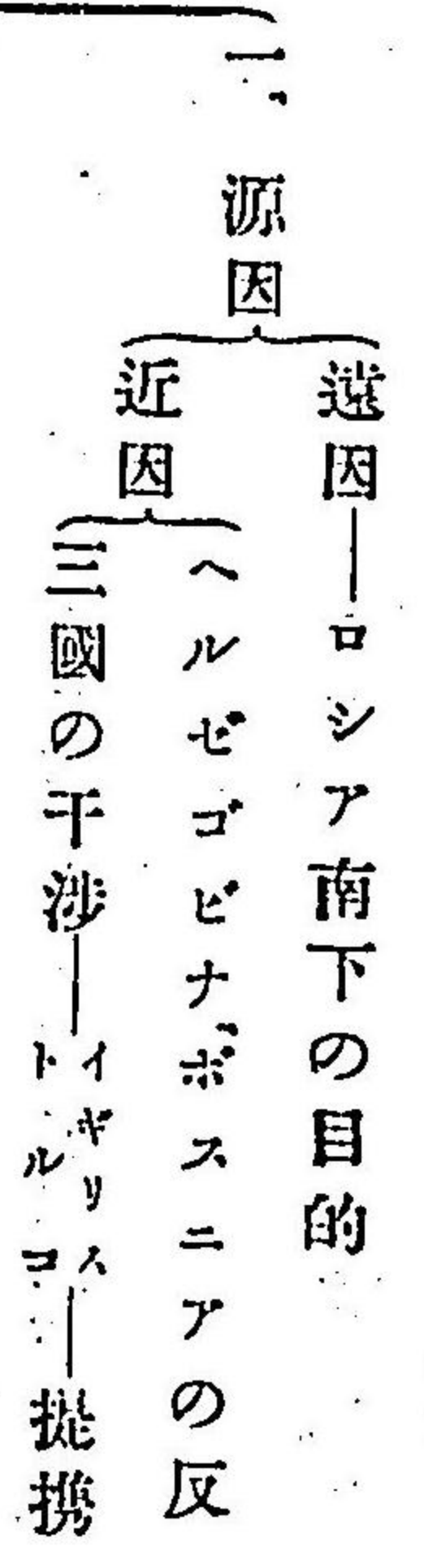
イスパニアの内亂と舊王統の恢復

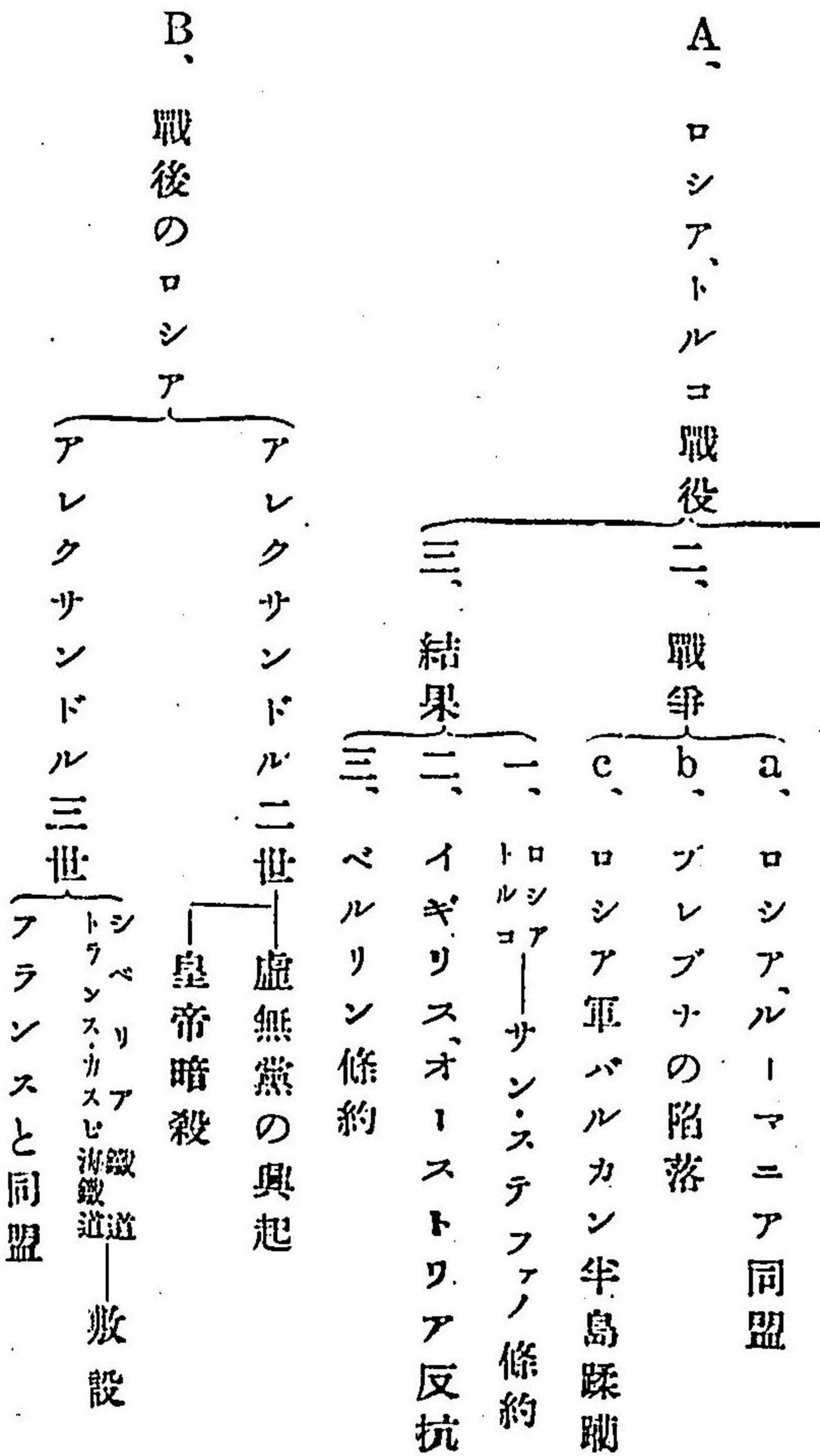
ポルトガルの内亂

是より先き一八二六年ポルトガル王ジアン六世死し、其子ブラジル帝ペドロ一世入てポルトガルの王位に即き、ペドロ四世と稱せしが、後幾許ならずして位を其幼女ドンナマリア (Donna Maria) に譲り、マリア二世と稱せしめしに、ペドロの弟ドム・ミグエル (Dom Miguel) マリアを廢して自立しぬ。是に於て一八三一年ブラジル帝ペドロ一世位を其太子ペドロ二世に譲り、自ら兵を率ゐるポルトガルに上陸して、ミグエルの伐ち、一八三四年に至り、之を國外に逐ひ、マリアの位を復せり。一八五三年マリア二世死して、其子ペドロ五世立ち、一八六一年に至り、其弟ルイス一世に傳へたり。

ドム・ミグエルの篡奪

第六十八章 ロシアとバルカン半島





アレクサンドル二世の雄圖

ロシアの國情

ロシア帝アレクサンドル二世はゴルチャコフを宰相として銳意政を執らしめ、農業を奨め、教育を興し、外交を勵まし、國勢大に揚りしかど、常に南下の目的を忘れず、トルコの衰弱とキリスト教徒の不平とを動機として、バルカン半島に手腕を伸ばさんとす。

ロシア、トルコ戦役

◎原因 一八七五年トルコの二州なるヘルゼゴ

ロシア、トルコ戦役の源因
ヘルゼゴビナの叛

三國の干渉

ビナ (Herzegovina) ボスニア (Bosnia) の人民トルコの重鎮とイスラム教徒の迫害とに堪へずして叛を企てしが、翌年モンテネグロ (Montenegro) セルビア (Serbia) ブルガリア (Bulgaria) 等諸州の兵起りてまた叛徒を援け、其勢甚だ猖獗なり。是に於てロシア、オーストリア、ドイツの三國之に干渉し、トルコ政府に説くに内政の改革、キリスト教徒の保護を施行すべきを以てせしに、トルコ政府之を用ゐざりしかば、更に同盟をイギリスに求む。されどイギリスはロシアの野心を知り、且つイギリス、インド間の交通の安全を保たんが爲め、トルコの存立を必要なりとせしかば、其勸誘に應ぜざりき。時にまたヘルゼゴビナの叛徒はモンテネグロ公を戴き、ボスニアはセルビア公を奉じて其勢頗る強盛に赴き、共にロシアの援助を得て、公然トルコに宣戰せしが、後幾許ならずして力屈して休戰を乞へり。

戦争

是に於てイギリスは列國と共に、一八七七年幾多の改革案をトルコに提出し、其實行を監督せんとしたるに、トルコは斷然之を却け、次でロシアが列國の同意を得て提出せる改革の案件をもイギリスの後援を恃て拒絶せしかば、三國の間遂に開戰するに至れり。◎ロシア、ルーマニアの

ロシア、ルーマニア同盟

ブレブナの役

サンステファ
ノ條約
フアンステ
高商(三八)
アノ條約の
山來及び結
果を述べ九

同盟 ロシア乃ちルーマニアと同盟條約を結び自由にして其國內を通過して郵便電信鐵道を使用する權を得しかばアレクサンドル二世は六月を以て軍隊をルーマニアに集め四軍を編制し三軍を分ちてドナウ河を渡りて左右よりブルガリアのトルコ軍を破りバルカン山脈を越えシブカ(Shipka)の險を奪て進めり。時にトルコの將オスマン・パシャー(Osman Pasha)を普レブナ(Plevna)の城砦を守り勇敢善く拒ぎしが十二月十日遂に降りアジアのカルス(Kars)もまた陥りしかばロシア軍進でバルカン半島の各地を占領しアドリアノブルを陥れ將にコンスタンチノブルに迫らんとす。トルコ遂に屈し一八七八年イギリスに向て仲裁を乞ひしがロシアは他國の干渉を好まず直にトルコとサンステファノ(San Stefano)の條約を結べり。

結果

●サンステファノ條約 三月三日を以て結ばれ、(一)モンテネグロとセルビアとはトルコより新に地を得て其領域を擴めルーマニアと共に其獨立を承認せられ、(二)ブルガリアは依然としてトルコの附庸たれどもキリスト教君主を戴き其行政と兵事とは獨裁を以て處斷し、ロシ

第九十二圖



ーリレスデ



フコチルゴ



ージラドンア

イギリス、オ
ーストリアの
反抗

ベコンスフ
ィンド伯

チスレリ
の車蹟
（高第學校、
三七）

ベコンス
フイルド卿
につき知る
所を記せ
（東事三七）

ベルリン
條約
要項

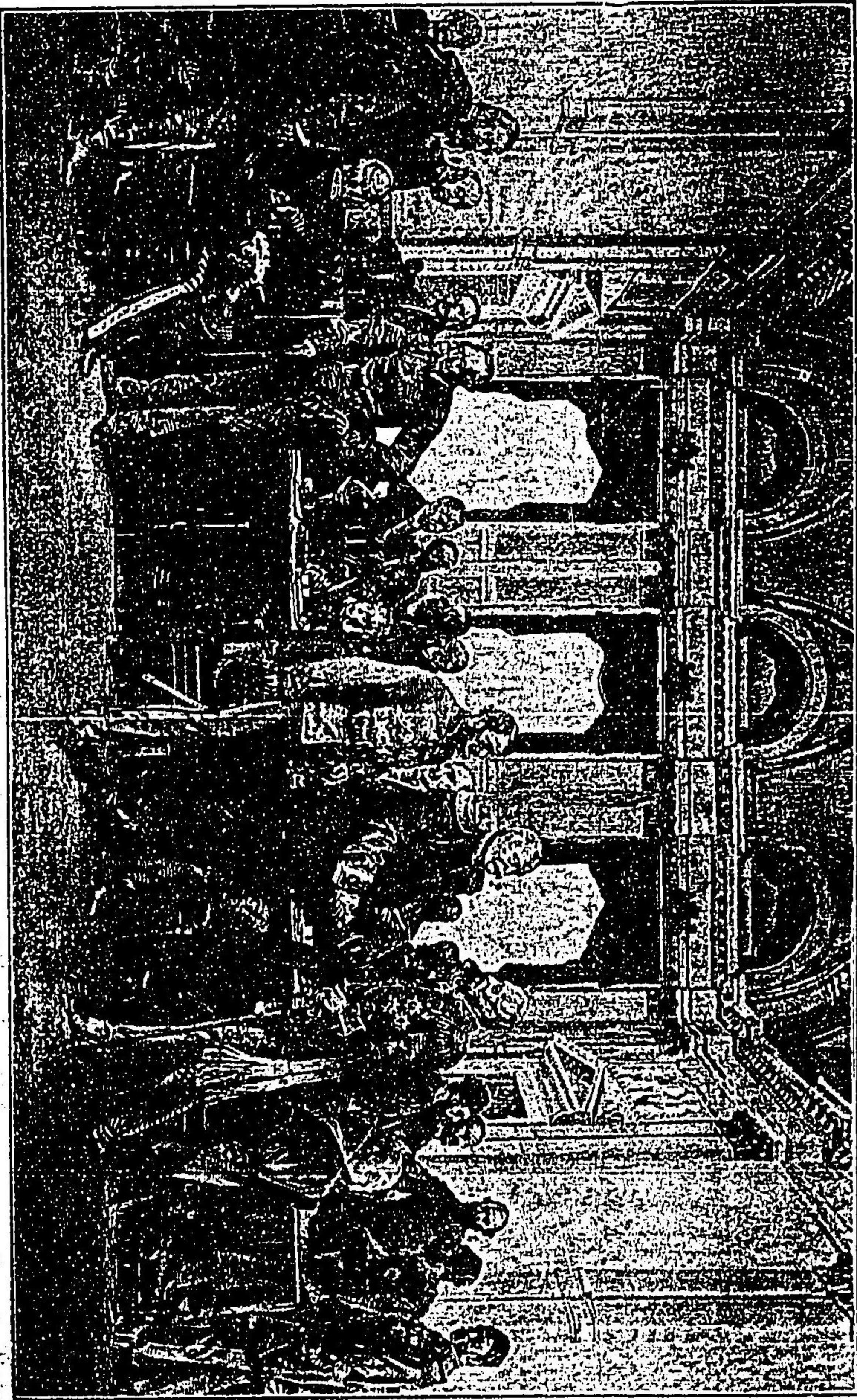
アの委員は其兵五萬と共に二ケ年間滞在することとなり、(三)トルコは
 ヨーロッパに遺れる僅少の土地に一定の改革を施すべきことを約し、(四)
 トルコはロシアに三億ルーブル(約三億圓)を弁償し、西アジアに於てアル
 メニアの大部、東ヨーロッパに於てはドブルジヤ(Dobrudsha)を割くことに
 決せり。◎イギリス、オーストリアの反抗 サンステファン條約の當否に
 關して忽ちヨーロッパの紛議を來せしが、中にもイギリス、オーストリアは
 深く反抗の態度を執り、イギリス首相ベコンスフィールド(Beaconsfield)伯
 チスレリ(DIsraeli)は國會の協賛を経て出師準備をなし、其條約の破壊
 を力め艦隊を地中海に游弋せしめて示威運動をなし、オーストリアもま
 た陸兵を派してロシアに嚴談せり。既にしてイギリスはトルコと秘密條
 約を結び、キプロス島を割かしめたれば、物情洶々戰雲ヨーロッパの天を蔽
 へり。◎ベルリン條約 是に於てビスマルクは仲裁の勞を執り、ロシア
 のゴルチャコフもベコンスフィールド伯に讓る所あり、一八七八年六月十
 三日より七月十三日間に於てベルリン條約を締結し、(一)モンテネグロ、
 セルビア、ルーマニアは獨立して其領域擴張を減ぜられ、(二)ブルガリア

公領はドナツ河とバルカン山との間に其領域を限られ、(三)ブルガリアの南部は其西南を大に限られて東ルメリア(Roumelia)州となり、トルコに隸してキリスト教を奉ぜざる知事の支配を受け、(四)ロシア兵は六ヶ月以内に東ルメリア及ブルガリアを退き、一年以内にルーマニアを去るべく、(五)トルコはボスニア及びヘルゼゴビナの衛戍行政をオーストリアに委任し、(六)トルコはエビロス、テッサリアの一部をギリシアに譲るべき旨の勸告を受け、(七)ロシアは西アジアに於てバツム(Batum)を自由港とし、カルス(Kars)、アルダガン(Aldagan)其他二三の邊地を得、(八)トルコ並に爾餘のバルカン諸邦は宗教の如何に拘らず、政權の平等を享くることゝなれり。

ベルリン條約後のロシア

アレクサンドル二世は一八六一年二千四百萬の耕奴を解放せし爲めに、急激黨の反抗を受けしが、ベルリン條約後政府に反抗するもの益増加し、一八七八年遂に◎虚無黨(Nihilist)を組織せしかば、政府は是より苛酷なる方法を以て是が抑壓に力めしに、黨員の運動反て激烈となり、一八八一年帝遂に暗殺せられ、長子アレクサ

ロシアの内政と虚無黨



國の議會ノリム

アレクサンドル三世の事業

ニコライ二世

ンドル三世位を繼ぐに至れり。●アレクサンドル三世はイグナチエフ(Ignatieff)伯の説に従ひ、シベリア鐵道を起して極東との連絡を計り、後またトランスカスピ海鐵道を敷設し、フランスとの同盟を結び、國力發展に力を用ゐしが、一八九四年十一月死し、長子ニコライ二世繼ぎて益國威の擴張を力む、是れ即ちロシア現皇帝なり。

第六十九章 最近事件

A、ビスマルクの政策

- 一、三國同盟
- 二、軍制改革
- 三、社會黨壓抑
- 四、中央集權主義

B、イギリスの近情

- 一、アイルランド自治問題—改進黨の衰勢
- 二、經世の進歩
 - シナム西境征略
 - カナダ横貫鐵道敷設
 - トランニバル、オランニエ併吞

C、ギリシアの近情

- 一、クレタ問題——トルコに開戦
- 二、ギリシア失敗——テッサリア割譲

財政困難

- 一、スエズ運河開鑿
 - 二、トルコに獻金
 - 三、ニール河上流遠征
- の爲め

D、エジプト近情

- 一、イギリス——財政管理
- 二、アラビヤ反叛
- 三、イギリスの保護國

結果

- 一、イギリス、フランス、イタリア、オランダ、ベルギー、オランダ、イギリス併呑
- 二、フランス
- 三、イギリスの保護國

E、列強とアフリカ

- 一、イギリス、フランス、イタリア、オランダ、ベルギー、オランダ、イギリス併呑
- 二、フランス
 - チャニス、サハラ、ギネア
 - マダガスカル、ソマリ
 - 占領
- 三、其他ドイツ領東アフリカ、ベルギー王兼攝コンゴ
 - オーストラリア
 - グスマニア、ビクトリア
 - クィンズランド、南オーストラリア
 - ニュージージーランド、フィジー

F、大洋洲

- 一、ドイツ
 - カイゼルヴィルムランド
 - ビスマルク諸島
 - マルシアル、ソロモン、サモア群島
 - ニューカレドニア
 - ツアモタ
- 二、フランス
 - 一、ハワイ合併
 - 二、イスパニアと戦争
 - 西インド一部
 - フィリピン群島
 - 占領
 - 三、サモア群島占領

G、アメリカ合衆國の近情

- 一、日清戦役
- 二、列國のシナ借款
- 三、北清事件
- 四、日本、イギリス同盟
- 五、日本、ロシア戦役

H、極東の形勢

志を達せんとしてフランスと同盟するを見て之に當らんとし、一八七九

三國同盟

年オーストリアと防禦同盟を結びしが、一八八一年フランスのチャニスを征して保護國となすや、ドイツはまたイタリアに説き、一八八三年ドイツ、オーストリア、イタリアの間に ③三國同盟 を結び、政治上ヨーロッパの平和を維持し、またキール(Kiel)運河を開鑿せり。ビスマルクまた軍制を改め、陸軍々人の總員を七十萬となし、ドイツ兵の強を誇るに至らしめたるが、時に社會黨の運動頗る活潑にして、ドイツ、イタリアの帝王屢、危害を被ふらんとせるを見、是が抑壓政策を執りしかば、大に人望を失ひ、また其專制及中央集權主義の非難を受けぬ。一八八八年三月ウイレム一世死し、フレデリキ三世、ウイレム二世相次で立つに至り、ビスマルク信用を失ひ、遂に退隱して一八九八年を以て死せり。

ビスマルクの退隱

イギリスの近情

是より先きアイルランドには自治黨起て、アイルランド國會を設け、アイルランドの國務を處理せんとし、其落着未だ決せざらしか、グラッドストーン(Gladstone)等の改進黨は之を主張して敗れ、其一派は分離して保守黨と結び、改進黨の勢遂に衰へぬ。此間イギリスの經略は益、其歩を進め、シムスの西境を征服し、アメリカにはカナダ横貫鐵道を

グラッドストーン

敷設して極東交通の捷路を開き、またアフリカに於てはトランスバール(Transval)及オランジ(Oранже)二國を併吞せり。

ギリシアの近情

アルメニアの虐殺とクレタ問題

ギリシアは獨立後國運豫期の如く進まず、ベルリン條約後幾多の紛擾を経て漸くテッサリアを得たるが、トルコに對する不平は常に國民の腦裏を去らざりき。④クレタ問題 是より先きアルメニア人トルコの暴虐に苦みて蜂起し、一八九四年大虐殺を被ふりて益、反抗の態度を示し、クレタ島もまたトルコの專制政治を脱せんとし、屢、反亂を企てしが功なく、島人益、反抗の心を強め、一八九六年斷然トルコに離れてギリシアに合同せんことを望むに至れり。ギリシア乃ち之を機とし、兵を發してクレタに上陸し、トルコに開戦を布告したるが、ロシア、オーストリア、フランス、ドイツ、イギリス、イタリア等の列國は該島を封鎖し、反徒及ギリシア兵を撃ち破れり、然るにトルコは此干涉を辭して獨力ギリシアを破りしかば、列國遂にトルコに向て和を結ばしめしが、クレタを其保護國となし、ギリシアをしてテッサリアを割き償金を出さしめて事收まれり。

ギリシアの失

エジプトの近情

一八四九年メヘメッドアリに繼て孫サイド(Said)立つ

レセップス
につぎ知る
所を記せ
高橋學外
三六、東外
三七、山口
高橋三八
スエズ運河の
開鑿
スエズ運河
は凡そ何年
頃何人の手
に依りて開
されしか其
頃エジプト
の財政及び
外債との關
係如何の關
東京商船
三九
二國の干渉
スエズ運河
の落成の年
代を記せ
海兵三九
アラビヤの
シアの叛亂と
國民黨の蜂起
アラビヤに
マシアに就
き知れる所
を記せ
山口高橋
三八
フランスの經
略

や、フランス人レセップス (Lesseps) を引てスエズ (Suez) 運河開鑿の事業を起し、中途にして死するや弟イスマイル (Ismaïl) 立て遺志を紹ぎ、一八六九年に至て之を成功せり。されど之が爲めに莫大の負債を生じ、次て一八七三年獨立を得ん爲めにトルコ朝廷に獻金したるを以て、遂に財政の困難を來し、一八七五年スエズ運河の株券をイギリスに賣却し、財政整理をイギリス、フランスの二國に依頼せり。◎二國の干渉 是より二國はエジプトの内政に干渉せしかば、國民の不平大に起り、遂に二國の羈絆を脱せんことを企つるに至る。◎アラビヤの叛亂 (Arabi Pains) の叛亂 一八八一年九月アラビヤの國民黨の首謀者となり、武力を以てイギリス、フランスの官吏を殺戮し、自ら内閣を組織して陸軍大臣となりしが、イギリス直に兵を發して之を鎮定し、アラビヤを執へてセイロン島に流し、終身禁錮に處せり。◎イギリスの勢力 フランスは此騒亂鎮定に關せざりしかば、是よりイギリス全く勢力を得てエジプトの財政管理權を獨占し、事實上終にエジプトを保護國となせり。

列國とアフリカ

◎フランスの經略 フランスは一八八一年チュニスを保護國となし、サハラ (Sahara) 沙漠及其南方を領域とし、フランス領ギネア、象牙海岸に聯絡し、一八九五年にはマダガスカル (Madagascar) を伐て保護國となし、一八九八年にはフランス領ソマリ (Somali) とフランス領コンゴ (Congo) との聯絡を計り、遠征隊を發してニール河の上流ファシタダ (Fashoda) を占領するに至り、忽ちイギリスの抗議を受け、其兵を撤せり。◎イギリスの經略 アフリカの南端にオランダの有なるケープ植民地 (Cape Colony) あり、一八一四年イギリス之を得たるに植民の不平者は北方に移りてトランスバール、オランイユの二自由國を建設せり。◎イギリス、トランスバール戦争 然るに二國は近時金剛石を産する爲め、移住するイギリス人頗る多かりしかば、イギリス拓殖務大臣チャンバレン (Chamberlain) は移住外人に參政權を與んことを強請したるも、議協はずして一八九九年遂に戦端を開きぬ。大統領クリューゲル (Krüger) 兵を集めて拒ぎ戦ひしが、一九〇二年に至り遂に屈服し、イギリスは此に南アフリカ共和國を置けり。其他東部にドイツ領東アフリカ、西部にベルギー王兼攝のコンゴ (Congo) 自由國ありて各、其經略を施しつゝあり。

イギリスの經略

トランスバール戦争

を保護國となし、サハラ (Sahara) 沙漠及其南方を領域とし、フランス領ギネア、象牙海岸に聯絡し、一八九五年にはマダガスカル (Madagascar) を伐て保護國となし、一八九八年にはフランス領ソマリ (Somali) とフランス領コンゴ (Congo) との聯絡を計り、遠征隊を發してニール河の上流ファシタダ (Fashoda) を占領するに至り、忽ちイギリスの抗議を受け、其兵を撤せり。◎イギリスの經略 アフリカの南端にオランダの有なるケープ植民地 (Cape Colony) あり、一八一四年イギリス之を得たるに植民の不平者は北方に移りてトランスバール、オランイユの二自由國を建設せり。◎イギリス、トランスバール戦争 然るに二國は近時金剛石を産する爲め、移住するイギリス人頗る多かりしかば、イギリス拓殖務大臣チャンバレン (Chamberlain) は移住外人に參政權を與んことを強請したるも、議協はずして一八九九年遂に戦端を開きぬ。大統領クリューゲル (Krüger) 兵を集めて拒ぎ戦ひしが、一九〇二年に至り遂に屈服し、イギリスは此に南アフリカ共和國を置けり。其他東部にドイツ領東アフリカ、西部にベルギー王兼攝のコンゴ (Congo) 自由國ありて各、其經略を施しつゝあり。

大洋洲に於けるイギリスの経略

ヨーロッパ諸國と大洋洲

●イギリスの経略

ジェームス・クックの探検

よりオーストラリアはイギリスの植民地となり、一八〇三年以後タスマニア (Tasmania)、『クトリア (Victoria)』、『クイーンズランド (Queensland)』及南オーストラリア等をはじめ、ニューゼーランド (New Zealand)、『フィジー (Fiji)』群島にも植民しぬ。●ドイツの経略

ドイツの経略

フランスの経略

ドイツは一八八四年以來着々経略に従事し、カイゼル・ウィルヘルムスランド (Kaiser Wilhelmsland)、『ビスマルク諸島』、『マルシャル (Marshall) 群島』、『ソロモン (Solomon)』、『サモア (Samoa) 群島』の一部を植民地となせり。●フランスの経略

アメリカ合衆國の近情

アメリカ合衆國はモンロー主義を奉じて、約七十年間他國がアメリカの事件に干渉せざるを以て満足せしが、大統領マッキンリー (McKinley) に至り帝國主義を執り、進で海外に力を伸ばさんとす。●ハワイ (Hawaii) 王國の合併

ハワイの興亡

ハワイは一八一〇年を以て獨立國となりしが、女王リリウオカラニ (Liliuokalani) に至り革命起り、一八九四年七月女王を廢して、共和國となりしが、一九〇八年八月合衆國の領となし新政廳を置いて之を治むるに至れり。●アメリカ合衆國とイスパニアとの戦役

アメリカ合衆國とイスパニアとの戦役

パリ條約

一八九五年キューバ島民イスパニアの軍政に堪へずして反を謀るや、翌年フィリピン島民もまた叛旗を立てたり。イスパニア兵を發して之を伐ちしに、マッキンリーはキューバ合併の宿望を遂げん爲め、兵を遣してキューバを救ひしかば、イスパニアは直に合衆國に開戦を布告し、二國遂にキューバ、フィリピンの二方面に於て戦を開くに至れり。イスパニア連戦皆敗れ、一八九八年十二月 ●パリ條約 を結て、(一)キューバ島の獨立を認め、(二)イスパニアは西インド諸島、フィリピン群島とを合衆國に割き、(三)合衆國よりは、四千萬圓をイスパニアに仕拂ふべきこととなれり。次で一九〇〇年に至り、合衆國はイギリス、ドイツと協商して西經一七一一度以東のサモア群島を領有せり。

極東の形勢

此時に當りロシアは北よりし、イギリス、フランスは南よりして極東に其勢力を伸ばさんとし、シナ方面は世界運動の中心となりしが、端なくも ●日清戦役 ●は破裂せり、其原因は朝鮮保護にありて、一八九

日清戦役

馬關條約

三國干涉

北清事件

日本イギリス同盟

日本ロシア戦役

四年東學黨蜂起に端を開けり、其結果我國は大勝を得、一八九五年馬關條約によりて、清國は遼東半島、臺灣、澎湖列島を割き、償金二億兩を出せり。然るにロシア、ドイツ、フランスの三國は同盟を結びて遼東半島の還附を迫りしかば、我邦は其勸めに應じたり。既にしてドイツ宣教師の山東省にて殺害せらるゝや、ドイツは之を口實として清に迫り、膠州灣を九十九年借款するに至り、ロシアもまた大連灣、旅順を永借し、次て滿洲鐵道敷設權を得、イギリスは威海衛を借款し、フランスは廣州灣の借款及トンキン鐵道の延長を要め、列國共に清國を蠶食せんとす。●北清事件 かくの如き外人の壓迫は終に清人の排外的運動を起さしめ、一九〇〇年義和團の匪徒亂を作して北京に入り、各國公使館を圍み、外國人殆ど其害を被ふらんとせしかば、日本、イギリス、ロシア、フランス、ドイツ、合衆國等の兵聯合して北京を衝き、各國人を重圍の中より救ひぬ、翌年清廷和を乞ひ事緩に定まれり。●日本イギリス同盟 此間ロシアはシベリア保全を名として滿洲を占領せしが、一九〇二年我邦はイギリスと同盟を結び、深く國交を締するに至れり。●日本ロシア戦役 ロシアはさきに遼東還附を勧誘

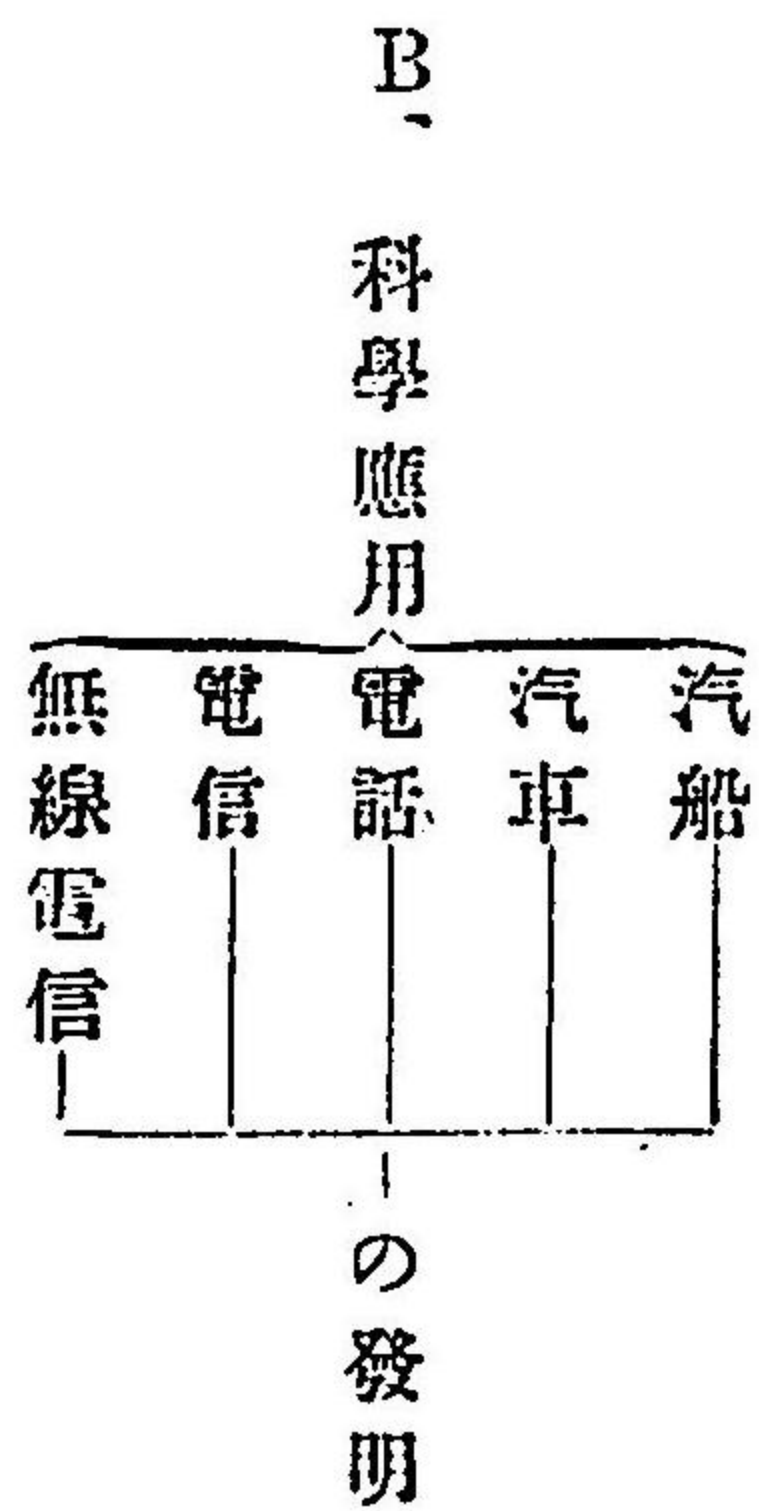
ポーツマスの和約 黃禍論

し、また朝鮮の内政に干渉せしのみならず、恣に滿洲を占領して容易に撤兵せず、我邦の抗議に遇ふも言を左右に托して之を遷延し、其間着々滿洲占領の經略をなせしかば、一九〇四年彼我の平和遂に破れ、我軍直に遼東に入て敵を攘ひ、また金州半島を奪て旅順を降し、遂に奉天の大戦に大勝を得、海軍もまた日本海に於てバルト艦隊を殲滅せしかば、一九〇五年八月合衆國なる ●ポーツマス (Portsmouth) の和約に於て平和を克復し、ロシアはカラフトの南半を割き、滿洲に於ける既得權を放棄せり。此戰に於て我國の實力愈、世界に顯はれ、遂に黃禍論のヨーロッパ人間に高まるに至れり。

第七十章 最近の進歩

哲學	史學
A、學術政治經濟——大進歩	

文學
科學



- C. 社會的事業
- 一、交通—スエズ運河、合衆國橫斷鐵道、シベリア鐵道
 - 二、博愛的事業—
 奴隸解放、刑法改正
 布教事業、慈惠的學校、病院
 - 三、萬國共同事業—
 赤十字社、萬國博覽會
 萬國平和會議

十九世紀の進歩

第十九世紀は第十八世紀文物興隆の後を受たれば、學術工藝の勃興空前の盛を呈し、學說の研究益、深く其應用頗る弘まり、社會萬般の進歩實に驚くべきものありき。

哲學

ドイツはカント出でて、形而上派を啓きしより、哲學の研究頗る盛になり、ヘーゲル (Hegel) ヘルバルト (Herbart) ロット (Lotze) 等樂天主教を唱へ、シュッペンハウアー (Schopenhauer) ハルトマン (Hartmann) 等厭世主義を執り。フランスにてはアウグスト・ロント (August Comte) 實驗哲學を創め、イギリスにてはジヤン・スタアルト・ミル及スペンサー其說を祖述し、ベンサム (Bentham) は功利說に傾きたり。

史學

デンマルク人ニールブル (Niebur) 史學に一生涯を開きしが、ドイツ人ランケ (Ranke) 科學的研究の法を大成し、ジューベル (Sybel) トライチケ (Treischke) モムゼン (Mommsen) 之に次ぎ、フランスにてはギゾー (Guizot) テーヌ (Thaine) イギリスにてはグロート (Grote) フリーマン (Freeman) ステューブ (Stubbs) ハラト (Hallam) ガーデナー (Gardiner) 等の大家出でたり。

政治經濟

ドイツ人ブルンチョリー (Brunschlij) グナイスト (Gneist) リスト (List) フランス人シスモンデ (Sismondij) バスチア (Bastiat) イギリス人ベンサム、アウスチン (Austin) メイン (Main) ブラックストーン (Blackstone) 等は斯學の大家を以て稱せらる。

ドイツの哲學

フランス、イギリスに於ける哲學

十九世紀の史學

政治經濟學の大家

イギリス文學

文學

文學は各國とも頗る發達し、名家多く輩出せり。◎イギリス文學
 バイロン・バーンス (Burns)・ワースワース (Wordsworth)・サウゼイ (Southey)・
 ショナー (Shelley)・テニスン (Tennyson)・ブラッニン (Browning) 等は詩を以
 て著はれ、マコーレー (Macaulay)・カーライル (Carlyle) は散文を以て著はれ、
 スコット (Scott)・ディケンズ (Dickens)・サッカレー (Thackeray)・シャルジエリオット
 (George Eliot) 等は小説を以て著はる。◎アメリカ文學 ロングフェロー
 (Longfellow) の詩篇最も人口に膾炙し、ローウェル (Lowell) は創作批評に名を
 得、アービンズ (Irving)・ホーレン (Hawthorne) 等の小説及エマソン (Em-
 erson) の文章は最も多く愛讀せらる。◎ドイツ文學 ハイネ (Heine)・フ
 ライタン (Freitag)・レナツ (Lenau) 等尤も鳴る。◎フランス文學 デウ
 ヴー (Dumas)・ドーゴー (Hugo)・ラマルチエ (Lamartine)・ゾラ (Zola) 其傑出た
 り。◎ロシア文學 ツルゲネフ (Turgeneff)・トルストイ (Tolstoj)・トルキイ
 (Gorki) 第一の作家たり。

科學

科學もまた頗る發達し、ドイツのマイエル (Meyer)・ヘルムホルツ (He-
 Imholtz)・イギリスのグロウ (Grove)・トムソン (Thomson) 等勢力不滅説を唱

化學

天文學

醫學

建築

繪畫

彫刻

音樂

科學應用の進歩發展

導し、ダーウィン (Darwin)・ハクスリー (Huxley) は進化論を説き、イギリスのファ
 ラデー (Faraday)・ドイツのリービヒ (Liebig) は化學に、フランスのラプラス
 (Laplace)・ルヴェリエ (Leverrier) は天文學に、ドイツのヴァンヒョッフ (Virchow)・
 コッホ (Koch) は醫學に各、新生面を開けり。

美術

◎建築 は擬古風イギリス、ドイツ、フランスに復興し、次でゴチック風
 流行せり。◎繪畫 はイギリスのターナー (Turner)・ハント (Hunt)・ドイツ
 のオーベルマンク (Oberbeck)・ホルネリッス (Cornelius)・アメリカのコール (Co-
 ー) 等名家たり。◎彫刻はフランス、イタリア最も盛にしてアメリカ之に
 次ぐ。◎音樂 はドイツ最も盛にしてシューベルト (Schubert)・ワーグネル
 (Weber)・ワグネル (Wagner)・シューマン (Schumann)・メンデルソーン (Mendelsohn)
 等妙手たり。

科學の應用

第十八世紀の末ジェームス・ワット蒸汽機關を改良せしより、第
 十九世紀の初めアメリカ人ロバート・フルトン (Robert Fulton) 之を汽船に應
 用せしが、イギリス人ジョージ・ステュブンソン (George Stephenson) 汽車を製し、
 大に交通運搬の便を助けたるが、アメリカ人トマス・エジソン (Tomas Edison)